

## 支那人の文弱と保守

## 緒論

個人に就いて観察しても、一人一人にその箇性がある様に、國民なり民族なりにも、それ／＼特有の氣質性癖を有つて居る。それを國民性又は民族性と申すのである。一の國民なり民族なりの間には、随分種々なる人間があつて、何等統一する所がない様であるが、他の國民や民族と比較すると、自然に國民毎に、民族毎に、各自の特質を有つて居る。

支那人にも無論その民族性がある。支那人の尤も顯著なる民族性は、文弱的であること、保守的であることである。支那人が概して文弱保守であるといふことは、廣く世間に知れ渡つて居つて、決して耳新しい事ではない。併し歴史上の事實と照り合せて見ると、この支那民族の特質が一層明瞭になる。故に吾が輩はこの論文に於て、主として歴史上の事實を基礎として、支那民族の文弱で保守であるこ

とを證明せようと思ふ。

## 一 支那人の文弱 (上)

支那人が平和的文弱的である原因は種々あらうが、その主要なるものを擧げると、次の如くであらうと思ふ。

- (一) 支那人の先天的性質が較る文弱的である。
- (二) 支那人の間に行はれた古來の學説は、一般に平和思想を鼓吹した。先づ儒教を觀ると、その祖師たる孔子は、弟子の子貢に治國の要件を尋ねられた時、足、食、足、兵、民信之の三箇條を擧げて居る。即ち一國に財政と軍備と、上下の信用が必要であること答へた。子貢は更にこの三者の中で、不得已事情の爲め、その一を去るべき必要ある時は、先づ何れを去るべきかと尋ねたら、孔子は先づ軍備を去ると答へた。子貢が最後に財政と信用との二者の中で、是非その一を去らざるべからざる場合には、如何すべき歟と尋ねた時、孔子は財政を去ると答へて居る。要するに孔子の考へでは、立國の要素は信用に在る。上下相信せぬ國は亡國である。故に信用が



第一で、次が財政、軍備は更にその次に來るべきものである。この孔子の意見は、萬古に互れる眞理であつて、決して軍備を輕視したものでない。孔子自身は有文事者、必有武備と申して居る位で、文弱一天張りの人ではない。併し孟子などは、仁者無敵主義を鼓吹する餘り、仁義だに行はば、軍備は論ずるに足らぬかの如き口氣を漏らし、可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣など、武器無用に近き意見を述べて居る。兎に角後世の儒者は、多く軍備を輕視する傾向を有つて居ることは、争ふべからざる事實である。

併し儒教は較る弊の少き方である。孔子と前後して出た老子の如き、墨子の如き、何れも極端な平和主義を説いて居る。不争を主張する老子、兼愛博愛を主張する墨子は、軍備を無用とし、戦争を排斥するのは當然のことである。かゝる學說の影響を受けた支那人の間には、自然戦争を厭忌する氣風が増進したに相違ない。

(三) 先天的に利害打算の念慮の發達した支那人は、小にしては争闘、大にしては戦争、何れも危険の割合に、利益が伴はぬことを夙に承知して、成るべく戦争や闘争をせぬ慣習を養成した。實際支那の塞外の北狄などは、縦令之を擊破した所が、得る

所失ふ所に及ばず、功は勞を償はぬ憾がある。多少の歳幣を贈つて、始めから彼等と戦争せぬが利益である。支那歴代の政策は、利祿を以て北狄を懷柔して、北邊を侵擾せしめぬ様に力めて居る。(往古の支那人は、必しも後世の如く、爾く怯懦ではなかつた。故に漢時代には、胡兵五而當漢兵一とさへ稱せられた。事實『史記』や『漢書』『後漢書』を見ると、荆軻とか聶政とか、傅介子とか段會宗とか、陳湯とか班超とか、快男子が中々多い。所が歴代の誤つた打算主義、妥協主義の積弊が、一代と支那人の氣骨を鎖磨させ、遂に今日の如き怯懦至極な支那人を作り上げたものと思ふ。)

支那人が文弱である原因は、兎に角、支那人は個人としても腕力沙汰は甚だ稀で、團體としても戦争は好まぬ。支那人の所謂喧嘩は、喧嘩口論である。この意味での喧嘩ならば、支那人は世界有数の喧嘩好きかも知れぬ。支那の學堂や官衙など、人の群集する場所には、必ず禁止喧嘩と掲示してある。實際支那人は口喧しいが、決して手出しはせぬ。吾が輩の支那留學中、殊に北支那留學中には、殆ど支那人の掴み合を見たことがない。非常な權幕で口論する場合でも、手出しはせぬ。稀に



掴み合を始めても、我々日本人から見ると、極めて悠長なもので、傍で見て居ても齒癢さに堪へぬ程である。

掴み合すらせぬ支那人が、戦争で血を流すことを好まぬのは當然である。支那の武といふ字は、止戈の二字から成立した會意文字である。故に武とは武器(戈)を用ふるのではなく、武器を用ひぬことである。亂暴者が凶器を振り舞はすのを差抑へるのが、武の本意である。『左傳』に武の意義を解釋して、武禁暴戾兵とあるのがそれである。『易』に神武不殺と申して居る。武の神髓は不殺に在る。漫に人を殺害する者は武とはいへぬ。

支那では唐時代から武廟といふものが出来た。之は孔子の文廟に對して、周の太公望といふ軍師を本尊として、軍の神と崇めたもので、歴代の名將をもこゝに從祀してある。所が北宋の太祖が曾て武廟に詣り、そこに從祀してあつた秦の白起を指して、この人は降卒數十萬を坑殺した。不武の甚しきもの、武廟に列すべき資格がないとて之を排斥した。曩の神武不殺といふ句と對照すると、武の本意がよく發明される筈と思ふ。

春秋五霸の一人にも數へられる宋の襄公は、楚と泓といふ河の邊で戦をしたことがある。宋の軍勢は敵軍の河を濟る最中を攻撃せんとした時、襄公は君子は人の困厄に乗ず可らずとて之を許さぬ。やがて敵軍が河を濟り終り、未だ陣を布かざるに乗じて、宋軍が攻撃を開始せんとした時、襄公は復た禮に背けりとて之を許さぬ。敵の用意整へるを待つて、堂々と戦を開いたが、却つて宋軍敗亡いたし、襄公自身も痛手を負ひ、遂に之が爲に落命したことがある。所謂宋襄之仁とて、後世の物笑の一となつて居るが、併し『公羊傳』を見ると、當時の世評は非常に襄公を褒めて、縱令戦争に負けても禮儀を忘れぬ所が君子である。雖文王之戰亦不過此也と申して居る。

支那の文學を見渡しても、尙武的のものは甚だ稀で、その反對に兵役の厭ふべきこと、征戰の苦きことを詠じたものが頗る多い。既に『詩經』を見てもこの憾はあるが、後世の詩文になると、一層この傾向が目につく。東漢の陳琳の飲馬長城窟行に、

生兒慎莫舉，生女哺用脯。君獨不見長城下，死人骸骨相撐拄。



とあるのは、唐の杜甫の兵車行に、

信知生男惡。反是生女好。生女猶得嫁比鄰。生男埋沒隨百草。

とあると同様、男子は兵役に就かねばならぬから、出生せぬ方が若くば成長させぬ方が望ましい。女子にはかゝる苦勞がないから、男子を生むよりは、較る女子を生む方が利益であると云ふ思想を、露骨に述べたものである。その兵車行に出征の士卒の一族が別を惜しむ有様を叙して、

爺孃妻子走相送。塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足橋道哭。哭聲直上千雲霄。

とあるが、衣を牽き袖に絶つて哭泣するなど、随分女々しきことではないか。唐の王翰の涼州詞に、

醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

の句がある。洒脱の様にも見えるが、出征軍人の心得としては、不都合千萬と申さねばならぬ。唐の李白の戰城南も、唐の李華の弔古戰場文も、何れも戦争を詛ふたものである。

その尤も極端なものは、唐の白居易白樂天の新豊折臂翁といふ新樂府である。

この樂府は當時の都の長安附近の新豊といふ土地に住居する、右臂の折れた老翁の一生を歌つたもので、この翁が二十四歳の時、雲南征伐に徵發されたが、出征が厭はしき儘、夜中われと我が手で、その右臂を馱き折り、生れも付かぬ不具者となり、遂に兵役を免除されて故郷に歸り、八十八歳の今日まで長命して居る。折つた臂は時々痛を起して、徹晝眠られぬ程の苦痛はあるが、六十餘年前に雲南地方へ出征した人は、皆異域の鬼となつて、一人も故郷の土を踏んだものはない。之に比して折臂の翁の一生が、遂に幸福であると述べて居る。

此臂折來六十年。(中略)至今風雨陰寒夜。直到天明痛不眠。痛不眠終不悔。且喜老身今猶在。不然當時瀟水頭。身死魂孤骨不收。應作雲南望鄉鬼。

いかに邊功を戒むる目的で作つた樂府とはいへ、随分手嚴しいものではないか。〔されど白居易のこの記事は、決して一片の空想でなく、率直なる事實である。隋末から唐時代にかけて、當時の青年が、吾とわが手や足を折傷して、之を福手・福足と稱して、兵役に就くことを避けた事實が、信憑すべき歴史に明記されて居る。〕

かゝる國柄であるから、支那では古から軍人となることを不面目として、兵役に



就くのを非常に嫌忌する。一例を示すと、唐時代には、文官の方の進士の科には志望者が多いが、軍人の方の武舉には殆ど志望者が無い。當時軍人の位置は極めて低い。一家の中で軍人となる者があると、その父兄等は之を非人扱にした。唐代の兵制は我が國のそれと同様で、地方から京師の守護に番上するのであるが、これを衛士とも侍官ともいふ。當時相罵る時には侍官と稱した。日本なら差當り賤民とか隱亡とかいふ格である。軍人の位置の低いこと、殆ど想像以上といはねばならぬ。

軍人の位置の低いのは、決して唐時代に限つた譯ではなく、支那歷代を通じての現象である。支那の諺に好鐵不打釘、好人不當兵といふことがある。他に使途のない人間が兵役に就くべく満足の間人は決して軍隊に入るべきものでないといふ意味である。また鐵到了釘、人到了兵といふ諺もある。人間社會の最下底に零落する意味である。支那では兵卒と乞食とは、略同様に認められて居る。我が國の花は櫻木人は武士といふに對照すると、その間に自然國民性の相違も察せられるかと思ふ。

兵役が爾く卑下せられる支那人の間に、餘り勇將の現はれ來る筈がない。支那の歴史を觀ると、軍人の中に隨分英雄豪傑が多い様であるが、實際はいかゞであらう歟。日本の軍人の標準に當て箴めると、多大の割引せなければならぬ様に思はれる。その一例としてこゝに唐の李勣と我が蒲生氏郷とを比較して見たい。

唐の太宗は貞觀十九年(西曆六四五)に高麗征伐に着手して、水陸兩道から高麗を攻めた。その時の總大將は有名な李勣で、太宗自身も遼東に出掛けて、軍事を監督するといふ、中々大仕掛の征伐をやつた。やがて唐軍は遼東の諸城を陥れて、愈高麗の都城の平壤に押寄せるといふことになつた。所がその途中に安市城がある。この城は今の奉天省の蓋平縣の東北に在つて、中々要害堅固に構へてある。ソコで太宗は李勣に向ひ、安市城は地險にして兵強く、殊に城主は智略凡ならずと聞く。この城こそ孫子の兵法に謂ふ所の、城有所不攻といふものに當る。この城には押への兵を置き、直に前進して根本の平壤を擣かんと申されたが、李勣は之に反對して、安市城をその儘にしては、軍威を損すること夥しい。この要害な安市城を攻め落せば、他は戦はずして風靡せんとして、是非安市城攻撃を主張したから、太宗は不安



心ながらも、總大將の面目を立てる爲め、

以公李勣爲將。安得不用公策。勿誤吾事。

とて強いては争はずに、李勣の意見に従つた。かくて安市城攻撃の全責任は、李勣の双肩に懸つた。李勣は士卒を悉くして、安市城を攻め立てたけれど、三ヶ月に及んで城は抜けぬ。その中に雪は降り出す、糧は乏しくなる。唐軍は散々の體で本國に引き揚げた。

唐の太宗といへば、三代以後の明君である。その赫々たる武功に汚點を印したのは、安市城の失敗である。この失敗の責任は、曩に太宗に反對して、安市城攻めを主張した李勣に歸せなければならぬ。李勣にして言責職責の何物たるかを知つたなら、是非安市城を攻め落さなければならぬ筈である。到底攻め落すことが出来ずは、自から責を引いて處決する位の覺悟があつて欲しい。然るに李勣は吾不關焉を極めこんで、長い一生を送つたのは、支那第一流の名將と仰がれる李勣の所作としては、甚だ感心出来ぬと思ふ。

我が豊臣秀吉の天正十五年(西曆一五八七)に、九州征伐に着手した時、略これと同

様の事件が起つた。豊前の秋月種實の兵は、島津の後援を得て、巖石城に立籠つた。巖石城は音に聞えた險阻である。城將熊谷越中も一廉の武將であるから、秀吉は蒲生氏郷を巖石城の押へとして、本軍を前進せしめようと計畫した。氏郷は之を無念に思ひ、是非巖石城の攻撃を願ひ出たが、秀吉は容易に許さぬ。強願再三に及んで、秀吉も終に氏郷の請を許した。ソコで氏郷はこの城を得攻落さねば、切腹と覺悟を定め、必死の勢で攻め立て、僅に一日の中に、さしもの巖石城を陥落させた。この軍威に風靡して、間もなく九州平定の功を收むることが出来た。

安市城と巖石城とは、必しも同様に行かぬかも知れぬ。併し李勣が氏郷と同一の覺悟を有つて居つたら、今少し何とか良き結果を收め得られたに相違ない。武將としての氏郷の聲望は、遂に李勣の下に在らうが、自分の責任を重するといふ點では、萬々李勣に優つて居る。

責任の自覺、自覺に對する決心、之が我が武士道の神髓である。支那の軍人はこれに缺陷がある。支那の梁啓超は曾てその『飲氷室文集』の中に、日本人には日本魂がある。即ち武士道である。然るに支那人には中國魂が見當らぬ。日本と支



那どの強弱の岐るゝ原因はこゝに在る。故に支那今日の最大急務は、日本人の日本魂に劣らぬ中國魂を製造するに在りと主張したことがある。中國魂は爾く容易に製造し得るであらう歟。西洋人の中には、支那にも日本に於けるメツケル、土耳其に於けるゴルツの如きものあらば、有力な軍隊が組織されると信じて居る者が多い。メツケルやゴルツでも、支那人に中國魂を與へることは容易であるまい。梁啓超の所謂中國魂の成否が、支那の今後の運命の岐かるゝ所であらう。

## 二 支那人の文弱 (下)

兵役を苦にし、戦争を厭ふ支那人は、概して外國に對して侵略を行はぬ。支那人は古代から華夏と誇稱して、四圍の異族を東夷、西戎、南蠻、北狄など、排斥して居るけれど、特別の場合の外は、決して之に兵力を加へぬ。輝德不觀兵とか、遠人不服則修文德以來之とかいふのが、支那人の蠻夷に對する大方針である。勿論この方針は理想で、實際に施しての効果は頗る疑はしい。

支那の北邊に居る塞外種族は、殺戮を以て耕作となし、掠奪を以て本業とする蠻

民である。如何に支那人が平和に眷戀しても、彼等は容赦なく侵略を加へる。殷時代の獯鬻、周の獫狁、秦漢時代の匈奴、隋唐の突厥、回紇、宋の契丹、女真、蒙古の如き、皆それである。併し支那人は決して此等の北狄に對して、兵力を以て對抗せぬ。時には以夷制夷の策を採ることもあるが、多くの場合、金帛を贈つてその歡心を買ひ、彼等の侵入劫掠を緩和するのが、歴代慣行の政策であつた。明治四十四年の秋、支那人(漢人)が革命を起して、滿人(清朝)より獨立した時の檄文に、

漢人實耕。滿奴食之。漢人實織。滿奴衣之。

と憤慨の辭を連ねてあるが、この事實は決して清朝時代に限つた譯でない。支那は往古から、北狄の寶藏金庫たるべき運命を有つて居る。南北朝の末に出た突厥の他鉢可汗は、

但使我在南兩兒、北齊と北周常孝。何憂於貧。

といふて居る。北狄の君主は、何時もこの他鉢可汗の心を心として、支那を脅迫して榮華を盡したのである。支那にも稀には秦の始皇帝や、漢の孝武帝の如き、豪傑の君主が出て、北狄征伐をやつたこともあるが、兵を窮め、武を瀆す者として、支那國



民間の評判は決して宜しくない。功を異域に建てた軍人なども、餘り國內では歓迎されぬ。

西漢時代に西域の副校尉に陳湯といふ豪傑があつて、當時漢の大累をなした匈奴の郅支單于を襲ひ殺して、稀有の大功を建てたことがある。所が當時の丞相の匡衡といふ儒者は、制を矯めて——當時陳湯は遠く西域に在り、至急を要することゝ、天子の許可を待つに由なかつたのであるが——兵を動かした者に賞を加へては、從來これに倣つて、事を塞外に起すもの續出すべしとて、痛くその功を抑へた。豪傑の陳湯は他の事情もあつたが、かゝる大功を建てたに拘らず、その晩年は實に憐むべき悲境に陥つた。

また唐の玄宗時代に、大武軍の牙將に郝靈筌といふ者があつて、當時塞北に跋扈して、屢唐を侵略した突厥の可汗の默啜の首を獲て、之を朝廷に獻じたことがある。この時にも宰相の宋璟といふ者が、郝靈筌に厚賞を加へると、年少氣英の天子に邊功を獎める結果を生ずべしとて、彼の功を抑へたから、郝靈筌は不平と失望との爲に、遂に慟哭吐血した<sup>1</sup>死んだと傳へられて居る。

支那人が文弱で怯懦であることは、古き時代から諸外國人の間に知れ渡つて居る。元時代に支那に十數年間滞在した伊太利のマルコポーロは、

蠻子(南支那人)が若し侵略的種族であつたら、彼等は優に全世界を征服し得る程の多人數である。されど讀者は杞憂することを要せぬ。此等の蠻子は何れも缺點なき商人、又は伶俐なる職工たるに適するのみで、兵士たるべき資格は全然具備して居らぬ。

と申して居り、また清初に支那に布教した西班牙のナヴァレットも、

支那人は學問を修め、商業を營み、美術骨董品を作るには適當であるが、戦争をなし得る柄でない。

と述べて居る。

この點から考へると、日清戦役前後から始まり出し、日露戦役によつて一層流行し、今日猶ほ世界の一大問題となつて居る所謂黃禍論——黃人種が行く／＼白人種を壓倒すべしといふ議論——は、頗るその根據を失ふ譯である。勿論黃禍論は可なり複雑であるが、若し黃禍論を戦争の方面のみに限り、また黃禍の主人公を支



那人のみに限つて考へるならば、確に荒誕不稽の論と斷言し得るのである。成る程過去千五百年の間に、亞細亞人が歐洲に侵入して、随分白人を壓迫した事實はある。西曆五世紀には匈奴の侵入があつた。十三世紀には蒙古の侵入があつた。十五世紀からは土耳其の侵略も始まつた。併し此等の殺伐な塞外種族と、文弱なる支那人とを同一視するのは、確に間違であらうと思ふ。

〔近く百年間の歴史を見渡すと、支那は随分諸外國相手に交戦して居る。若し義和團の亂に關する北清事件を加へると、殆ど世界の列強のすべてと交戦して居る。されど此等の交戦は、多くの場合、支那にとつて不本意の交戦であつた。支那人の立場から觀ると、此等の戦争は諸外國から押賣されたものである。去る明治四十年に和蘭で開かれた第二回萬國平和會議で、戦闘開始の時期が問題となり、或は通告を要すといひ、或は通告を要せずといひ、彼此議論を闘はした時、列席の支那委員は、戦闘開始に先つて通告するのはよいが、相手がその通告に應せざる場合は如何にすべき歟。我が支那の如きは、何等戦闘の意思なきに、屢、諸外國から戦闘を押賣された。今後も他國から戦闘開始の通告を受けても、我が國では容易に之に應ぜ

ぬ積りであるから、この場合の規程が必要であると申出たが、満場から笑殺されて仕舞つたといふ。笑殺されても、支那委員の言ふ所は先づ事實である。澤山な戦争をしても、支那人は決して好戦でなく、又文弱でないともいへぬ。

支那人の文弱は一概に輕侮すべきでない。無暗な好戦より文弱の方が、世界の平和の爲にも喜ばしい。されど現在は民族競争の時代である。武装の時代である。この時代に、然も時代の犠牲となつて、尤も痛切に列強の壓迫を受けて居る彼等支那人が、依然文弱の氣風を改めぬならば、彼等の前途の爲に痛心に堪へぬ。殊にその文弱が高遠なる理想に本づくのでなく、目前の怯懦を藏する爲めの文弱の如きは、支那の將來に對して大なる禍根と思ふ。〕

### 三 支那人の保守 (上)

支那人は文弱的であると同時に、保守的である。支那人が爾く保守的であるのは、種々の原因があること、思ふ。

(一) 支那人の先天的性質が保守的である。



(二) 上古から支那人の文明が、その四隣の異族の間に卓越して居つた。故に支那人は古から自國の文明を自負し、之を唯一絶對のもの、如く妄信して、その維持保存に力を用ひた。この慣習が第二の天性となつたのである。

(三) 支那人の間に久しく偉大なる勢力を有して居つた儒教そのものが、保守尙古的である。孔子も述而不作、信而好古といふて居る。彼は要するに先王の祖述者で、古代の謳歌者である。尤も孔子は温故而知新、可以爲師矣といふて、古を好むと同時に、現在に對する用意を忽にせぬから、保守主義一方の人ではないが、併しその末學になると、多く保守思想に囚はれて居ることは、争はれぬ事實である。孟子の如きは、

遵先王之法而過者、未之有也。(中略)故曰爲高必因丘陵。爲下必因川澤。爲政不因先王之道。可謂智乎。

といふて居る。兎に角『孟子』七篇の中には、保守尙古の氣分が充滿して居る。

儒教のみでなく、支那に起つた諸學説は、概して保守主義に傾いて居る。莊子が當時の學者を評して、尊古而卑今、學者之流也といふて居る位であるから、儒者のみ

が保守的と非難する譯ではないが、儒教が尤も勢力を有したわけ、殊に漢以後は儒教が國教ともいふべき位置に立つたわけ、支那人の間に及ぼした感化影響の大なることは否定出来ぬ。

併し吾が輩はこゝでその原因を研究するのが目的でない。支那人が保守的である事實と、その影響を述べるのが主意である。

西晉の武帝の時代に、今より約千六百年前に、有名な杜預といふ人があつた。當時の都は洛陽で黄河に近い。河北から洛陽に往來するには、必ず孟津の渡で黄河を横切らねばならぬ。所が黄河の流急にして、往々渡船が轉覆して、諸民が難澁した。そこで杜預は、黄河に舟橋を架して、この憂を除かんことを獻議した。武帝はこの杜預の申出に對して、群臣の意見を徴したが、何れも古代の聖人すら、黄河に舟橋を架せなんだといふ事實を楯にして、

殷周所都。歷聖賢而不作者。必不可立故也。

とて反對した。併し杜預は群臣の反對にも拘らず、殷周の聖賢すら着手せなかつた、黄河の舟橋を見事成功して、叡感に預つたことがある。



それより四百年程以前に、西漢の孝武帝の時代に、匈奴征伐に苦心したことがあるが、その時齊人の延年といふ者が上奏して、黄河の流を北に移し、匈奴と中國との國境を経て、東海に注がしめたならば、一は以て中國の水災を避くべく、一は以て水軍に不得手な匈奴の侵入を防止し得べく、誠に一舉兩得の良策であるといふ。水軍が、豪傑でも孝武帝は矢張り支那人である。

〔黃河スナハチ廻大禹之所道也。聖人作事、爲萬世功、通於神明。恐難更改。〕

と申し、即ち聖人の禹が定めた黄河の水道を移し改めることは、吾々にて出来る筈がないとて、遂に採用を見合せた。採用せなかつたことの可否は別として、採用せぬ理由が可笑ではないか。

〔孝武帝より約百年後の孝成帝時代に、黄河の氾濫を防止すべく、隄防修築の議が起つた時、〕

按經義。治水有決河深川。而無隄防壅塞之文。

といふ説が勝を制して、隄防の修築は見合せとなつた。この經義とは『書經』の禹貢篇の決九川距四海、浚畎澮距川の文句を指すもの歟と想ふ。河口を切り開き河

底を浚渫するのは治水の要諦で、格別不思議とするに足らぬが、但その論據を、二千年以前の事實を記した經書に求めた點が、支那人的で面白いでないか。これと類似の事例は、支那史上に頗る多く、一々列擧するに堪へぬ。

一體支那人は師古と稱して、古代の聖賢の行ふたことでは、信用せぬ。聖賢の行はぬ新事業をやり出すと、不師古トコ底非行として排斥する。秦の始皇帝や、宋の王安石等の改革が、不評判であるのは、他にも原因があるが、主としてこの支那人の保守思想に適せぬからである。

是故に彼等支那人の間には、先例といふことが豫想以上の大なる勢力を有つて居る。〔これに就いて面白い事實がある。梁の武帝時代に、領内の州を整理した所、從來中央政府の帳簿によると、百七州あるべきものが、實際調査すると、八十二州しかない。その餘の二十餘州の所在が判明せぬ。併し舊帳簿に登録してあるからといふので、所在不明の二十餘州を削除せずに、本の儘に百七州としたといふ。領内の行政区の所在不明といふのも支那式だが、更にその所在の判明せぬ州をその儘に、保存繼承した點が面白いでない歟。これが支那人氣質である。〕



去る光緒二十六年の十二月(明治卅四年一月)に、西太后が陝西の西安府の行在で發布した、變法自強の上諭の中に、禍天下者、在一例字とある通り、先例に拘執繫縛されて、支那人は如何程その國運の進歩を阻害したか知れぬ。支那人は古人以外に一機軸を出して、即ち自分で先例を作り出すことを、自我始古とか、自我作故フキヤトとか稱するが、その始古といひ、作故といふ字句の間にも、明に彼等の尙古思想が見はれて居る。

古人や先例に託すれば、支那人は容易に得心するから、この弱點を利用して、惡事をなし遂げる者が支那に多い。西漢の末に出た王莽といふ大惡人は、漢の天下を篡奪する爲に、萬事昔の周公といふ聖人の言行を模倣する。周公は一飯に三たび哺を吐き、一沐に三たび髪を握つて、天下の士を待つたといふから、王莽も恭謙天下の士に下つた。當時の人は何れも王莽を周公の再來と信じ、四十八萬七千五百七十二人の多數の人士が上書して、王莽に特別の恩賞と待遇を加へんことを出願して居る。かくて王莽は天下の人望の己に歸するのを待つて、時の天子の平帝を毒害した。昔武王が病氣の時、周公が武王の延命を天に禱つたことが、『書經』に載せ

てあるので、王莽は早速その眞似をやり、自分の毒害した平帝の爲め、身を以て之に代らんことを天に禱るなどの狂言をやつて居る。『春秋』は魯の哀公の十四年を以て終つて居るから、漢も哀帝の即位後十四年目に終るべき筈など言ひ振らして、遂に樂々と漢の天下を篡ひ、代つて天子の位に即いた。王莽は引經文奸とて、一言一行經書や聖人に託して、大惡をなし遂げたのである。王莽はその死後に於てこそ、逆臣元凶として指彈僂辱されたけれど、その生前に引經文奸頃には、聖人君子として崇拜されたのである。唐の白樂天の

周公恐懼流言日。王莽謙恭下士時。若使當年身便死。至今眞僞有誰知。

といふ詩は、この間の事實を詠じたものである。

三國の魏の文帝曹丕(曹操の子)も亦堯舜の禪讓といふ先例を借り來つて、首尾よく東漢の天下を篡奪した。支那では古來革命に二の形式がある。一は禪讓といひ、徳ある者を求めて、之に天下を禪るので、堯と舜、舜と禹などがそれである。一は放伐といひ、兵力に訴へて雌雄を争ひ、雄者が天下を取るものである。殷の湯王が夏の桀王を放ち、周の武王が殷の紂王を伐つたのがそれである。二の中で放伐の方



が評判が悪い。戦國時代から兩漢時代にかけて、學者は多く放伐を抑へて禪讓を揚げる。ソコデ曹丕は東漢最後の獻帝を脅迫して、天下を己に禪らしめ、然も外面だけは再三之を固辭する。堯が舜に天下を禪つた時、その二女娥皇女英の姉妹を舜に配したといふので、曹丕も獻帝の二女を後宮に迎へるなど、形式的のことまで眞似をやつて居る。今も河南の許州附近に受禪碑があつて、當時の禪讓のことを記して、

稽唐禪虞。紹天明命。釐殲二女。欽授天位。

など文字を列べてあるが、實に滑稽至極と申さねばならぬ。

併しこの方法が案外好評であつたので、その以後支那の革命は、大抵この似而非なる禪讓の形式を採つて居る。その裏面を窺ふと、或は願後身世々、勿復生天王家（劉宋の順帝）といひ、或は願自今以往、不復生帝王家（隋の恭帝）といひ、似而非なる禪讓の犠牲となつた君主の境遇、眞に憐むべきものがあつても、兎に角形式の上では、堯舜の先例その儘になつて居れば、それで支那人は承知するのである。

支那人は何事をするにも、必ず古人を引き出して來る。西晉の武帝はその太子

の惠帝（司馬衷）の暗愚で不評判なるを憂ひ、その才能の程度を實驗する爲に、特に密封にて或る問題を與へて、太子にその答案を提出せしむることにした。その答案の結果如何によつて、太子の廢立を斷行する決心であつた。所が太子の妃の賈氏は中々油斷ならぬ人物で、武帝の眞意を測り知つて、由々しき大事と考へ、秘書の張泓といふ者に命じて、太子に代つてこの答案の草稿を作らしめた。張泓は不用意に、例の如く詩曰とか書曰とか、孔子曰や孟子曰を連發して答案を作つた。その草案を見た賈氏は、太子は暗愚にして、『詩經』や『書經』を知らぬ筈であるのに、かく詩書や聖賢を引用しては、直に代作の馬脚露見すべしとて、悉く詩曰、書曰の句を削り去り、議論の經路は極めて迂遠ではあるが、歸着は間違つて居らぬ様な薄馬鹿らしい答案に改作せしめて、首尾よく武帝の眼を暗まし、太子の位置を完全にしたことがある。暗愚では困るが、普通の人間なら、その論文には必ず經書や古人を引用せねばならぬ慣習は、この事件を見ても明である。

〔隋の煬帝は高句麗征伐をやつたことがある。その時百萬の大軍を、左右の二軍各十二隊、併せて二十四隊に分つた。所が統監部から此等諸隊の向ふべき目的地



を指示する場合に、六七百年も以前の漢時代の地名を使用して居る。玄菟郡名とか樂浪郡名とか、葢馬縣名とか黏蟬縣名ネンヂンとか沃沮種族名とか肅慎種族名とか、甚しきは蹋頓の如き、古代の人名まで使用して居る。此等の地名の的確なる位置は、隋時代に多く不明であつた筈と思ふ。尠くとも隋の統監部では確知せなかつた筈と思ふ。殊に滑稽なのは蹋頓である。蹋頓とは東漢末に遼東方面で勢を振つた、烏丸種族の酋長の名である。無知な統監部は、人名を地名と間違へたらしい。かゝる指令を平氣で發する統監部も、かゝる指令を吞氣に受ける部隊も、共に呆れ果てたものでない歟。抑、不明な地方や、存在せぬ土地へ、發向すべき命令を受けた當時の各部隊は、如何なる行動を取つたであらう歟。世間では支那人を實際的といふ。それも半面の眞理であるが、同時に他の半面では、彼等は存外非實際的な所もある。戦争の如き生死存亡に關する大事件にも、彼等は吞氣に古代の地名を使する。不確でも不明でも、古代のものがよいといふ、支那人氣質の一端であらう。

古人や先例を引き出せば、支那人は得心もし信用もするから、自然支那には古人の名に託した偽書が多い。『神農本草經』とか『黃帝素問』とか、『子夏易傳』とか『子

貢詩傳』とか、或は『關尹子』或は『鬻子』等、古人の名を負ふた偽書は、一々列擧するに堪へぬ程である。世界の中で支那ほど偽書の多い國はなからうと思ふ。支那の大學者で、偽作家の嫌疑を受けて居る人が尠くない。漢の劉歆、魏の王肅、隋の劉炫など皆それである。古書を偽作する動機は種々あるが、所詮は支那人が古書を尊信するといふこと、離るべからざる關係が存するものと思ふ。

#### 四 支那人の保守 (下)

支那人は一般に模倣は上手であるが、應用が不得手である。之は勿論彼等の先天的素質にもよることならんが、一は古人の手本の上に重きを置く、所謂依樣畫葫蘆といふ、後天的原因も亦與つて力が多いこと、思ふ。それも畢竟先例に重きを置くと同様に捉はれ易い氣質を有つて居るからである。

三十餘年間支那に居つたスミスといふ米國の宣教師は、曾て支那の教師は無冠の帝王であると評したことがある。支那では教師の一舉一動は、すべて學生の手本となるからである。支那の學生はすべて教師の授ける所を鵜呑にする。教師



の身振や習癖まで真似するのに苦心する。

支那人の挨拶でも文章でも、その他萬般のこと、多く型に入つて居つて、時には滑稽の感を起さしむることがある。北宋の仁宗時代の事であるが、さる年洪水があつて、天子は使者を派遣して、その實地を視察せしめた。その時の使者の復命に、『書經』に堯時代の洪水の有様を記してある文句をその儘に、蕩々ツツミ懷山襄陵ボウと述べて、大眼玉を頂戴した笑話がある。明末に明の巡撫が清軍に降服した時、この巡撫は肉袒牽羊作法も辭令も、すべて『左傳』をその儘に真似をしたから、さしもの清軍も大笑をしたといふ逸事もある。

今から六七十年も前に、南支那に住んで居つた佛蘭西の宣教師に、ユックといふ人があつた。或る用向の爲に、北京へ飛脚を差立てることになつた。その頃ユックの經營して居つた學校の支那人の教師が北京の産で、彼の年老ひたる母親は、一人淋しく北京に暮らし居る。幸ひの機會であるからとて、ユックはその支那人の教師に、母親へ手紙を差出すことを注意してやつた。その教師は非常にユックの好意を感謝しつゝ、直に隣室に勉強中の一學生に、

私は自分の母親に手紙を差出さうと思ふから、御前は一つ代作してくれ。飛

脚は間もなく出發する筈故、今から至急認めてくれ。

と命令した。側に聞いて居つたユックはその教師に、

彼の學生は君の親類でもあるのか。それとも君の母親に面識でもあるのか。

と尋ねると、その教師は、

否、彼は一面識もない。勿論吾が母親の年齢も住所も知る筈がない。

と答へた。ユックは一面識もない學生が、いかにして君の代作が出来るかと尋ねると、支那人の教師はさも不思議相な顔付をして、

私は彼の學生に一年以上文章の作製法を教へた。最早書式や熟語を可なり知つて居る筈である。子から母へ差出す手紙の代作位は容易なことである。と答へた。彼是する間に、曩の學生は命せられた通り、手紙を認め、且つ封緘して持つて來た。教師は文書の文面をも改め見ずに、その儘封筒に住所を書き添へて、飛脚に渡したといふことである。この事實は一面では、支那人の孝行は、極めて形式的であるといふ證據にもなり、又一面では、彼等の手紙は極めて紋切型のものであ



るといふ證據にもなると思ふ。

支那人は一般に精神よりも形式に重きを置く傾向がある。これも彼等の保守氣質と關係せしめて説明することが出来る。上に述べた通り、支那人は先例を重んじて之を固執する。長い年月の間には、種々の事情の爲め、先例そのもの、精神が疾に失はれても、その形式だけを大事に守つて行く。支那人の習慣のうちには、名實隔離して、他國人から觀ると随分奇妙なことが多い。

支那人は孝を百行の本として、最大の善行と認める。忠孝と併稱する中にも、支那では孝が國家なり社會なりの基礎となつて居る。歴代の政府は、何れも孝行を奨励する。孝道尊重は確に支那人の一美點に相違ないが、たゞ何事にも精神を後にして、形式を先にする支那人は、孝行といへば、裸體で氷上に臥して、親の病氣の平癒を神に禱るとか、昔の二十四孝の極端な手本を、その儘に眞似する者が尠くない。勿論之には名聞利慾の爲といふ動機も加はつて居るが、兎に角極端な眞似をする。ソコで政府は孝行を奨励しつゝも、流石に極端な形式的孝行は時々禁止して居る。〔支那は禮儀第一の國である。所有禮儀アラユルの中でも、喪禮が古來尤も重大視されて

居る。されど後世になると、支那の喪禮は形式のみで精神がない。五胡時代以後燕の昭文帝の皇后の喪禮を行ふた時、百官が宮廷に會同して哀を擧げた。一同大聲を揚げて形式的に哭するのみで、泪など流す者は一人もなかつた。昭文帝は彼等の空々しい舉動を心憎く思ひ、目附役に命じて、泪を流して居らぬ者を調査して處分させた。百官達は意外の處分に恐惶して、次の式日からは、皆懷中に唐辛一包づゝ用意して置き、哭する場合には、唐辛を含んで強いて泪を出して處分を免れたといふ。

支那程喪禮の喧しい國はなく、支那ほど喪禮に實哀の伴はぬ國はない。今日でも支那の葬式は、外觀の形式の仰々しい割合に、肝心の死者に對する哀情が伴はぬ。葬列には職業的泣男まで加へるといふが、喪主その人は喫煙しつゝ談笑するなど、われわれ日本人から見ると、腹立しく感ぜられる場合が多い。單に喪禮のみに限らず、所有支那の古代の禮教が、その形骸のみを留めて、その精神を失ひつゝあるのは、慨しい極みである。〕

いくら保守的の支那人でも、長い年月の間には、種々の必要上、随分制度改革を實



行した場合も尠くない。併しかゝる場合でも、支那人は決して在來の制度を捨てぬ。舊の制度はその儘に保存して、新しき制度をその上に添加するのである。支那人の改革は要するに新しきものを増加すること、舊きものを廢止したり、乃至之を改良することを意味せぬ。歐陽脩などは、唐の官制を精而密と、簡而易行と、か、盛に賞讃して居るが、その實、唐の官制は周と秦漢と、三國以來の新官制とを、殆ど取捨を加へずに合同したもの故、その官制には主義も精神もなく、冗官重複頗る多い。之に比較すると、わが太寶の官制の方が、遙に簡にして要を得、出藍の譽を受くべき資格が十分にあると思ふ。

清朝の兵制の變遷を見ても同様である。清朝は最初綠旗(綠營)の兵で地方を守備し、八旗の兵は一面皇城の守備に當り、一面地方の綠營の監督をした。この綠營と旗兵で天下を彈壓したが、時を経る儘に、旗兵も綠營も腐敗して、實戰に合はぬ様になる。長髮賊の起つた時には、各地方で義勇兵が組織されて、これが旗兵、綠營以上の手柄を建てた。ソコデ亂後もこの義勇兵(勇兵)をその儘に保存して、一團の常備兵が出來上つた。併し従前の旗兵や綠營に手を着けぬから、ツマリ二重の

兵制を維持せなければならぬことになつた。日清戰役後、支那で段々洋式の新軍が組織される様になつても、矢張り従前の兵隊を全く解散せぬ。

支那人の遣口ヤクチはすべてこれである。故に支那には嚴密の意味の改革といふことが甚だ稀で、従つて支那には進歩がない。支那の梁啓超が、曾て北京で我が矢野(文雄)公使に面會した時、明治十四年に出來た黃遵憲の『日本國志』によつて、種々日本のことを質問すると、矢野公使は、

『日本國志』は約二十年前の書物である。日本の十年間の進歩は、支那の百年以上に當る。『日本國志』で日本の今日を忖度するのは、丁度『明史』に據つて支那の現状を論ずると同様、事實を距ること遠い。

と答へた。その後梁啓超は日本に渡來して見ると、矢野公使の言、人を欺かざることを發見したといふて居る。

支那は早くから西洋の新文明に觸接したが、例の保守と自尊とが邪魔をして、中々新文明を採用させぬ。所が日清戰役と日露戰役とによつて、流石に四千年來の長夜の夢を醒まして、變法自強を唱へることになつたのは、よくの事で、支那人



も自白して居る通り、支那開闢以來未曾有の現象である。保守的な支那人の間に、この革新の氣運が何時まで繼續するかは可なり疑問である。縱令繼續することにしても、支那人は日本と違つて、古來殆ど自國の文明のみを保持して來たので、他國の文明を攝收して、國運の増進を圖つた經驗が多くない。西洋の新文明を輸入するにしても、如何にして其國の舊文明と調和せしめるであらう歟。

東西の文明の調和といふことは、我が日本にとつても重大なる問題に相違ないが、併し我が國は或は三韓、或は隋唐と、古來外國の文明を取つて、自國のそれと調和せしめた經驗に乏しくない。かゝる經驗のない支那は、この問題の爲に、一層の苦心を要すべき筈である。(『大正五年五月』支那研究』所載)

## 支那人の妥協性と猜疑心

### 緒言

日本と支那とは、所謂唇齒輔車相倚るべき國で、勿論親善の間柄でなければならぬ。兩國の親善を圖る爲には、兩國人が互にその相手の氣質を理會して置く事が、一番必要と思ふ。吾が輩はかゝる見地から、歴史的に支那人の氣質を多少研究しかけて居る。茲に掲ぐる支那人の妥協性と猜疑心に關する論文も、實はその研究の一端である。既に六十年以前に、倫敦タイムズの支那通信員クックが切言した如く、種々の原因があつて、支那人の氣質を正しく理會することは、容易の業でない。従つて吾が輩の支那人氣質に對する見解も亦、或は正鵠を失した所あるかも知れぬ。この點は豫め讀者諸君の承知を得置きたい。

### 一 支那人の妥協性 (一)



支那人は最も妥協性に富んで居る。妥協は確に支那人の一の國民性と申して差支へない。個人としても國家としても、支那人はよく妥協を行ふ。元來が文弱で、殊に打算に長ずる支那人は、小にしては争鬪、大にしては戦争、何れも危険の割合に、利益が伴はぬ事を夙に承知し、成るべく之を避けて妥協を好む譯である。兎に角支那人は大抵の場合よく妥協を行ひ、寧ろ極端まで妥協を濫用する傾向を有つて居ると思ふ。

北支那に標(鏢)とも書く局と稱して、旅行者の安全を保障する營業者がある。標とはもと擲槍(なげやり)の如き一種の武器の名で、この武器を携帯せる標師を派出して、依頼を受けた旅行者を護衛するから、標局といふ名稱が出来たと云ふ。北支那一帶、殊に山東地方の古への梁山泊の所在地に當る方面には、なか／＼追剝が多い。一家を擧げて、甚だしきは一村一郷を擧げて、行旅を剽掠することを生業とする者が尠くない。かゝる物騒な地方を通行する旅客は、標局に就いて一定の保険料を納めると、標局から標車といふ一種の保険馬車を出して旅客を護送する。この標車には幟標(はたしほ)が建て、あつて、之には例の追剝も手出をせぬ。これは標師を憚るよりも、

標局から豫め追剝一同に對して附届を行ひ、雙方の間に妥協默契が成立して居る故である。

支那人は物質の賣買にはよく秤を使用する。葱でも白菜でも、米穀でも豆腐でも、目方で賣買する。所が支那では度量衡の規定など厲行されて居らぬから、彼等の使用する秤ほど不信用なものはない。南斗北秤とて、南支那と北支那の間で量衡に相違あるが、同一の北支那でも、秤は區々で一定して居らぬ。かゝる不信用なる秤によつて、如何にして物貨を賣買するかといふに、賣手は成るべく自分に都合のよい秤を持ち出し、買手も亦成るべく自分に都合のよい秤を持ち出し、雙方の秤を折衷して目方を決める。かゝる妥協方法は、吾が輩の北支那滞在中、屢々親觀した所である。

昨年初夏支那に例の排日運動が始つて以來、親日派の政治家は賣國奴として、排日團體から種々の迫害を受けたが、中にも親日派四人男の一人として知られて居る、前駐日公使陸宗輿に對して、彼等は陸宗輿の出身地の浙江省海寧縣の住宅の門前に、賣國者記念碑を建設すべく、醜金募集に着手した。之にはさしもの陸宗輿も



大に閉口し、遂に二萬元といふ大金を排日團體に手渡し、妥協を申込み、記念碑の建設を中止せしめたといふ。これは新聞紙上に見えた記事で、その眞偽は保證出來ぬが、支那人としては有り勝のこと、思ふ。

## 二 支那人の妥協性 (二)

妥協の流行は官界でも民間でも相違はない。支那では流賊でも馬賊でも、山賊でも、海賊でも、少し手剛いと見ると、政府は多くの場合、之を退治するよりは、先づ之と妥協する。即ち政府は以前彼等の同類たる賊徒で、現在官吏になつて居る者の如何に榮華を極めて居るかを説き、彼等も之に仿ひ、一日も早く行を改め官に就くべきを勧め、利祿と官職を以て彼等を誘ふのである。支那の記録にはこの妥協に誘ふことを、招安とも招撫ともいひ、この妥協に應ずることを歸誠とも歸順ともいふ。招撫とか歸順とか文字は立派であるが、その内實政府が怯懦を藏する爲め、賊徒は利祿を得る爲め、雙方妥協するに過ぎぬ。招撫や歸順の實例は、支那の何れの時代にも見出すことが出来る。現在の中華民國で羽振のよい大官の中にも、かゝ

る出身者があると傳へられて居る。それで支那には古く欲得、官殺人、放火、受招安といふ諺があつた。放火殺人を行ひ、成るべく暴れ廻りて政府を手古摺らせ、然る後に歸順に出掛けるのが、官吏となる出世法の一番捷徑といふ意味である。隨分亂暴な諺だが、實際支那にはかゝる時代が尠くないから驚く。

この賊徒の招安に關して、歴史上種々の笑話が傳へられて居る。南宋時代に政府が多數の賊徒を招安して、之に宣贊舍人(從七品の武官)の官を與へた所が、正當の宣贊舍人は賊徒出身者と同一視されるのを厭ひて、之に抗議を申出た。政府は已むを得ず、正途出身の宣贊舍人には兼官を與へ、兼官を有する宣贊舍人は正途の出身、兼官なき宣贊舍人は招安の出身と、一目瞭然と區別の立つ様にした。正當出身の宣贊舍人は之で得心したが、今度は招安出身の新宣贊舍人の苦情で、政府はその處置に困惑したといふ。

又ほぼ同時代に、鄭廣といふ海賊の頭目が歸順して、政府から然るべき官吏に取り立てられたが、その同僚は皆彼の前身を輕蔑して、役所で會食の折にも、彼一人だけは排斥するといふ風であつたが、この排斥された鄭廣は、聖人面ツラする同僚が、支那



官吏の常習として、何れも中飽——袖の下——を貪つて居ることを察知して、一日左の如き皮肉な詩一首を作つて、彼等の廻覽に供した。

鄭廣有詩上衆官。文武看來總一般。衆官做官却做賊。鄭廣做賊却做官。

詩の意味は、諸君は官吏となり、その位置を利用して泥棒を行ひ、自分は泥棒の位置を利用し、招安に應じて官吏となる。唯手段に前後の差あるのみで、畢竟同志同行と稱すべきものなるに、何が故に自分一人を排斥する歟といふに在つたから、同僚一同苦笑して、爾後その態度を改めたといふ。

### 三 支那人の妥協性 (三)

勿論支那の政府も時に強硬手段をとり、或は大將を派遣し、或は地方官に命じて賊徒を討伐せしむることもある。かゝる場合でも、その官吏や大將は、如才なく賊徒と妥協を行ふ。即ち賊徒に金穀を與へてその歡心を買ひ、此の如くして彼等を暫く管外に退散せしめ、若くは正面衝突を避けしむるのである。「韓非子」に昔衛と荆楚と交戦した時、その二國の大將が妥協を行ひ、戦争は二國の君主の勝手に開

始せしものなるに、その犠牲となつて何等怨のない兩軍が命掛けの戦争するなどは、馬鹿の骨頂なればとて、兵を交へずに久しく對峙したと書いてある。これが支那軍人の多數の心掛けである。弄兵玩寇。以爲富貴之資とて、敵とは申譯ばかりに兵を交へて戦争を長引かせ、成るべく多額の軍用金を政府より引出すことに苦心を費す。唐時代にも幾度か藩鎮征伐を行ふたが、徒らに國帑を空しくするのみで、餘り成功がなかつた。その最大原因は、官軍の大將が賊軍と妥協して、兵を弄し寇を弄ぶからである。遠い戰國や李唐時代を引く迄もなく、最近の中華民國の有様を見ても、成程と點頭カマツかるゝ所が多い。

大正六年十一月に、段祺瑞内閣から南方征伐の大權を委任されて湖南へ出陣して居つた、總司令官の王汝賢や副司令官の范國璋等が連署して、弭兵和平の通電を發して、段内閣の瓦解の原因を作つた。この形勢に憤慨して、北方の督軍連が、その十二月に所謂天津會議を開き、段祺瑞の擁護と南方討伐を決議したのはよいが、さて愈、出陣になると、曩に天津會議の席上で、最も強硬説を主唱したといふ第一路總司令官の曹錕や、第二路總司令官の張懷芝は、何時の間にか軟化して仕舞ふ。大



本營では強硬説が主張せられ、戦線では妥協説が歓迎されるのが、支那古今の常態である。之には種々内面の理由もあるが、支那人は一身の利害の爲には、苟合妥協を濫用して耻づる所を知らぬことも、確にその一大原因と認めねばならぬ。彼等は軍用金を手に入れる目的で、心にもない強硬説を主張するが、目的さへ達すれば、その本性を發揮して、妥協を主張するのである。

#### 四 支那人の妥協性 (四)

國內に於て妥協を濫用する支那人は、異族に向つても亦妥協を濫用する。北支那なる燕趙地方は、もと悲歌慷慨の士多しと稱せられたが、それも過去のこと、唐宋以後となつては、彼等もよく外來の異族と妥協して行く。金の世宗は曾て燕人を評して、遼兵至則從遼。宋兵至則從宋。本朝(金)至則從本朝と罵倒したが、かゝる態度は燕人に限らず、支那人全體に普通かと思ふ。女真人や蒙古人や滿洲人との妥協は、兎に角、一八六〇年に英佛軍の北京進撃の時にも、明治三十三年に聯合軍の北京占領の時にも、北支那人は外國軍隊の前に順民の旗を掲げ、徳政の傘を獻じた

ではない歟。絶えず異族の侵略に暴露さるゝ支那人には、此の如き態度は一の必要なる處世法かも知れぬが、日本人などより觀れば、奇怪の念を禁することが出来ぬ。

支那政府の態度も亦同様である。絶えずその邊疆を剽掠し、又は侵略する北狄種族に對して、兵力を以て抵抗することを敢てせぬ。或は宗女を與へ、或は金帛を贈り、或は土地を割いて彼等の歡心を買ひ、彼等の掠奪を緩和するのが、歴代慣行の政策であつた。この妥協の犠牲となつて塞外に嫁する宗女を、唐時代には和蕃公主と稱した。宋以後は流石にこの和蕃公主を廢止したが、その代り一層惜氣もなく土地を割讓して居る。明治四十四年秋に、支那人(漢人)が革命を起して滿人(清朝)より獨立した時の檄文に、漢人實耕、滿奴食之。漢人實織、滿奴衣之と憤慨の辭を連ねてあるが、かゝる事實は決して清朝時代に限つた譯でない。支那は二千餘年の古代から、無理横暴な北狄ともよく妥協して、彼等の寶藏金庫たることを我慢して居る。南北朝の末に出た突厥の君主の他鉢可汗は、但使我在南兩兒、北齊と北周常孝。何憂於貧と公言して居る。北狄の君主は何時もこの他鉢可汗の心持をその



儘支那人の妥協癖を奇貨とし、之を威嚇して榮華を貪つて居る。

西漢の初め匈奴が跋扈して支那政府がその處置に閉口した時、洛陽の才子として當代に聞えた賈誼が、その智囊を傾けて對匈奴策を建てた。その對匈奴策とは、要するに五餌を以て匈奴を誘ふといふに過ぎぬ。五餌とは耳、目、口等の餌を設け、酒色や利祿で匈奴人の大部分を中國に誘致するをいふ。その一餌は盛装せる幾十の美人をして、中國に來降せる匈奴人の左右に侍せしめ、匈奴人を肉團の捕虜にして仕舞ふのである。匈奴人好遇の噂を聞いては、塞外の匈奴人は先を競うて中國に投化すること疑ない。かくて匈奴の故土空虛とならば、中國の憂根絶ゆべしといふのが、一代の才子賈誼の對匈奴策の骨子である。

之と似寄りの話が明時代にもある。明の萬曆年間に、支那政府は北方の韃靼の侵略に閉口して、その對抗策に腐心した時に、瞿九思といふ學者が面白い建議をした。朔北に美人なきが故に、北虜は容易に故土を離れて敵地に侵掠するのである。若し閨室に美人あらば、彼等は之を見棄て、遠征を企つる筈がない。北虜制御策の秘訣は、朔北に美人を多くし、男子をして女色に惑溺せしむるに限る。就いては

此際纏足——支那では纏足が美人の第一の資格と認められて居つた——を始め、その他一切の中國化粧法を朔北に傳へる。かくて朔北の婦人が柳腰蓮歩の美人となつたらば、さしもの北虜もこの可憐の美人に愛着して、往日の獐犇性を失ふに相違ないといふのが、瞿九思の建議の内容である。何と恐れ入つたる妙策ならずや。日本人から觀れば滑稽至極の此策略を、支那人の學者は眞面目に天子の御手許まで建議するのである。我が國でも黒船來航の當初、吉原あたりから似寄りの策略を幕府に獻議したといふが、これは北里の忘八輩の猿知慧に過ぎぬ。支那の如き一代の才子や著名の學者の眞面目な意見と、一樣に扱ふべきものでない。兎に角支那ではかゝる笑ふべき妥協(?)對策の方が一般に氣受がよく、それ以上進んで積極的に塞外征伐など行ふと、兵を窮め武を瀆すものとして、歡迎されぬのである。

## 五 支那人の猜疑心 (二)

支那人は一般に猜疑心が深い。支那に一人不入廟。二人不看井といふ諺があ



る。一人で物淋しき寺廟に入らば、何時僧侶——支那で僧侶は多く悪徒と見做されて居る——の爲に人知れず殺害されるかも知れぬ。二人で井戸を俯瞰する際に、何時相手の爲に井底に突き落されて命を失ふかも知れぬ。かゝる場合を警戒する諺で、之に由つても、支那人の猜疑心の強い一端を察知することが出来ると思ふ。又支那に『示我周行』といふ題目の旅行案内書がある。その開巻に旅客心得として、江湖十二則を掲げてあるが、概して盜賊・放馬・欺騙・掏摸・拐騙・偷換等に對する注意に過ぎぬ。こは警察不行屈勝の支那に於ては、當然の注意であるが、同時に他人を泥棒視する、支那人根性の發露とも見受けられる。兎に角支那では、男女の間柄にも、同僚の交際にも、將た君臣父子の關係にも、常に猜疑といふ隱翳が付き纏うて居る。

申す迄もなく支那は古來革命の國で、君臣の分定つて居らぬ。『左傳』に君臣無常位。社稷無常奉とある通り、今日の臣下も明日の君上となり得る國である。従つて支那の君主は、赤心を臣下の腹中に置くことが難い。絶えず臣下に對して猜疑警戒の眼を見張らねばならぬ。無力なる君主は、或は願後身世々。勿復生天王

家といひ(劉宋の順帝)或は願自今以往。不復生帝王家といひ(隋の恭帝)極端なる恐迫觀念に戰きつゝ、危懼憂鬱なる一生を送る。有爲の君は、機會ある毎に宿將や權臣を殺戮して、身後の計を立てる。狡兎死、走狗烹。飛鳥盡、良弓藏。敵國破、謀臣亡と諺にある通り、支那の君臣は患難を共にすることが出来ても、富貴を共にすることが出来ぬ。漢の高祖は寛仁大度の君として世に聞えて居るが、その人すら韓信や彭越等の功臣は大抵殺害して仕舞つた。清人黃莘田の詩に、漢家多少韓彭將。不得銘旌一字看といふ句がある。高祖が功臣に對する恩情の薄きを惜んだものである。温和なる宋の太祖の如きは、巧言を以て宿將を説服して、權要の地を退隱せしめ、刻薄なる明の太祖の如きは、露骨に功臣を誅戮した。手段に寛嚴の相違はあつても、臣下を猜疑するといふ心理は、同一と認めねばならぬ。

## 六 支那人の猜疑心 (二)

支那の政治や教育は、儒教を看板として居るけれど、その官制は法家の説に本づく所が多い。法家は人性を惡と豫斷して、之が警戒に重きを置く。法家の極意は、



臣下同志をして相掣肘牽制せしめ、無力なる臣下をして、君權を脅かすことなからしむるに在る。法家の思想を繼承する支那歴代の官制は、官吏を信賴するよりも、寧ろ官吏を猜疑すべく、官吏を利用するよりも、寧ろ官吏を防弊すべく組織されて居る。例へば清朝の官制を一覽しても、官吏の非違を糾察する専門の都察院の外に、多くの官吏が彈劾權を賦與されて居る。かくて中央政府の大官に對して、地方長官が彈劾權を有し、地方長官の間に於て、總督は巡撫を、巡撫は總督を彈劾する權利を有して居る。此の如く官吏をして相互に監視せしむる官制は、畢竟猜疑心の強い支那人の特質に相應せるものといはねばならぬ。

支那の官場には廻避といふ制度がある。地方官となるにも、その本籍所在地では就任が出来ぬ。中央官となるにも、その本籍地と直接の交渉多き官銜を避けねばならぬ。又親族關係の者は、同一官銜に奉職することが出来ぬ。科擧の場合にも、試験官と親族の關係ある者は、その受験を遠慮せなければならぬ。廻避の制度を立てた精神は、官吏がその親族知人と比周して私を營むべしといふ、上下の猜疑を避くるに在ること申す迄もない。廻避制度の嚴密なることは、支那人の猜疑心の深大なる證據と思ふ。

### 七 支那人の猜疑心 (三)

支那の官吏は君主の猜疑と同僚の媚嫉の間に、一身の安全を圖るべく、われわれの想像以上の苦心を費す。賢哲保身として、一身の安全を圖ることが、支那官吏處世の第一要義となつて居る。昔唐の宰相に婁師徳といふ名臣があつて、その弟も相當出世して地方長官となつた。かく兄弟俱に高位大官を占めては、君主同僚の嫌忌懼るべしとて、心配の餘り、婁師徳が懇々その弟に謙抑すべく注意を加へたに對して、弟が彼に向ひ、自今雖有人唾某面。某拭之而已と答へた時、婁師徳は眉を蹙めて、先方が吾面に吐き掛けた唾を、勝手に拭ひ取つては、却つて先方の怒を買ふものである。唾はその儘にして置いて、何時かは自然に乾く。笑顔の儘吐き掛けられた唾の乾くを待つべしと教へたといふ。支那官吏の苦心、實に慘憺たるものではない歟。

同じく唐の大臣に蘇味道があつた。事を處するに常に模稜兩端を持し、決して



明白なる意見を建てぬ。故に時人蘇模稜と稱したと傳へられて居るが、多少の差こそあれ、支那の官吏は大抵蘇模稜の流亞と思ふ。近代の曾國藩の如きも、拙進而巧退の五字を以て、官場成功の秘訣と申して居る。事實支那官場の如き猜疑百出の裡に立つて、一身の安全を期するには、積極活動よりは寧靜革新よりは保舊をさる方が得策に相違ない。亢龍は悔があつても、括囊には咎がない。猜疑心の強い支那人は、他人の爲すべきことには牽掣を加へて、自分の爲すべきことは推諉する。推諉と牽掣では一事も成功する筈がない。光緒三十一年(明治三十八年)に、貝子載振が中國の官制改革を奏請した時に、推諉と牽掣を擧げて、中國官制の二大弊竇と指摘して居る。この二大弊竇は、畢竟支那人の猜疑心に由來するものと認めねばならぬ。

## 八 支那人の猜疑心 (四)

支那は家族主義の國柄である。その家族の中心をなすべき父子の親といふことが、支那の國家や社會の基礎をなして居る。然るに支那の歷代を見渡すと、家を

整へて天下の師表となるべき、天子と皇太子との間に存外不祥事多く、皇太子の終を全くせざる者が尠くない。畢竟皇太子の位置にあるものは、他の皇子から嫉妬され、天子から嫌忌され易い結果に外ならぬ。この歷代の弊に懲りて、清朝では、天子の生前に皇太子を冊立せぬのを家憲とした。乾隆帝の作つた『欽定儲貳金鑑』に、委細にその理由を載せてある。かくて天子はその生前に、諸皇子の中で尤も聰明なる者の名を自署し、之を匣内に密封して、乾清宮内の世祖御筆の正大光明と題せる額後に藏して置く。天子の崩御の直後に、王大臣立會の上で、その匣を開きて、署名の皇子を位に即かしむるのである。之を清朝密建の法といふ。かゝる制度を設置した一面の理由は、父子兄弟の間にも、猜疑心嫉妬心の多い結果で、他國には類稀なることかと思ふ。

誰人も知る如く、支那では古來男女の別が嚴しい。禮に男女七歳にして席を同じくせずとか、男女は親しく授受せずとか、殆ど神經過敏と思はるゝ程の規定が多い。今より十年前まで、北京の動物苑や、保定の觀工場は、奇數の日は男の入觀すべき日、偶數の日は女の入觀すべき日と區別してあつた。この慣習も主として男子



の猜疑心や嫉妬心の強い所に歸因するかと思ふ。支那歴代の後宮に宦官を使役する動機も亦之と同一と視るべきであらう。宦官の弊害の顯著なるに拘らず、何れの時代——最近の民國時代を除き——でも之を廢止したことがなく、又その廢止を主張した學者すら殆ど見當らぬ。宋の司馬光や明の丘濬や、明末清初の顧炎武、黃宗義の如き、支那有数の政治學者ですら、宦官の弊を論ずるに當つては、たゞその位置を低下せよとか、その員數を減少せよといふに止まり、更に進んで徹底的に宦官の廢止を要求して居らぬ。此の如きは一面『詩經』や『書經』に宦官のことを載せ、聖人も是認した制度であるから、廢止すべきでないといふ、例の尙古思想に囚はれる故でもあるが、一面猜疑心の強い支那人は、女子を監視するには、中性又は無性の宦官でなければ、安心出來ぬといふ心理状態に基くものと思ふ。

三十餘年間南支那に布教した、米國宣教師のスミスが著はした『支那人氣質』中にも、支那人の猜疑心の深いことに就いて、幾多の例證を擧げてある。主人が奴僕の不埒を發見して之を叱責した時、若くは不埒の爲に之を解備した時、その奴僕は彼の仲間が、彼の不埒を主人に密告したものと疑ひ、仲間に対して何かの方法によ

つて復讐を行ふが普通であるといふ。幾多の職工人夫を使役する時、その賃金は直接一人一人に支拂はねばならぬ。一纏として總代に渡し、總代の手より各自に分配せしむることは容易でない。彼等は中間に立つ總代が不正を行ふものと疑ふからである。此等の事實によつても、猜疑心の深い支那人の特質を察知し得るではない歟。

### 結 語

妥協性と猜疑心、これが實に支那人の二大痼疾である。この二大痼疾を剔去せねば、支那の改造は到底難事かと思ふ。妥協その者は必しも絶対に排斥すべきものではない。互讓の精神は如何なる場合にも寧ろ必要である。唯妥協にも互讓にも、主義や節操を忘れてはならぬ。支那人の如く主義や節操を放擲した妥協は苟合である。一時の苟合は却つて百年不安の種を播く。瓦全よりは玉碎、苟合よりは衝突の方が望ましい。孟子が枉尺而直尋ことを否定するのはこの故である。唐時代に兩面——『唐書』に見ゆ——といふ語がある。金時代に詭隨——『金史』に



見ゆ——といふ語がある。何れも旗色のよき方に妥協して、反覆常なきをいふ。支那人は個人としても、團體としても、自己保全の方法として、好んでこの両面詭隨を慣用するが、實に唾棄すべき所行と思ふ。猜疑の惡徳たることは殊更申述べる必要がない。

治日少而亂日多とは支那人の常套語である。支那の歴史を見渡すと、いかにも太平の日が少い。上下四千載の歴史は、梅雨期の天氣の如く、陰鬱の影多くして光霽の趣に乏しい。支那人が黄金時代と誇稱する周ですら、太平の日は僅に五六十年に過ぎぬ。その他推して知るべしである。此の如きは妥協と猜疑の必然の結果でなからう歟。征伐すべきものも、鎮壓すべきものも、すべて妥協によつて一時を糊塗するから、不安の原因は何時までも根絶せぬ。根絶せぬ不安の原因は、君臣同僚彼此の猜疑によつて一層増進する。梁啓超は曾て中國の積弱は防弊——官吏を猜疑すること——に由ると説破した。之にも半面の眞理はあるが、吾が輩はこれに苟合を加へ、中國の積弱宿弊は、多く支那人の妥協性と猜疑心に本づくものと信じたい。

近頃支那人の覺醒といふことが、新に問題となつて來た。多くの論者は支那人最近の覺醒に重きを置き、今日の支那人は最早前日の支那人にあらずといふ。吾が輩は支那人覺醒の程度に就いて、多少疑惑を有つて居るが、若し眞に支那人が覺醒するものならば、彼等の覺醒は、自己反省から出發せなければならぬと思ふ。外に向つて軍國主義を攻撃し、民族自決を絶叫する前に、彼等自身の徳性の缺點の改造が更に一段の必要であるまいか。中國積弱の最大原因は、外的よりも内的に存在する。王陽明の所謂去山中賊易。去心中賊難で、内的改造は改造の第一義でなければならぬ。支那人自身が彼等の心中の缺點短處——例へば妥協性・猜疑心の如き——から脱却せざる間は、眞實永遠なる改造は到底期待し難かるべしと思ふ。吾が輩は支那人最近の覺醒の根本的徹底的ならんことを切望する者である。かゝる根本的徹底的の覺醒こそ、日支兩國共通の幸福であらねばならぬ。

(大正九年三月『大阪毎日新聞』所載)



## 秦始皇帝

支那四千年の史乘、始皇の前に始皇なく、始皇の後に始皇なし。噴々者察せず、漫に悪聲を放ち、耳食の徒随つて之に和し、終に千古の偉人をして、枉げて桀紂と伍せしむ。豈に哀からずや。

こは私が去る明治四十年十月十日、始皇の驪山の陵を訪ふた當時の紀行の一節である。五年後の今日、復た始皇の傳を作つて、彼の爲に氣を吐くとは、淺からぬ因縁といはねばならぬ。

從來始皇帝の評判は餘り馨くない。彼を世界の偉人の伍伴に加へることに就いては、多少の反對あるべきことと思ふ。漢初政略的に使用した暴秦とか無道秦とかいふ語が、所謂先入主と爲り、吾人の腦裏に抜くべからざる印象を存して居て、始皇帝といへば、直に破壊壓制を連想する程である。いかにも始皇帝に幾多の缺

點短處があらう。シカシ之が爲に彼の美點長處まで全然沒了するのは偏頗である。過酷である。「己に司馬遷もこの點は六國表に注意して、

秦取天下多暴。然世異變。成功大。傳曰。法後王何也。以其近己而俗變相類。議卑而易行也。學者牽於所聞。見秦在帝位日淺。不察其終始。因舉而笑之。不敢道。此與以耳食無異。悲夫。

と述べて居る。虚心にして考へると、始皇帝が支那歴代の君主中、稀有の大政治家であり、又その立てた制度が、久しく且つ廣く後世に影響して居ることは、到底否定し難い事實と思ふ。又その人格も、一般に信せられて居るよりは、餘程善い方面があると思ふ。この批評の當否は、彼が一生の事蹟を根據として、判定するより外はない。事實が最後の裁決者である。

### 一一

始皇帝は孝公五世の孫、秦の莊襄王の子で、年十三の時、父の後を承けて秦王となつた。その最初の十年間は、政を大臣、殊に相國の呂不韋に委ね、二十三歳の時から



萬機を親しくした。彼は爾後十六年間に天下を統一した。即ち西曆前二百三十一年に韓を滅ぼしたを手初に、趙、魏、楚、燕といふ順序に列國を併せ、西曆前二百二十一年に最後の齊を滅ぼして天下を統一した。始皇帝五世の祖に當る孝公が、かの商鞅を任用して、富國強兵の大政策を建て、から天下の大勢は已に秦に歸しか、つて居たが、始皇帝の親政時代、僅々十數年の間に、首尾よく一統の實を擧げ得たに就いては、彼の功績も亦尋常ならずといはねばならぬ。

天下統一後に實行した始皇帝の事業は、中々多端であるが、要するに内政と外交とに區別することが出来る。内政では君權の擴張、外交では漢族の發展が主眼となつて居る。従つて彼一代の政策は、尊王攘夷の實現に在るとも釋解し得るのである。先づ内政の主要なるものを列擧すると下の如くである。

〔君主専有の名稱撰定〕 始皇帝は法家の説を奉じて居る。君主の位置は無上絶對、有ゆる點に於て、下民と儼然たる區別がなければならぬといふ信條から、彼は六國統一の年に、君主のみに限り使用し得べき名稱を制定した。その四五の實例を示すと、

西帝  
東帝  
南帝  
北帝

朕

陛下

(イ)皇帝 始皇帝以前の君主は皆王と稱した。夏、殷、周三代の君主は、何れも王と稱して居る。所が春秋時代となつて、周の王室が衰微すると、楚、吳、越等南蠻の國君が王號を僭し初め、降つて戰國時代になると、中國の諸侯達も亦之に倣ひ、最後に陪臣より諸侯となつた韓、魏、趙の三晉の君すら王と稱して、王號の價値は甚だ低落して來た。ソコデ國富み兵強き大諸侯は、最早王號では満足出來ず、別に他の美號を稱したのもある。始皇帝の曾祖父に當る昭襄王が、齊の湣王と約して、一時相並んで、西帝、東帝と稱したのもこの理由に本づく。六國を討平し海内を混一した始皇帝が、今更王號や帝號を襲ぐを潔とせず、新に一層の美號を採用せんとするのは、必然の要求といはねばならぬ。かくて彼は群臣の意見を參酌し、その功德は古の三皇五帝を兼ねたりとて、皇帝と稱することゝなつた。

(ロ)朕 先秦時代には朕は一人稱として、上下の區別なく使用された。楚の屈原の離騷にも、その父のことを朕皇考と書いてある。然るに始皇の時から、朕は皇帝専有の一人稱となつた。

(ハ)陛下 臣民が天子を呼ぶに陛下と稱するのは、始皇以後のことで、秦以前には



見當らぬ。「史記」の始皇本紀が、この字面の出處であらう。

(三)詔 詔は告知の義である。秦以前には、上下ともにこの字を通用した。「左傳」に晋の將欒書が鞏の役に齊軍を打ち破つて、國に凱旋の日、功を同僚の士燮に譲つて、今回の戦勝は士燮の軍令宜しきを得、部下よくその命を聽きし故なりといへるを記して、燮之詔也。士用命也とある。始皇の時から天子の命令に限つて詔と稱することゝなつた。

璽

(ホ)璽 玉にて作つた印を璽といふ。秦以前は上下の區別なく之を使用した。「韓非子」に秦の甘茂といふ人が、太僕といふ官につき、兼ねて行人の職を執つたことを、佩僕璽而爲行事と記してある。僕璽とは太僕の官印のことである。始皇の時に天子の印に限つて玉を用ゐ、之を璽と稱することゝなつた。

これらの規程は、要するに始皇帝が金科玉條と奉じて居る、尊君抑臣主義の一端を發揮したに過ぎぬ。先秦の歴史を通覽すると、代一代と君權漸長の痕を認めることが出来る。周禮の作者たる周公旦の如きは、君權擴張の棟梁である。天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟、士は一廟とか、天子の堂は高さ九尺、諸侯は七尺、大夫は

五尺、士は三尺とか、天子に崩といひ、諸侯に薨といひ、大夫は卒、士は不祿、庶民は死といふとか、天子の墳には松を樹ゑ、諸侯は柏、大夫は欒、士は槐、庶民は楊柳を樹うとか、あらゆる方面に於て、煩瑣なる規程を設けて、上下の區別を嚴にしたのは周時代である。始皇帝は要するに古來漸長しつゝあつた、尊君抑臣主義を大成した人といはねばならぬ。漢以後陽に秦を非難しつゝ、陰に秦に仿つて、是等の名稱を採用して居るのは、始皇の政策が時代の要求に適した證據ともいへる。

三

〔諡法の廢除〕 諡は周より徇つたもので、「逸周書」に「諡法解」がある。周公旦の定めた所と傳へられて居る。その「諡法解」に、諡者行之迹也(中略)是以大行受大名、細行受細名とある通り、身分ある人の生前の行爲に相應した、死後の諡を定めて、勸善懲惡の意を寓したものである。「序」に申添へるが、新に崩御された君上を、大行皇帝とか大行天皇とか稱するのは、生前に德行高い方で、やがて大名——美しい諡——を受くべき方といふ意味である。これを永遠の旅に就かれた方といふ意味に解す



るのは、正しくない。

諡法の起原のことは姑く措き、兎も角も諡法が周時代に實行されて居つたことは事實である。當時の規定によると、身分ある臣下が死すると、君上より諡を賜はる例で、天子崩御の時は、大臣會議して、その行爲に相當せる諡を定め、且つ君に依して、天を欺かざる主意とて、京師の南郊に於て、上帝臨監(?)の下に、之を披露することゝなつて居る。列國の諸侯達は天子より諡を賜はる筈であるが、周の王室の衰へると共に、天子同様その國の大夫達が詮議して、その諡を定めることゝなつた。さてかく天子崩じ諸侯薨じた場合に、その人に相當せる諡を議定せんには、勢ひ臣子として、その君父生前の行爲を批評せねばならぬ。こは甚だ君父の尊嚴を損ずる譯である。故に始皇は爾後諡法を除くことゝした。

漢は多くの點に於て秦の制度を採用したに拘らず、諡法のみは秦の制度に反對して、之を復活した。復活はしたが、漢以後の諡法は次第に骨抜きとなつて、本來の意義を沒了した。臣下はたゞ君上に依して、美諡のみを呈することゝなり、全く勸善懲惡の主意を失つたからである。例せば諡法に愛民好與曰惠とあるに、西晉の

惠帝の如きがある。また辟土服民曰桓とあるに、東漢の桓帝の如きがある。諡法中に見える躁とか荒とか刺とか醜とかいふ惡諡は、遂に使用された例がない。隋の煬帝の如き惡諡は稀有の例外で、諡法に好内遠禮曰煬とも、逆天虐民曰煬ともある。

加之周時代には一字の諡を普通としたに、世の降ると共に字數を増して、多きを誇り、一字の諡號が二字となり、唐時代には普通に六七字となり、更に明清時代になると二十字内外に増加した。清の太祖の如きは、承天廣運聖德神功肇紀立極仁孝睿武端毅欽安宏文定業高皇帝と三十字近き諡號を有つて居る。諡號が長くなり、記憶や使用に不便を加へたから、唐以後は天子の諡號を稱せず、高祖とか太宗とか廟號を稱するのが慣例となつた。兎に角漢以後の諡は、行の迹といふ本義を失ひ、たゞ崩後飾終の追讚に過ぎなくなつた。

## 四

〔郡縣の治〕 秦以前の支那は封建であつて、幾多の諸侯が各土地人民を私有して



居つた。夏の初には天下の諸侯の數一萬、殷の時には三千、周の初には千八百と傳へられて居る。長い年月の間には、攻争併呑の結果、是等の諸侯は次第にその數を減じ、春秋時代には百六七十國、戰國時代には十國內外となり、最後に秦の一統となつた。天下一家といふことは、始皇帝の時に始めて現實となり、その以前に未曾有の事である。

さて一統した天下を如何に處分するかは、當時の一大問題であつた。丞相王綰を始め、群臣多數の意見は、周の舊に仿つて封建の制を行ひ、遠隔の地に同姓子弟を分封して諸侯王といたし、皇室の藩屏たらしむるに在つたが、始皇帝は李斯の言を聽き、天下を擧げて皇室の直領とし、郡縣の治を布くことゝなした。『左傳』や『史記』に明記してあるが如く、春秋の末期から戰國時代にかけて、諸侯の數の減少すると反比例に、郡縣の數は増加して居るが、始皇帝は全天下を郡縣にしたのである。即ち天下を三十六郡に分ち、各郡に守尉、監を置いた。守は文治を、尉は兵事を掌り、監はその監察をする。郡の下には更に縣を置き、令が之を治むるのである。これら郡縣の官吏は、皆天子の代理として民に臨み、その進退任免は一に皇帝の命令に由

るのであるから、君權頗る強大となり、一統の政治も亦完全に行はれる譯である。

『史記』に群臣の言を載せて、

昔者五帝、地方千里。其外侯服、夷服。諸侯或朝、或否。天子不能制。今陛下中略、平定天下。海内爲郡縣。法令由一統。自上古以來、未曾有。

とあるのは、必ずしも誇張の言ではない。

〔劃一の制〕夏殷周三代の間、諸侯は各その國に便宜の政を行ひ、天下の制度は區々として、頗る劃一を缺いて居つた。尤も君權の擴張した周時代すら、夏の後の杞、殷の後の宋は、各その先代の政を繼承せしを始め、その他の列國でも、悉くは中央政府の制度を循奉して居らぬ。『中庸』に「今天下車同軌、書同文」といひ、『詩經』に「溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣」といへるが如きは、畢竟一種の希望若くは理想を述べたるものに過ぎぬ。眞に天下劃一の政を見るを得たのは、始皇帝以後のことである。

始皇帝は六國を併合すると、法度といはず、權量といはず、丈尺、車軌、律曆、衣冠、文字まで、すべて劃一主義を厲行した。彼が四方に立てた碑文に、或は器械一量、同書文



字と勅し、或は遠邇同度と刻し、この點に關して得意滿面の態を示して居るのも、無理ならぬ次第である。中にも吾人の注意に値するのは、始皇帝が文字の整理に熱心なりしことである。彼は文字を統一したのみならず、又之を改良した。複雑不便なる古文を省略して、所謂秦篆を作り、更に之を平易にして隸書を作つた。これら文字の整理によつて、當時の社會が如何に大なる便益を受け得たかは、設想に難くない。始皇帝が所在に碑を立てた目的の一半も、或は文字の統一を促す一方便であつたかも知れぬ。

〔天下巡遊〕 始皇帝は天下併一の翌年、即ち彼の在位二十七年から以後、頻繁に四方に巡幸した。

- 二十七年 今の陝西の西部及び甘肅方面
- 二十八年 今の河南・山東・安徽・湖北・湖南方面
- 二十九年 今の河南・山東・山西方面
- 三十二年 今の直隸・山西方面及び陝西の北部
- 三十七年 今の湖北・湖南・江蘇・浙江・山東方面

彼はかく四方を巡行しつゝ、到る處に秦の頌徳碑を立てた。有名な嶧山の碑、琅邪臺の碑、之罘の碑、泰山の碑、會稽山の碑等は、皆この時に立てられたもので、何れも秦が四海混一した功德を勅してある。秦は六國を併合したものゝ、六國の遺臣や遺民は、決して一朝に秦に心服するものではない。そこで天下の耳目を新にする必要が起る。始皇帝が頻年四方を巡遊した目的も、畢竟六國割據の餘風を打破して、彼自身が決して秦一國の君でなく、四海の共主であることを、天下萬民に會得せしめん爲で、極めて時宜に適當した政略といはねばならぬ。清の康熙・乾隆二帝が、屢天下を巡行したのも、全く同様の趣旨で、近くはわが明治天皇が、維新以來、或は東海、或は奥羽、或は北陸と巡幸せられたのも、或は同一の理由に本づくことゝ拜察されるのである。

五

〔焚書〕 始皇帝の施政中、尤も後世の不評を招いたのは、所謂焚書坑儒の二點である。世の學者は多く之によつて彼を人道の敵、文教の仇と信じて居る。如何にも



焚書坑儒は、多少亂暴であつたかも知れぬ。しかし之にも幾分の理由がある。一概に始皇帝のみを非難し去る譯にはいかぬ。

學者の美稱措かざる夏殷周の三代も、專制時代である。決して後人の想像するが如き自由の世ではなかつた。造言の刑とか亂民の刑とか、若くは左道の辟とか稱して、すべて恢詭傾危の言を弄して、民心を蠱惑する者は、容赦なく國憲に處して居る。然るに周室衰へ、春秋より戰國と世の降る儘に、實力競争時代となつて、諸侯は何れも天下の人材を羅致して、國の富強を圖ることゝなつた。かく人材登庸の途の開けると共に、處士横議の弊が醸し初めた。

戰國時代に於ける處士の跋扈は、隨分厄介な問題であつた。孔子すら不在其位、不謀其政といふて居るに、彼等は何れも無責任不謹慎なる政治論を敢てして、治安を害し、民心を惑はすのである。温良なる孔子すら、衆を聚めて奇を衒つた少正卯を誅殺したではないか。當時の政治家にとつて、處士の横議は到底其儘に看過し難い程であつた。心ある政治家は早く之を抑壓するに腐心し初めた。或者は更に進んでその檢束に着手し、且つ又處士横議の源泉となるべき書籍、即ち當時の政

孔子少正卯

焚書

始皇の朝

韓非子

治に反對せる思想を載せた書籍の處分さへ實行したのもある。秦の如きはその一例で、已に孝公の時から、民間の政治論を禁じ、犯す者は國境以外に放逐し、治安に害ありと認め、『詩經』『書經』等の古典を焚いたことがある。

戰國の末に出た韓の韓非は、その著『韓非子』のうちに、國を治むるには、法律とそ  
の法律を執行する官吏とあれば十分である。この以外に先王の道とか、聖人の書  
とかの必要はない。然るに今天下到る所に、儒者と稱する者あつて、古聖の書を引  
いて當世の政を誹り、上下の心を惑はしむるは、甚だ不都合千萬である。先づこの  
儒者を除き去ることが、刻下の急務であると主張して居る。韓非と同時の秦の呂  
不韋も亦、その著『呂氏春秋』のうちに、略同様の意見を述べて居る。

始皇帝はかねて韓非を崇拜して居つた。寡人得見此人、與之游、死不恨矣とさへ  
いふた程である。呂不韋は始皇即位の初に、國政を委ねた大臣で、然も始皇の實父  
とさへ傳へられて居る。この韓非、この呂不韋、何れも處士を抑へ古書を除くべし  
と主唱する以上、始皇は最初より處士と古書の處分に腐心して居たのは、寧ろ當然  
のこと、思はれる。かゝる事情の下に、彼の尤も信任せる丞相の李斯が、思想統一

始皇の朝



の爲め、君權擁護の爲め、異端邪説に關係ある古書を禁止せんことを上書したから、始皇は直に之を納れ、遂に所謂挾書の禁、焚書の令が發布されたのである。

秦の焚書は、文運の大厄であつたことは申す迄もない。シカシ世人は多くその書厄を過大視して居るやうである。現に『舊唐書』などにも、三代之書、經、秦、殆盡と記してあるが、こは誇張の言で、頗る事實を誣ふるものといはねばならぬ。始皇の典籍を銷燬した記事は、詳に『史記』に載せてあるが、之を熟讀すると、左の事實を否定することが出来ぬ。

(イ) 秦に不利益な記事の多い六國の史料は焚いたが、秦の史料は焚かぬ。

(ロ) 醫藥、卜筮、農業に關係ある書籍は、民間に使用して差支ない。

(ハ) 上記以外の書籍、殊に『詩經』『書經』及び諸子百家の書は、一切民間に所藏することを禁じ、必ず禁令發布後三十日以内に官省に差出さしめて、之を燒棄した。

(ニ) 朝廷所屬の博士は、如何なる書籍を所藏しても差支ない。

故に民間一般の書籍を燒棄したのは事實であるが、煩雜なる古文を竹簡に漆で書いて、書籍を作つた當時のことゝて、書籍の價も甚だ不廉で、且は携帶にも頗る不

便であつたから、民間の藏書の案外貧弱であつたことは申す迄もない。先秦時代に藏書の多きことを、五車の書と稱するが、竹簡に寫した書籍が五車に滿載する程あつても、今日の印刷にすれば、誠に貧弱なものである。されば當時の學者は、大抵は書籍を貯藏するよりも、書籍を誦讀したのである。東漢時代に紙が發明され、寫書や、容易となつた頃にも、民間では依然誦讀の風を繼續して居つた。また當時『公羊傳』『穀梁傳』等の如く、専ら口傳により、未だ竹簡に載せられなんだ書籍も多かつたから、天下の書を焚くといふ條、世人の想像する程、大なる損害はなかつたものと察せられる。殊に秦の朝廷には七十人の博士があつて、その藏書は無難の筈であるから、秦火災厄の程度は愈輕小といはねばならぬ。その後、楚の項羽が關中に入つて、咸陽の宮殿を一炬に焚き盡した時、官府所藏の典籍多く灰燼に歸したので、古書佚亡の責は、始皇よりも咸陽を焚いた項羽、若くは項羽に先つて關に入りながら、官府の藏書の保護を怠つた、劉邦や蕭何等が負ふべき筈である。

思想統一の爲め、君權擁護の爲とはいへ、天下の書籍を焚くなどは、勿論賛むべきことでないが、たゞ世人は焚書事件のみを知つて、その當時の事情と實際とを察せ



ぬ者が多いから、聊か始皇の爲に辯じたのである。

## 六

〔坑儒〕 始皇帝は挾書の禁令發布の翌年に、諸生四百六十餘人を咸陽に坑殺した。世に所謂坑儒事件である。この事件も根本史料の『史記』を調査すると、後世の所傳は、事實を誣ふるもの、尠からざることが發見される。

戰國の頃から、不死の靈藥を求むることを専門とする、方士といふ者が出來、燕、齊、楚等の諸國王は、何れも方士を信任した。始皇帝も亦當時の風潮に従ひ、幾多の方士を寵用したが、その方士の中で侯生、盧生の二人は、始皇帝を誂き、不死の藥を求むる費用として萬金を貪つたが、固より藥は見當る筈なく、早晚詐僞暴露して、罪に處せられんことを恐れ、行掛けの駄賃に、散々始皇を誹謗して逃亡した。始皇は金を騙られし上に、惡口されしことゝて大いに怒り、侯盧二生と日夕往來して、朝廷や皇帝を誹謗した咸陽の諸生を驗問させた。所がこれら諸生は、徒に一身を免れんが爲に、卑劣にも甲は乙に、乙は丙にと互に罪を他人に嫁したから、拘引の範圍は次

第に廣まり、遂に四百六十餘人の檢擧となつたが、眞の犯罪者は發見出來ぬ。始皇も處置に窮して、容疑者全體を坑殺することゝした。これが所謂坑儒事件の實相である。

右の事實に由つて觀ると、坑殺された諸生は多く方士である。其うち幾分儒生も混じて居つたやうであるけれど、此等の儒生とても、咎を人に嫁して平然たるが如き破廉耻漢で、儒生の名あつて儒生の實なきものである。殊に彼等は何れも誹謗妖言の犯罪容疑者である。無辜の儒者を、何等の理由なくして殺戮したものと、同一視することは出來ぬ。

犯罪容疑者を擧げて無差別に坑殺したのは、やゝ亂暴の譏を免れぬが、當時の事情を斟酌すると、これにも多少恕すべき點がある。罪は輕きに従ひ、賞は重きに従ふとは、儒家の意見で、法家は、その反對に、罪は重きに従ひ、賞は輕きに従ふを原則として居る。法家の説を信奉する始皇帝が、罪の疑はしき者に對して、嚴に従つて處罰したのは、その所信に忠實なる結果である。彼は終始この主義を一貫して居る。坑儒事件に就いてのみ、無情過酷であつた譯ではない。



始皇は一日丞相李斯の途中行列が餘りに堂々たるを見て、君主の位置を無上絶對に置く彼は、甚だ不平であつた。下尅上の漸とならんことを恐れてゐる。然るにその翌日から、李斯は打て變つて、その前騎從車の數を減じた。始皇は之を見て、我が不平を李斯に内通した者があるとして大いに怒り、左右の者を案問したが、遂にその人を認め得なから、當日左右に侍した者一同を捕へて、死罪に處したことがあつた。又その後、東郡地方で石に始皇帝死而地分の七字を刻した者があつた。始皇は官吏を派遣して、その犯罪者を搜索したが、目的を達し得ずして、遂に附近の住民一同を死罪に處したこともあつた。此等の事件を坑儒事件と對比すると、始皇の主義も自から理會することが出来る。

若し坑儒事件の當時に、四百六十餘人の諸生中に、一人でも男子らしい者があつて、自からその犯罪を名乗り出で、一同の犠牲となつたならば、決して彼が如き大事を惹き起さなんだに相違ない。坑儒事件に就いては、始皇の暴戾を責めんより、較る諸生の卑怯を憫むべきこと、思ふ。

私は上數章に涉つて、始皇の内政の重なる點を紹介したが、之によると、彼の政策

は多少非難すべき所があつても、大體に於いて時勢に適切であつたことは、否定すべからざる事實である。その他始皇は天下の武器を沒收したこともあつた。地方の城壁を撤去したこともあつた。また天下の富豪十二萬戸を國都咸陽に移住させたこともあつた。何れも割據の餘風を破つて、一統の實効を擧げ、地方を彈壓して、中央を鞏固にするには必要なる政策といはねばならぬ。

## 七

眼を轉じて始皇帝の外交策を見ると、彼は徹頭徹尾對外硬であつた。彼は南北に向つて異族征伐を實行し、帝國主義を發揮して居る。この異族征伐には、かの歴山大王の亞細亞征伐の如く、豊太閤の朝鮮征伐の如く、一種の政略をも含んで居るのは勿論である。六國を討平した彼は、異族征伐か外國侵略によつて、國民の注意を外に嚮け、國內の安全を圖るのを、得策と考へたものと見える。

〔越人征伐〕始皇は先づ南に向つて越人征伐に着手した。越人は今の浙江、福建、廣東、廣西四省から、安南地方にかけて蔓延して居つた種族で、幾多の部落に分裂し



たから、百越と呼ばれて居つた。春秋の末期より次第に中國の舞臺に活動して來た。有名なる越王勾踐の如き、その君主こそ夏の後で、漢族と稱して居るけれども、國民は皆この越種族であつた。始皇は六國を統一すると間もなく、江を越えて次第に越人を征服し、その地を閩中、福建、桂林、廣西、南海、廣東、象郡、安南の四郡に分ちて中國に加へ、又こゝに漢族五十萬人を移住させた。漢族の南方殖民はこの時から始まつて、代一代と發展した。近く佛蘭西が後印度方面に勢力を扶植するまで、二千年の間、南海諸國は常に支那を宗主と仰いだ由來も、こゝに起源するのである。殊に始皇の南方經略によつて、海上交通の門戸が開けた。南海の番禺、象郡の交趾——過去二千年間絶えず外國貿易船の輻輳したこの二都會——が始めて中國民族の手に歸したからである。是より象牙、犀角、瑇瑁、珠璣等殊域の産物の輸入が日に多きを加へる。やがて中國の市舶、大秦の賈船の往來が始まるといふ風に、東西交通の序幕が、茲に開けることゝなつた。

〔匈奴征伐〕 始皇は更に北の方匈奴を驅逐した。支那の歴史に據ると、匈奴の祖先は淳維といひ、夏の桀王の後と稱して居る。夏の後などは固より信憑するに足

らぬが、その祖先の淳維といふ名が訛つて、匈奴といふ種族の名となつたものであらう。始祖の名を其儘種族の名とすることは、北狄に普通の慣習である。匈奴の文字は戰國時代から始めて使用されて居る。その以前は或は獫狁、或は獫狁、或は葷粥、薰育、獯鬻等、區々一定して居らぬ。しかし何れもフンニの音譯で、たゞその文字を異にしたのみである。即ち西曆四世紀の頃から西洋史上に現はれ來るフン種族のことである。この種族は上古から絶えず漢族を劫掠して、尠からざる迷惑を加へて居る。周の祖先の古公亶父が、岐山へ避難したのも、獯鬻の爲である。西周末の詩人が、靡室靡家と嗟嘆したのも、獫狁の爲めである。始皇帝は天下一統の後、蒙恬を將として兵三十萬を率ゐて匈奴を征伐せしめて、悉く之を黄河以北に驅逐した。攘ひ斥けた地面に三十四縣——或は四十四縣とも傳ふ——を置き、ここに漢族數萬家を移住せしめ、所謂萬里の長城を築きて、華夷の疆界を嚴重に限定した。

北狄の侵入に對して長城を築くことは、必しも始皇帝の時に創つたのではない。『詩經』に據ると、西周の末頃から、朔方に城きて獫狁を防いで居る。降つて春秋戰



國の交から、秦・魏・趙・燕等北邊の諸國は、相繼いで北狄を防がん爲に、長城を築いたことがある。始皇帝は幾分これら以前の長城を利用して、萬里の長城を作つたものと見える。その萬里の長城は、今の甘肅省鞏昌府附近から起つて、黄河の外を廻り、今の山西・直隸二省の北邊を縫うて、盛京省の東部に達したのであるから、勿論今日現存の長城とは、大に相違して居る。今日の長城は、秦以後西漢・後魏・北齊・北周・隋・明時代に涉つて、幾度となく増築又は改築されたものである。

## 八

〔領土の膨脹〕 かく南に北に異族を攘うて土地を拓いた結果、始皇帝時代に於ける漢族の版圖は、空前に擴大された。儒者は唐虞三代を黄金時代と稱揚するけれども、その時代の漢族の勢力圏は、甚だ狹隘であつた。周時代でも、漢族の根據地の所謂中國は、黄河の左右に限られ、今の地理でいへば、大略河南省の全部と、陝西・山西・直隸・山東・湖北の一部に過ぎぬ。殊に白狄・赤狄を始め、犬戎・小戎・驪戎等の異族の、その間に雜居するもの多く、齊・秦・楚・吳・越等邊裔の國となると、言語風俗など随分漢族

と相違して居つたのである。秦の始皇帝が四圍の異族を攘うてから、漢族の勢力範圍は、周の初に幾倍し、その四十郡——もとの三十六郡に、後に拓いた四郡を加へて——の廣袤は、殆ど今の支那本部と大差なくなつた。

始皇帝の力によつて、空前の一大帝國が建設されると共に、秦の威名は遠く海外に振ひ渡つた。兩漢から三國時代にかけて、北狄でも西域でも、中國人と呼んで常に秦人といふて居る。南海方面でも同様であつた。西曆一世紀頃の希臘人の地理書には、世界の極東の國をシナと記載してあるが、恐くは當時南海方面で、中國を秦と呼んだのを、極東來航の泰西の商賈達が訛り傳へたものであらう。シナといふ國號の起源に就いては、學者間に異説があつて、或は雲南地方の滇國と結合せしめ、或は之を安南地方の日南郡に還原せしめて説明する人もあるが、皆採るに足らぬ。シナは必ず秦と關係せしめて解釋すべきものである。

シナ又はシニスタン(秦人の國の義)といふ名稱は、印度から中央亞細亞・西亞細亞へかけ、更に歐洲まで尤も廣く使用され居る。支那又は至那等はシナの音譯、震旦又は振旦等はシニスタンの音譯である。漢や唐も國威四方に張つた結果、その國



號は中國の代名として、外域に使用されたことがあるけれども、到底支那の如く世界的でない。秦の天下に君臨した年月は短かつたに拘らず、その國名は中國の國號として、不朽に傳へらるゝことゝなつた。

## 九

如上の事實によつて考察すると、始皇は實に中國民族の爲に氣を吐いた者といはねばならぬ。外敵に對しては一意和親偷安を事とする、支那歷代の君主の間に在つて、彼は確に一異彩を放つて居る。支那四千年の外交史——屈辱的失敗的外交史——は、彼によつて纔にその面目を維持し得たといふても、甚しき誇張の言であるまい。

試に秦以後の支那の外交史を達觀すると、漢の高祖は群雄平定の餘威を藉り、三十萬の大軍を率ゐて匈奴を親征したが、白登の一敗に意氣銷沈し、或は宗女を與へ、或は金帛を遣り、ひたすら彼等の歡心を買ふた。高祖の崩後、漢の君臣は専心この政策を襲踏して、如何なる匈奴の慢辱をも神妙に我慢して居る。この間武帝の如

き一二豪傑の君主が出て、北狄征伐を行ふたけれど、要するに九失一得、功は勞に酬ひずといふ有様であつた。支那の史家は歷代の對異族策を評して、周は上策を得、秦は中策を、漢は下策を得たと評して居る。周は果して上策を得たか否かは疑問であるが、漢一代の對異族策は、始皇のそれに比すると、費は多くして功は尠いといふ事實を否定することが出来ぬ。

三國西晉以降は、五胡跋扈の時代で、無頓著な支那人すら、神州陸沈、華胄左衽と憤慨して居る時代であるから、事々しく茲に贅する必要がない。唐の太宗は古今の英主である。天下併合の後、異族に對しては、武斷主義を實施する素志もあつたが、當時の大臣の兵凶戰危の説に動かされて、遂に懷柔和親策を執ることゝなつた。唐一代の間、四裔の君長に、請ふが儘に所謂和蕃公主を下嫁せしめたのは、この政策の結果である。美人天上落。龍塞始應春と詠はれた永樂公主も、九姓旗旛先引路。一生衣服盡隨身と詠まれた太和公主(?)も、皆この政策の犠牲となつた和蕃公主である。シカシ貪婪饜くなき夷狄は、通婚のみで羈縻されるものではない。朝に公主を送ると、夕に金帛を求むるといふ有様であつた。結婚と贈遺とによつて異族



を緩和して、その劫掠を免るゝといふのが、漢・唐——漢族の國威の尤も揚つたと稱せらるゝ——を通じて、對異族策の大方針であつたが、結果はやはり不首尾で、羽檄の飛ぶことも、烽火の擧ることも、依然として減少することがなかつた。

宋に於ける契丹・西夏・女眞・明に於ける北虜・南倭の事蹟も、茲に絮説を要せぬ。元・清二代は、天下を擧げて異族の臣妾となつた時代、固より批評すべき限りでない。過去二千年の積弱累辱此の如しとすれば、この間に在つて、南は越人を服し、北は匈奴を攘つて、盛に殖民政策を實行した始皇は、確に中國民族の一大恩人といふべきである。殊に種族革命の成功した中華民國の今日、始皇こそ百代に尸祝さるべき偉人であるまい歟。

## +

私は已に始皇帝の内外の事業を叙述したから、茲に彼の人物に就いて一言いたさう。始皇は細心にして放膽なる政治家であつた。更に又よく己を虚くして人に聽き、衆に謀つて善く斷する政治家であつた。『史記』に始皇帝の政治振りを載

せて、天下の事大小となく、皆自身で裁決して、臣下に委任せぬ。その日所定の裁決を終らぬと、夜中になつても休息せぬと記してある。或は之を以て彼が權勢を貪る故と、非難するのは間違ひである。主權を人に假さぬのは法家の極意で、刑名學を好んだ蜀漢の諸葛亮が、細事を親裁したと同様、寧ろ始皇の勤勉細心なる證據とすべきである。

始皇は細心であると同時に大膽であつた。六國を滅ぼした彼が、如何にその遺族舊臣の怨府となつて居るかは、彼自身は萬承知して居る。前には荆軻の匕首閃き、後には張良の鐵椎が投げられた。尋常一様の君主であつたら、必ず警戒して出遊せぬ筈であるが、彼は何等顧慮する所なく、連年巡幸を繼續した。支那流に膽斗の如しと讚しても差支なからう。

始皇は又世人の設想とは反對に、よく人の諫を容れた。二三の實例を示すと、第一が嫪毐事件である。嫪毐は太后の寵を負ひ、亂を起して失敗し、その黨與は皆重きに從つて處分せられ、太后もこの關係から雍の離宮に移された。この母后の處置につき、齊人の茅焦が死を冒して苦諫した時、始皇は殿を下り、手から茅焦を扶け



起し、その諫を聴き、母を咸陽に迎へ取つて、舊の如く厚遇したことがある。

第二は逐客事件である。始皇は宗室大臣の意見により、他國の産で秦に來り仕へ居る者は、信用し難いといふ理由から、一切之を放逐することにした。この時楚人の李斯は上書して、逐客の利少く害多きを述べ、泰山不讓土壤。故能成其大。河海不擇細流。故能就其深の名句を陳ねたから、始皇は之に動かされ、已に歸國の途中に在つた李斯を召還して、逐客の令を撤回したことがある。

第三は伐楚事件である。始皇は楚を伐たんとて、之に要すべき兵數の多寡を諸將に尋ねた時、李信は二十萬にて可なりといひ、王翦は六十萬を要すと答へた。始皇は李信に聽き、之に二十萬の兵を授けて出征させたが、却つて大敗した。そこで始皇は不面目を忍び、態、當時不滿を懷いて故山に歸臥せる王翦の宅を訪うて、再三その出征を懇願し、遂に楚を滅ぼしたことがある。

此等の實例を見ても明白なる通り、始皇は縱令諫に従ふこと流るゝが如しと迄の雅量はなくとも、過を飾り非を遂ぐる程狹量の人ではない。始皇の評に必ず引用される暴戾自用といふ語は、もと侯生や盧生が始皇を誹謗せんが爲に發した語

で、之によつて始皇を評し去るのは、片言を過信するもので、酷といはねばならぬ。

## 十一

始皇が果斷の人であることは、故らに茲に申し添へる必要がない。天下統一の後、群臣の多數は封建再興を主張したに拘らず、彼は敢然として郡縣の治を行ふた。文字の整理といひ、古典の處分といひ、尋常の政治家では、到底一朝に實行し得ぬ大問題を、彼は何等遲疑する所なく斷行した。始皇が天下の共主となつたのは、僅々十年餘に過ぎぬ。この短年月の間に、比較的多大の事業を實行し得たのは、全く彼の果斷の賜である。

多くの偉人に普通であるが如く、始皇も亦豪華を喜ぶ性質を具へて居る。驪山の陵の如き、司馬遷の記する所、劉向の傳ふる所は、勿論幾多の誇張を加へてあるけれども、その規模構造が、厚葬の風の盛な當時にあつても、人の視聽を聳かしたの事實に相違ない。爾後幾度の破壊發掘の厄を累ねて、頗る原形を損した現在の陵——見る影もなく荒廢して居るが——でも、猶方二百間、高さ十八間許の宛然たる



一阜丘で、當年の榮華を髣髴の間に認めることが出来る。其他咸陽の國都といひ、阿房の宮殿といひ、萬里の長城といひ、彼の計畫したものは、那裡にか雄大の面影を存して居る。或はこの間に幾分、不觀皇居壯。安知天子尊といふ一種の政略も含まれて居つたかも知れぬ。

或は始皇帝の専ら刑法に依頼して、仁義を蔑視するのを非難する者がある。如何にも始皇には多少刻薄少恩の憾ないではない。しかし彼は法家の信者である。法家には仁義が禁物である。かく考へると、始皇が孔孟仁義の道を忽にしたのも、誠に已を得ざる次第といはねばならぬ。一體春秋から戰國にかけては、亂臣や賊子の輩出した時代で、君主の位置は甚だ不安であつた。そこで成るべく君主に多大の權力を與へて、油斷ならぬ臣民——人性を惡と觀するのが法家の説である——を威壓して、國家の安全を保つといふのが法家の主張で、この主張は孔孟の學說よりは、確に時代の要求に適して居つた。等しく儒學の正統と自稱せるに拘らず、孔子の主張した仁は孟子になると義と變じ、荀子に至ると更に禮に變ずるといふ風に、儒家の教義が次第次第に具體的となり、又消極的となつて來たのは、全く當時の

外界の事情に促された變化である。老子はその『道德經』のうちに、

失道而後德。失德而後仁。失仁而後義。失義而後禮。

と述べて、この順序で世間が段々と澆季になるといふのであるが、不思議にもこの豫言が事實となつて現はれて居る。即ち老子自身は道と徳とを説き、次に出た孔子は第三の仁を説き、孟子は第四の義を、荀子は第五の禮を説いた。この次に今一步進めて具體的消極的となるには、法律より外ない。この事情がやがて法家の起源を説明し、併せて始皇が法術に依頼して、天下を治めた理由を説明し得ること、思ふ。

十一

支那人は元來保守主義に囚はれて居る。述而不作。信而好古とか、率由舊章とか、彼等は一切の革新を罪惡視して居る。西晉時代に嘗て黄河に橋を架せんと計畫した時、堯舜すら實行せなんだといふ理由で、朝臣の多數が反對した。かゝる國民の間に、始皇の如き革新的色彩を帯びた政治が、不師古底の暴政として排斥され

保  
守  
主  
義



平新もむ

るのは、已を得ぬ次第である。  
 支那人は又平和主義に囚はれて居る。天子守在四夷とか、王者不治夷狄とか、彼等は消極退守を以て、無上の安全策と信じて居る。昔舜が干羽を舞はして、三苗を來服せしめたのが、彼等の理想である。七徳の舞には首を俛し、九功の舞には顔を抗げるのは、魏徵一人に限らぬ。かゝる國民が始皇の攘夷拓地を以て、兵を窮め武を瀆すものとして、賛成せぬのも無理ならぬことである。

秦の榮華は一朝であつた。始皇がその三十七年に、東南巡游中に病に罹つて崩御すると、その後を承けた少子の胡亥は、やがて宦者の趙高に弑せられ、孫の子嬰は間もなく劉邦(漢の高祖)に降つて秦は亡びた。萬世までもと豫期した始皇の望は絶えて、彼の崩後三年の間に、社稷覆るとは誠に悲惨な末路であるが、之が爲に始皇を輕重することは出来ぬ。帝政は約十年にして倒れても、拿破崙の豪傑たることは否定出来ぬではないか。豊臣家は二世で滅びても、太閤の英雄たることは否定出来ぬではないか。人間の眞價は年月に在らずして、事業に存するのである。始皇は年五十、長生とはいへぬ。四海統一後の在位僅に十二年、較る短祚といはねば

ならぬ。しかし大なる事業をなした。驪山の陵が夷げらるゝことがあつても、長城の礎が動くことがあつても、支那史乘に於ける始皇の位置は確固不拔であらう。

西曆前	始皇帝	事	蹟
二五九	一	始皇帝生る	
二四七	一三	始皇帝位に即き國政を大臣に委ぬ	
二三八	二二	九 嫪毐亂を作す	
二三七	二三	一〇 相國呂不韋を罷め始皇帝政を親らす○茅焦の諫を納る○逐客の令を下す○李斯の諫を聽く	
二三〇	三〇	一七 韓を滅ぼす	
二二八	三二	一九 趙を滅ぼす	
二二七	三三	二〇 荆軻始皇帝を刺さんとして失敗す	
二二六	三四	二一 秦將李信楚を伐つて失敗す	
二二五	三五	二二 魏を滅ぼす	
二二四	三六	二三 始皇帝王翦の言を納れ六十萬の大軍を發して楚を伐つ	
二二三	三七	二四 楚を滅ぼす	
二二二	三八	二五 燕を滅ぼす	



帝		年		譜	
二二一	三九	二二〇	四〇	二一九	四一
二一八	四二	二一五	四五	二一四	四六
二一三	四七	二一二	四八	二一一	四九
二一〇	五〇	二〇九	五〇	二〇八	五〇
二〇七	三六	二〇六	三七	二〇五	三七
二〇四	三三	二〇三	三四	二〇二	三五
二〇一	三〇	二〇〇	三五	一九九	三六
一九八	二七	一九七	二七	一九六	二七
一九五	二八	一九四	二八	一九三	二八
一九二	二九	一九一	二九	一九〇	二九
一九〇	三〇	一九〇	三〇	一九〇	三〇

(大正元年十二月七日稿)。(大正二年一月『新日本』第三卷第壹號所載)

### 支那史上の偉人(孔子と孔明)

私は今後六回に亙つて此の題目の下に、過去の支那に現はれた四人の大人物、即ち孔子・始皇帝・張騫・諸葛亮四人の事蹟を紹介せうと欲ふ。今日は民衆萬能の時代で、最早偉人英雄の時代でない。今更偉人などを擔ぎ出すのは、時代錯誤かも知れぬ。併しカーライルもいへる如く、世界の歴史は畢竟偉人の歴史に過ぎぬ。過去の歴史から偉人の事業・功績を除き去れば、實に寂寥たるものである。殊に支那の如き國柄——支那人の理想的政治論に従へば、第一番の大人物が天子となり、其次の人物が大臣となりて人民を指導し、人民は無條件にその指導に従ふのが義務と認められてゐる——では、偉人の勢力が尤も大に、影響が尤も廣い。支那では一國一人を以て興り一人を以て亡ぶといふ程で、一代の興亡は、その時代に偉人の有無に據つて決定するかの如く、それ程偉人の位置が重い。その時代の偉人の事蹟を調べると、その時代の歴史の大半を了解することが出来る。今日の支那の現状を見ては、愛想も盡きるが、過去の支那には、中々多くの偉人が出て居る。それ等の



偉人の事蹟は、何かの點に於て吾人修養の手本にもなれば、同時に支那に於ける文化發展の記念碑とも認めることが出来ると思ふ。

## 一 孔子(上)

第一番に紹介すべきは孔子である。孔子の事蹟は餘りに廣く世間に知れ渡つて居つて、態、茲に紹介するに及ばぬかと思ふ。併し支那の偉人の中に、決して孔子を逸する事が出来ぬ。それで簡単に申述べたい。委細の事蹟は、清の崔述の『洙泗考信録』や、我が蟹江博士の『孔子研究』等に譲つて、二三の注意すべき事蹟を紹介いたさうと思ふ。

孔子は元來般の後で、宋の公族の裔である。孔子の出生より百數十年前に、孔子の祖先は或る事情に餘儀なくされて、宋を去り魯に移つた故、孔子の一家は魯の人となつたのである。孔子の祖先の中には、或は忠義の人、或は道德高き人、學問ある人、勇力ある人など多く輩出して居る。その家から孔子の如き聖人の生れたのも、偶然であるまい。孔子の出生は、普通に『史記』に據つて、魯の襄公の二十二年(西紀

前五五二)となつて居るが、之は『公羊傳』や『穀梁傳』に據つて、襄公の二十一年の出生とする方が正しい。哀公の十六年(西紀前四七九)に、七十四歳で世を辭されたのである。

孔子の生誕地は『史記』によると、魯の昌平郷陬邑である。大體に於て今の山東省の曲阜縣の文廟の所在地に當るといふ。『孔子家語』によると、孔子の父の叔梁紇(或は陬叔紇)は、孔子の三歳の時に歿して居る。兎に角孔子が早くその父を喪つて、母の手に養はれたことは疑ひない。世界の偉人の傳記を調べると、釋迦も降誕と同時にその母を喪ひ、マホメットは更に不幸で、母の胎内に在る頃にその父を喪ひ、七歳の時にその母にも別れ、伯父の家に養はれた。耶蘇も亦早くその父と別れて居る。兩親や片親を喪つた子供は不幸に相違ないが、この不幸者の中から、存外世界の大偉人が現はれて居るといふことも、注意に價する事實と思ふ。

孔子の少時は貧乏に追はれて、可なり生活に苦勞されて居る。この貧苦の間に在つて、よく勉學された。一體支那の古代では、四十歳迄は修養の時代で、四十歳前後から仕官するが普通であつた。『禮記』の曲禮にも、四十曰強而仕とある。然る



仕官

に孔子の四十歳前後は、生憎魯國の内亂時代で、魯の君昭公は三桓の爲に放逐せられて、他國に流浪すること七八年に及ぶ。孔子の仕官し得る時機でない。昭公が外國で薨じ、その弟の定公が三桓に擁立されて魯の君となると、間もなく孔子は魯の國に登庸さるゝことゝなつた。孔子の五十歳前後のことゝ思はれる。

孔子は魯に用ひらるゝと、その内治外交二方面に互つて、相當に著しい成績を擧げた。外交に於ては絶えず魯を脅迫した隣國の齊に對して、その不當な要求を斥け、獨立國としての魯の面目をよく保持した。

魯の内治の弊竇は、公族の三桓が政權を握り、國君は虚位を擁して、所謂尾大振はずといふ點にあつた。孔子はこの歴代の弊竇を除去すべく、三桓の諒解を求めて、その權勢を抑制する計畫を實行したが、その計畫成るに垂んとして、一部の反對に遇ひ、九仞の功を一簣に缺くことゝなつた。その内政上の蹉躓が原因となつて、孔子は定公の十三年(西紀前四九七)に、魯の政界から退いた。

志を魯に絶つた孔子は、その生國を去り、天下を周遊すること十三年に及んだが、矢張り志を得なかつた。そこで魯に歸つて茲に晩年を送つた。孔子の一生を

孔子の隱居

天(天)社

通覽すると、大約左の三期に區別することが出来る。

- (一)五十歳頃までは修養に努めて、政治家として世に立つべき機會を待つた時代。
- (二)五十歳頃より六十八歳頃までは、政治家として世に立ち、若くば政治家として世に出づべく、天下を周遊した時代。
- (三)六十八歳頃以後は政界に望を絶ち、その道を後世に傳へる準備をした時代。

『論語』述而篇に甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公也とあるのは、政治家として周公の禮政を復活せんとした、彼の素志の到底現實し難きを自覺せし時の失望の聲で、恐らくは彼が望を政界に絶つた當時に發したものと想はれる。

## 二 孔子 (中)

さて孔子が志を政界に絶つて、身後の用意に着手したが、その用意とは、畢竟著述と弟子養成との二途に過ぎぬ。『史記』に據ると、今日傳ふる所の五經、即ち書經、詩經、易、禮、春秋は、皆孔子が筆削したことになる。之には多少の異説もあるが、兎に角一般には爾く信せられて居る。若し孔子が政界に志を得て、國務に鞅掌して居つ



たら、或は著述の餘暇に乏しく、従つて經書を十分に筆削し得なかつたかも知れぬ。この點から観ると、孔子が政治家として不遇であつたことが、却つて經書の爲に祝福すべきかと思ふ。

弟子養成のことは、孔子は三十而立、四十不惑といふ程に、早く修養が出来て居るから、四十歳前後から已に若干の弟子はあつたであらう。併し専心に弟子の養成に努力したのは、その晩年のことと思はれる。

孔子には七十二弟子とて高弟が七十二人ある。その七十二人の年齢の判明せるものは、『史記』に據ると二十三人程ある。その二十三人の年齢を調べて見ると、孔子より非常に若い者が多い。左表を参考されたい。

一人	孔子より一歳乃至九歳若きもの
二人	十歳乃至十九歳若きもの
三人	二十歳乃至廿九歳若きもの
六人	三十歳乃至卅九歳若きもの
七人	四十歳乃至四十九歳若きもの
四人	五十歳乃至五十九歳若きもの

殊に孔門の弟子中で、尤も後世に名の聞えたる顔回は、孔子より若きこと三十歳、子貢は三十一歳、子夏は四十四歳、子游は四十五歳、曾參は四十六歳、子張は四十八歳

である。この事實は、孔子が比較的晩年に多くの弟子を養成した、一の證據に供することが出来る。

濟々たる孔門の諸弟子中、尤も傑出したのは、申す迄もなく顔回字は子淵である。彼が孔門第一の人物として、他の諸弟子達と夙然隔絶して居つたことは、『論語』を一讀すれば容易に理會することが出来る。孔子も頗る顔回を推賞して居る。孔門の諸弟子の中で、子貢は才學を以て世間に聞え、當時の一部の人達からは、その師の孔子以上とさへ評判された人である。その子貢に孔子が子貢自身と顔回との優劣を尋ねられた時に、子貢は答へて、

賜(子貢)也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。

といひ、之に對して孔子が、

弗如也。吾與女弗如也。

と評したことが、『論語』の公冶長篇に見えて居る。之に據つても顔回が天資聰明の人で、孔子及び諸弟子から天才を以て遇せられたことがわかる。加之彼と孔子とは、名は師弟にして情は父子の如く、孔子も回也視予猶父也(先進篇)と申されて居

れんと顔回。



る。孔子が天下周游中に、さる地方で遭難されて、顔回と離れ、となつた。孔子は顔回が死んだのではないかと、一時非常に心配されたが、間もなく安全に一行に加はつた顔回は、孔子の心配を謝して、子在。回何敢死(先進篇)と申して居る。殆ど生死を共にする迄許し合つた間柄といはねばならぬ。孔子がこの顔回に多大の望を屬し、自分の死後その主義を後世に傳へ、若くはその抱負を世間に行ふに就いて、この人を第一の後継者と目指して居つたのは申す迄もない。所がこの顔回が不幸にして短命で、孔子に先つて世を辭した。

顔回の死んだ年代は分明でない。たゞ孔子の晩年に當ることは疑を容れぬ。多分孔子の七十歳の頃かと思はれる。かねて顔回に多大の望を掛けたゞけ、彼の辭世に對して、孔子は氣の毒な程落膽せられ、噫天喪予。天喪予(先進篇)とさへ嘆息されて居る。又孔子が顔回の家に向弔した時、平素悲喜ともに節を踰えぬ孔子に似合はず、諸弟子の驚き怪む程激しく慟哭して、非夫人之爲慟而誰爲(先進篇)とさへ極言されて居る。この後ち魯の君哀公や魯の大臣の季康子に、我が弟子のことを聞かれた時、孔子は何れにも、

有顔回者……不幸短命死矣。今也則亡(先進篇雍也篇)。

と對へて居る。孔子が何時までも顔回を忘れ得なかつたことがわかる。孔子の生涯の中に、この顔回の死んだ時程氣の毒に思はれる時はない。孔子の晩年は極めて不幸であつた。顔回と前後してその實子の鯉(伯魚)を喪ひ、また愛弟子の一人なる子路も衛の國難に死んだ。併し顔回の死は孔子にとつて第一の不幸で、之が爲に孔子の身神に大なる痛手を受けたこと想像するに餘ある。かくて顔回の死後三四年にして、我が孔子も世を辭された。孔子の墓は今の山東省の曲阜縣の北郊約十四五町許りの孔林の中に在る。孔林とは孔子を始め、その一族の墓地である。

### 三 孔子(下)

最後に孔子の人格について一言を申し添へたい。私は先年『斯文』といふ雑誌の孔子追遠號に、孔子の人格に關する私見を披瀝して置いたから、之を抄録して茲にその大要を紹介する。



(第一)孔子の一生は平凡である。その経歴も平凡で奇蹟がなく、その學説も平凡で豫言がない。他の精神界の偉人には、釋迦でも、基督でも、マホメットでも、皆奇蹟や豫言が伴つて居る。彼等は或時期に、人界から神界に移つて居る。人界を超越して居れば居る程、彼等を直ちに人間修養の手本となし難い。獨り孔子のみは終始人界を離れず、人間を以て始まり、人間を以て終つた。孔子はその偉人たる點に於て、釋迦や基督や、マホメットに一歩も譲らぬであらうが、その経歴やその學説は、やゝ平凡を免れぬ。平凡の偉人といふのが、孔子の特色であらう。支那經典の英譯者として、又オクスフォード大學に於ける支那學講座擔任の最初の教授として、名高いレッグは、曾て孔子を評して、

公平の立場から觀て、孔子の性格にも學説にも、偉人の面影を見出し難い。と申して居る。レッグの評は勿論間違つて居るが、その間違ひの裡にも、平凡の偉人たる孔子の面目が現はれて居ると思ふ。

(第二)上述の如く孔子は大體に於て平凡で、たゞ不斷の努力によつて、偉人の位置に到達したのである。孔子の如く修養の効果の顯著なる人は、殆ど他に比類がなか

らう。この點が他の偉人とは立ち優つて、吾人の修養の手本として、尤も適當な人物と思ふ。

『論語』を見ても明白なる如く、孔子は絶えず努力して、年一年と進歩した人で、その進歩の順序も極めて規則正しく、宛も學生が小學より中學、中學より高等學校、高等學校より大學と、年を追うて進級して行く面影があつて、誰人にも眞似出来る様な階級を歴て、層一層と人格を高めて居る。長い修養の間に、少しの不思議も奇蹟もない。孔子はその晩年に、一生の修養に就いて、吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩(爲政篇)と申して居る。彼が老の將に至らんとするのも忘れて、晩年まで孜孜として修養に努力せしことがわかる。世界の偉人の中で、孔子程修養に努力した人はあるまい。孔子は自ら我非生而知之者(述而篇)といふて、自身の生れながらにして偉人たることを否定し、修養によつて成功した平凡の偉人たることを自白して居る。後世の儒者等が孔子を尊崇する餘り、孔子を生知安行の聖人として、強いて凡人と區別せんとするのは、不心得千萬と申さねばならぬ。殊に近年公羊學を唱ふる輩が、孔子に



種々の奇蹟を附會し、之を豫言者扱せんとするは、實に孔子を誣ひ、孔子を賊するものと申さねばならぬ。

(第三)孔子の人格は頗る圓滿である。「論語」に子貢が孔子を評して、温良恭儉讓學而篤とあるが、尤もよく孔子の人格を描出して居ると思ふ。又「論語」に子絶四。毋意。毋必。毋固。毋我(子罕篇)とある通り、孔子は決して我見を固執せぬ。彼の言行は終始中庸で、極端や過激がない。従つて危険もなければ弊害も尠ない。

此の如く孔子は圓滿なる人格を具へ、言行中庸を失せぬから、彼はその一生を通じて、殆ど他から迫害を受けたことがない。彼は一生不遇ではあつたが、その學說その言行は、當時の人から一般に尊敬されて、決して迫害を受けなかつた。桓魋の難や、陳蔡の厄など傳へられて居るが、之は例外の出來事であつた。又その實情も明白でない。嘗にその當時許りでなく、後世になつても、孔子は殆ど非難されたことがない。儒教に反對する人々でも、孔子には反對せぬ。世界の偉人の中でも、孔子の如く非難反對の尠ない人は稀有と思ふ。我が徳川時代の中世以後に國學が勃興して、所謂日本主義が流行すると共に、あらゆる支那文化に反對することになつた。中に

も本居宣長や平田篤胤等は、儒教を攻撃して餘力を遣さず、儒教の所謂聖人といふ聖人に、思ひ切つた罵倒を浴せて居る。併し流石に孔子だけは非難せぬ。或は非難出來なかつたかも知れぬ。兎に角支那嫌ひの國學者達も、孔子だけは何等非難を加へざるのみならず、却つて譽め切つて居る。本居は

聖人と人はいへども、聖人の類ならめや、孔子はよき人。

と詠んで居る。惡口黨の旗頭の平田すら、孔子は心も行も我が師翁其儘だと推服して居る。

(第四)孔子は今より二千四百年前の古代に生存せしに拘らず、彼の日常生活の有様は、不思議にも委細に今日に傳つて居る。「論語」を見ると、孔子その人を目の邊に見る様な心地がせられ、殊にその郷黨篇には、飲食より坐臥に至る迄、孔子の生活状態を描き出して殆ど遺憾がない。食不語。寢不言とか、立不中門。行不履闕とか、必しも大聖孔子の行爲として、殊に表出するに當らぬ程の平凡な記事が疊見して居る。かゝる飾氣のない偽らざる、古代の偉人の日常生活状態の今日に傳はるのは、孔子に限つたことで、之も亦吾人修養の手本として、孔子が他の偉人に勝つて居



る點と思ふ。

要するに孔子は平凡なる偉人たる點、修養によつて向上した經路の尤も明なる點、人格の圓滿なる點、日常生活の尤も詳細に、又尤も飾氣なく傳はれる點、殊にその終始人間離れをせぬ點、此等の諸點で、他の世界の偉人達と相違して居り、同時に吾人の修養の手本として、尤も適當なる所以と思ふ。吾々の如き平凡な人間でも、努力して修養さへすれば、別段奇蹟の如き筋道を辿らすとも、孔子の様な位置にまで向上進歩することが出来るといふ、眞實の手本を示す點が、確に孔子に限つた特色である。

#### 四 諸 葛 亮 (上)

支那史上の偉人として、私は第一に孔子を挙げ、第二に始皇帝、第三に張騫を紹介したが、始皇帝の事蹟は、已に大正二年一月の『新日本』に載せてあり、又張騫の事蹟も、大正五年二月発行の『續史的研究』中に掲げてあるから、茲には始皇帝と張騫との事蹟を掲載することを省略して、直に第四の諸葛亮、即ち諸葛孔明の事蹟を紹介

する。

一體支那人には表裏が多い。看板と實際とは大抵一致せぬ。彼國の梁啓超の如きも、支那通有の一缺點として、好偽を擧げて居る。古來有名な支那の政治家や軍人を見渡しても、心と口と、口と行とは、別々となつて居て、人の反感をそゝる様な人物が多い。この間に在つて、獨り諸葛亮のみは至誠一貫して、その行動に一點の不純をも認めぬ。誰人と雖も諸葛亮には深厚なる同情を起こし、又誰人でも諸葛亮からは至大なる教訓を受けることが出来る。従つて古來人物評をする學者の中に、殆ど一人も諸葛亮を非難した者が無い。机上の書生論で、隨分吹毛求疵的の評論を好む宋の儒者でも、諸葛亮だけは、大抵は無條件で獎推する。張栻(南軒)や朱子の如き、皆彼を推して三代以後の第一人者とする。支那人嫌ひで有名な平田篤胤の如きも、諸葛亮に對しては、最上級の賛辭を惜まぬ。

此人生涯の行は、唐人ながら篤胤實に間然すること能はず。孔子の後たつた一人の人と思はる。……諸越人の言に、孔子以前無孔子。孔子以後無孔子。といつたが、篤胤は孔子以後唯有孔明と思はる、ここで御座る『西籍概論』卷三。



さて諸葛亮は字を孔明といふ。瑯邪陽都人といふから、今の山東省沂水縣附近に生れたのである。彼の兄の諸葛瑾は、後に呉に仕へて大臣となり、徳行の高き人で、呉主の孫權に信任せられたこと、殆ど劉備と孔明の如き有様であつた。諸葛亮は東漢の靈帝の光和四年(西曆一八二)に生れた。早く父を喪ひ、従父の諸葛玄の保護を受けた。その従父が荊州牧劉表の許に世話になつたから、自然諸葛亮も亦荊州に住むことゝなつた。やがて従父の死後、彼は襄陽附近の田舎に退隱した。丁度その頃劉備が曹操の爲に逐はれて、荊州の劉表の許に身を託したから、茲に兩人接近の機會が出来た。かの有名なる草廬三顧は、獻帝の建安十二年(西曆二〇七)即ち孔明の二十七歳の時の出来事である。この時孔明は早く已に天下三分の計畫を定めた。曹操は最早天下の十の七を手に入れ、兵士も多く物資も豊で、到底正面から之に抵抗し難い。孫權は東南の地に據り、父兄三代の基礎堅ければ、之を味方に利用して、巴蜀の方面に新に立脚地を求めねばならぬといふのである。

所が時局が豫期以上に切迫して、その翌年に曹操が荊州に侵入すると同時に、劉表は病死した爲め、荊州は一旦曹操の手に歸する。劉備は殆ど身を容るゝに所な

く、難を南に避けて、救を孫權に求めることゝなつた。この時劉備の使者となつて、孫權を説服に出掛けたのが孔明である。孔明が首尾よく孫權を説服して、味方に引き入れた結果として、有名な赤壁の戦が起つた。この赤壁は今の湖北省の嘉魚縣附近で、夏口(漢口)の上流に當る。蘇東坡の赤壁賦の赤壁は夏口より下流で、今の湖北省の黃岡縣に當る。故に蘇東坡は西望夏口と記して居る。三國時代の赤壁なら、西望夏口でなく、東望夏口でなくてはならぬ。東坡が歴史地理に暗くして誤を傳へて以來、黃岡縣の赤壁が普通に古戰場として認めらるゝ様になつた。さてこの赤壁の戦に曹操が失敗して、南支那併合の機を失すると共に、孫權は揚子江中流以下の南支那を占領し、劉備はやゝ後くれて、建安十九年(西曆二一四)に江を溯りて巴蜀をどり、かくて天下が三分して、魏・蜀・吳三國鼎立の姿となつた。

劉備は蜀を占領して國を建てたが、その整理がつかぬ中に、西曆二百二十三年に世を辭し、十七歳の劉禪がその後を承けた。劉禪は年も弱し、質も凡庸であつたから、劉備の遺命を受け、後事を託された、孔明の苦勞は並々でない。丁度この時四十三歳になつた孔明は、丞相として一國の政治を統べ、又益州牧を兼ねて親しく地方



行政に當り、又その以前から司隸校尉をも兼ねた。一口に申せば、彼一人で總理大臣、東京府知事、警視總監を兼務するので、その多忙なること設想以上である。殊に責任感の強い彼は、決して職務を忽にせぬ。罰二十以上皆親覽といふ有様で、多忙以上の多忙を極めた。やがて蜀が南征北伐と軍を出す時には、孔明が必ず軍を統率したから、陸軍大臣に司令長官の職を兼ねた譯である。従つて孔明は文字通りに寢食の暇がなかつた。之に就いて當時心ある者は孔明の過勞を諫めた事もある。されど孔明がかく多忙を極めねばならぬ不得已事情があつた。即ち蜀には文武の人材が痛く缺乏して居つた。孔明一人は太陽の如く輝いて居るが、その以外の人物は誠に寥々である。軍事には關羽・張飛・趙雲があつたが、關羽や張飛は早く非命に斃れ、趙雲一人は生存したが、之も久しからずして世を辭し、その以後には名ある大將は殆ど存在せぬ。文官の方は一層淋しい。魏は流石に中原を領して、人物雲の如くにある。吳も早く東南に據つて、相當人物も集つた。獨り劉備は久しく流浪生活を營んだ爲め、人物を招致する機會を失つた。最後に蜀に根據地が出来たが、邊鄙で人物に乏しい。孔明一人が特に傑出して居つたのと、その他に人

物がなかつたのと、この二理由が、勢ひ孔明をして多忙過勞に陥らしめたのである。

### 五 諸 葛 亮 (中)

蜀の内治が略整理がつくと、孔明は西曆二百七十年に、始めて魏を伐つべく出征する。この時劉禪に上つたのが、かの前出師表で、所謂鬼神をも泣かしむると評さるゝ程の名文である。字句に何等の技巧はないが、全篇赤心の結晶である。爾來孔明は七年の間、その死に至る間際まで、餘事を擲つて再三再四出征を續けたが、蜀から魏へ出征するには、軍糧運搬に想像以上の困難があるのと、又孔明の計畫を實行するだけの大將が不足した等の原因で、十分の成功を見得ぬ間に、彼は出征の軍中で病死した。そは西曆二百三十四年で、彼の五十四歳の時であつた。今少しく彼に年を假さばとは、誰人にも起る同情である。

一體魏を征伐することは、可なり困難な事業であつた。當時魏の口數は四百五十萬、蜀の口數は九十萬で、蜀の魏を伐つのは、兵力資力五倍以上の敵を相手とする譯である。當時から痛く孔明の計畫に反對した人もあつた。孔明自身もよくそ



の困難を承知して居つた。故に彼の後出師表に、

漢賊不兩立。王業不偏安。……然不伐賊。王業亦亡。惟坐待亡。孰與伐之。……臣受命之日。寢不安席。食不甘味。思惟北征。……臣鞠躬盡力。死而後已。至於成敗利鈍。非臣之明。所能逆觀也。

と述べて居る。然らば何が故にその困難を冒して北征を續けた歟。それには強い理由がある。漢は東西を通じて、天下に君臨すること四百年に達し、その餘澤は深く人心に浸潤して居る。劉備は漢の疎屬として、世人の彼に漢の再興を期待するもの多く、劉備も亦漢の再興を標榜した。故に漢祚を篡奪した魏を征伐することは、劉備にとつて第一の義務で、又蜀の存在の第一義であらねばならぬ。若し北伐を中止したならば、蜀の存在が無意義となる。殊に孔明の立場からいふと、劉備が辭世の際に、懇々彼に漢業回復を依囑し、この目的を遂行の爲には、劉禪を廢しても差支へないまで極言して居る。孔明としては道理からいふても、私情からいふても、一日も北伐を忘るべきでない。魏を征伐することは、成敗利害を超越した大問題である。成敗を度外視して、一直線に道理に殉じ、義務を果したといふ所に、

孔明の尊い人格が露はれて居る。曾子の所謂自反縮<sup>ナホク</sup>。雖千萬人吾往矣とはこれである。

孔明の生涯の中で、私の尤も感激に堪へぬのは、その草廬三顧の時でなく、吳に使用して孫權を説服した時でなく、又南蠻を征伐して、孟獲を七擒七縱した時でなく、實に成敗を度外に北伐を實行して、義務に殉じた時に在る。若し眼前の小利小康からいへば、蜀の險阻を守つて、北伐などを企てぬ方が得策かも知れぬ。併し此の如きは所謂瓦全で、蜀の自殺に外ならぬ。かくては決して天下後世の同情を買ふ事が出来ぬ。後世まで蜀に同情者の多い所以は、利害を離れて名分に殉じたからである。西晉の陳壽の『二國志』には、魏を正統としてあるが、東晉の習鑿齒以來、之に反對して蜀を正統に推す學者が多く、南宋以後支那の歴史は、蜀を正統に、魏を閏位に置くことに一定した。正統論は力の大小によるのではなく、理の當否に據るべきものである。Right以上に重きをRightに置く正統論は、世道人心に大なる影響を及ぼして居る。わが『神皇正統記』もその影響を受けて現はれたものである。孔明の北伐はこの正統論の基礎を置いたもので、かゝる重大なる影響を、千歳の後に及



ぼしたことを記憶せなければならぬ。

### 六 諸葛亮 (下)

終に位んで孔明の人物について、二三の管見を加へたい。

#### (1) 至誠忠義

支那は古來革命の國で、君位の分は定つて居らぬ。「左傳」にも君臣無常位と見えて居る。今日の臣下も、明日の君上となり得る國柄である。従つて支那の君主は、赤心を臣下の腹中に置くことが六ヶ敷い。絶えず臣下に對して、猜疑警戒の眼を見張らねばならぬ。従つて君臣の間、水魚の如しといふ場合は、殆ど絶無に近い。寛仁大度と評せられる漢の高祖すら、その功臣を殺戮して、身の安全を圖るといふ有様である。所が獨り劉備と孔明との間は、水魚その儘であつた。こは劉備の至徳にもよるが、同時に孔明の誠忠にもよること、思ふ。

それよりも一層感心に堪へぬのは、劉禪と孔明との關係である。劉備がその死に臨み、孔明に後事を託した時に、嗣子可輔輔之。如其不可。君可自取といひ、又劉

禪に對しては、汝事丞相(孔明)如父と申渡して居る。劉禪時代に蜀の全權は、孔明一人の手に歸した。支那の國情では、かゝる場合に權臣が臣節を完くすることが甚だ六ヶ敷い。權臣自身は臣節を完くする積りでも、その周圍の者が許さぬ。北宋の太祖がその近衛の大將の石守信に對して、麾下欲富貴。一旦有以黃袍加汝身。汝雖欲不爲。其可得乎と警戒したのは、支那の國情から觀て無理ならぬ警戒である。所謂主幼にして國疑ふ時代には、聖人と仰がれる周公すら、野心ありと流言を立てられたでない歟。白樂天の所謂周公恐懼流言日とはそれである。然るに孔明に對しては、一度もかゝる惡評が立たなかつた。かゝる場合に處して、完全に臣節を盡し得た者は、支那では古今殆ど孔明一人と申してもよい位である。之が孔明の至誠忠義の人たる結果に外ならぬ。

#### (II) 公平無私

『三國志』の著者陳壽は、孔明の政治振に就いて、次の如く評して居る。

諸葛亮之爲相國也。撫百姓示儀軌。開誠心布公道。盡忠益時者。雖讐必賞。犯法怠慢者。雖親必罰。……善無微而不賞。惡無纖而不貶。……刑政



雖峻而無怨者。以其用心平而勸戒明也。

この陳壽はもと蜀の人で、その父の時代から種々の事情で、諸葛一家に對して、餘り好い感情を有たぬ筈の人であるから、寧ろ孔明を實際以上に貶しても、實際以上に褒めることのない人であるが、その陳壽の評にして右の如くである。

孔明は必罰主義で随分人を罰したが、決してそれ等の人々から怨を受けぬのみか、却つて心服されて居つた。それは彼に暖い涙があつたからである。彼は第一回の北伐の時に、大將の馬謖が彼の指揮に違背して敗軍した罪を正すべく、之を誅戮した。馬謖は孔明の尤も親愛した軍人で、馬謖自身も明公(孔明)視、謖猶子、謖視、明公猶父と申して居る。眞に父子同様の間柄であつた。併し法の前には私情を容れぬ。孔明は馬謖の罪を正した後ち、泣いてその靈を祭り、又よくその遺族を保護した。

孔明は又廖立といふ官吏を罪して、身分を平民に下げて、遠隔の地へ流謫した。又李平といふ兵糧方の總大將の不都合を責めて、この人をも流謫した。この二人は孔明の死を聞いて、何れも悲泣し、殊に李平の如きは、悲嘆の餘り、遂に病を發して

死んだと傳へられて居る。此の如きは畢竟孔明の所置に一點の私心がなく、罰せられた者も得心して、罪に服したからである。

『孟子』の盡心章上に、以<sub>レ</sub>佚道使<sub>レ</sub>民。雖勞不怨。以<sub>レ</sub>生道殺人。雖死不怨と述べて居るが、その道理を事實の上で立證したものは孔明である。孔明によつて孟子の所説の眞理なることが證明される。政治の眞諦は古今同一である。今日わが國の政治家にも、この佚道と生道を忘れぬ様に心掛けて貰ひたいものと思ふ。

### (III) 清廉寡欲

『三國志』の諸葛亮傳に、

初亮自表後主(劉禪)曰。成都有桑八百株。薄田十五頃。子弟衣食。自有餘饒。……不別治生以長尺寸。若臣死之日。不使內有餘帛。外有贏財。以負陸下。及卒如其所言。

と見えて居る。孔明は十餘年の間、蜀の全權を握つて居つた。發財蓄積意の儘である。縱令彼自身進んで富を求めずとも、周圍から不知不識の裡に、富を齎らし易い。然も孔明の清廉右の如くである。孔明の如き清廉の人物は、廣く世界を見渡



しても、餘り類多くなからうと思はれるが、殊に生命より財寶を大切にする程、利慾心の強い支那人の間に在つて、孔明の清廉は、一層の光輝を發揚する筈と思ふ。

(大正十二年四月二十一日乃至六月二十日大阪懷德堂講演)

## 東洋史上より觀たる明治時代の發展

### 一

歲月流るゝが如く、明治天皇の御登遐後、早一年を経た。去る者は日に疎しといふが、千古の大英主たる明治天皇の御鴻徳のみは、深く我が國民の腦裡に印して、決して忘るゝことが出來ぬのみか、却つて時を経る儘に、愈、景仰の念を増すばかりである。私は茲に明治天皇の御一週年祭に際し、東洋史上より觀たる明治時代の發展を述べて、聊かその御鴻徳の一端を偲びたいと思ふ。

一體わが日本國は神武天皇御即位以來、二千五百餘年の長い歴史を有つて居るが、その割合に歴史の内容は豊富とはいへぬ。神功皇后の三韓御征服とか、豊太閤の朝鮮征伐とかいふ、大陸發展の場合が甚だ尠い。さらばとて平和の方面を觀ると、一層寂寞たるものがある。制度・文物・學術・宗教等あらゆる文化は、支那より傳はり、若くは支那を経て、我が國に傳はつたもので、その反對に日本固有の文化、若しく



は他國の文化でも日本を経て支那朝鮮の大陸に傳はつたといふ場合は、殆ど見當らぬ。要するに明治以前に於ける我が二千五百餘年の長き歴史を振り返つて見ても、戦争の場合といはず、平和の場合といはず、我が日本が原動力となつて支那や朝鮮の局面に大變化を來したといふ場合は、極めて稀有である。所が明治の御世となると、頗るその趣を異にして居る。明治の御世殊に日清戦役後の十七八年の間に、わが國は非常なる發展を遂げた。この間に東亞の方面に起つた大事件は、一として直接若くは間接に、我が日本國の發展の影響を被らぬものはない。是點より考察すると、明治以前の二千五百餘年の歴史より、明治の御世殊に最近十七八年間の歴史の方が、遙に内容豊富ともいへる。

明治年間に於ける我が國の發展は、多方面に涉つて居るが、東洋史の立場から觀ると、大要左の五項に概括し得ることゝ思ふ。

## 一 朝鮮の併合

朝鮮は過去に於て、我が國と随分深い關係があつた。殊に神功皇后の御世から、

欽明天皇の御世にかけて、三四百年間は、我が國の勢力の下に立つたこともあるが、併し大體上支那の保護國といふ有様であつた。朝鮮といへば、直に事大思想を連想する。事大とは『左傳』の大不字、小不事、大(哀公七年)や、『孟子』の以小事大者、畏天者也、畏天者保其國(梁惠王下)から出た文句であるが、朝鮮人は昔から、尠くとも高麗時代から、大國の支那に服事するを以て天則を奉ずるものと心得て居つたのである。所が明治二十七八年の日清戦役の結果、支那は始めて朝鮮から手を引くことゝなり、續いて日露戦役で、日清戦役後一時朝鮮に勢力を振ふた露國も手を引くかくて朝鮮は完全に我が國の保護の下に立つことゝなり、遂に明治四十三年の併合といふ運命に歸したのである。日本は随分古くから朝鮮と關係があつたといふ條、その勢力は寧ろ微々たるものであつた。神功皇后御征韓後と雖も、その勢力は廣さに於ても深さに於ても、勿論明治の御世のそれに比すべくもなかつた。要するに朝鮮の併合は、國史あつて以來の偉業で、東洋史の上からいふても、尤も注意すべき大事件の一と數へねばならぬ。



### 三 東亞の覇國

過去幾千年の間、支那は東亞の覇國であつた。東亞諸國の間に在つては、習慣上支那の君主のみが獨り皇帝と稱して、自餘の君主はこの稱號を遠慮した。彼等は皆一等下つた王といふ稱號に満足して、支那の皇帝から封冊を受くるを以て名譽として居つた。勿論我が日本のみはその例外であつた。愛國心強く、國權擁護の念厚き日本人は、常に支那に對して同等の位置を要求した。推古天皇の御世、初めて日本の朝廷から隋へ國書を差出した時にも、日出處天子、致書日沒處天子とか、東天皇敬白、西皇帝とか、對等の文句を用ひて居る。されど支那の方では、殆どすべての場合に於て、日本に對して同等の待遇を與へななんだ。支那と日本と長い通交の割合に、彼此往復した國際文書の多くなかつたのは、かゝる障礙があつた結果とも見るべきである。歐米諸國と交通が開けてから、第三者たる彼等も、矢張り支那と日本との待遇に就いて、多少區別を設けて居つた。

所が日清戦役を界として、日本の位置が高く、その反對に支那の位置が低くなつた。下、關條約によつて、二國間の條約は改正せられ、支那は日本に對して、歐米諸國同様の待遇を與へることゝなつた。即ち不對等條約を結ぶことゝなつた。第三者たる歐米諸國も亦、次第に日本を支那以上に待遇することゝなつた。過去幾千年間、東亞の覇國であつた支那は、茲にその位置を日本に讓ることゝなつたのである。これも東洋史上より觀て、稀有の大事變といはねばならぬ。

### 四 世界の一等國

日清戦役によつて、東亞の覇者となつた我が國は、日露戦役によつて、更に世界の一等國に列することゝなつた。過去に於てあらゆる世界の問題は、歐米列強のみによつて決定された。東亞問題に就いても、日本や支那は、殆ど何等の發言權を有することも出來ず、すべて英露諸國の意志の儘に決定されたのである。日清戦役によつて、我が國の位置の高まつたといふ條、これは東亞諸國に對してのこと、三國干涉の發頭人なる露國が、わが國の遼東還附後三年ならざるに、厚顔にも支那に迫つて旅順・大連を租借した時、我が國からは抗議すらなし得なかつたのである。明



治三十五年に結ばれた日英同盟によつて、我が國の位置の高さを加へたことは申す迄もない。世界の大国で、しかも久しく名譽の孤立を守つて居つた英國が、異人種異宗教の日本と同盟を結んだことは、随分當時の世間を驚かしたものである。これは勿論我國にそれだけの實力あつたからではあるが、率先してその實力を認めてくれた英國の好意は、十分感謝すべきことと思ふ。

日露戰役後は、英國以外の列強も、流石に日本の實力を度外視する譯にはいかぬ。東亞細亞に領土を有する大強國は、何れも日本と好意を通じ、各自の殖民地又は領土の安全を圖ることゝなつた。かくて日佛協約(四十年六月)日露協約(四十年七月)日米覺書(四十一年十一月)が、相前後して締結された。これは我が國を除外しては、東亞の平和の保障の出來ぬ證據で、現在及び將來列強の活動舞臺たるべき太平洋方面では、日本國の發言權が最も尊重されることゝなつた。従つて世界の國際上でも、一等國の待遇を受けることゝなつた。有色人種で、國際上白人種の大國と同一の待遇を受くることは、勿論過去の世界の歴史に於ても、稀有の事實である。

## 五 文化の輸出

我が國が支那と通交して以來、支那の文化を輸入するのみで、一度も日本から支那へ文化を輸出したことがない。所が日清戰役後は、この天荒を破つて、あらゆる文化が日本から支那へ輸出されることゝなつた。流石因循姑息の支那も、日清戰役の大打撃に眼を覺まし、變法自強の語が朝野を風靡し、すべての革新は日本を手本とすることゝなつた。制度・文物・學術・教育等、皆日本のそれを輸入する。縱令歐米の文明や文化でも、一度同文同種の日本を経由したものを採用するのが、歐米から直接輸入するより、危険少くて便益多しといふのが、支那人多數の意見であつた。ソコデ夥多の留學生をも送れば、幾多の日本教習をも迎へる。一時わが國へ來た支那留學生の數は萬を超え、彼地に傭聘された日本教習の數は、五百以上もあつた。漢字すら日本から逆輸入した方が歡迎される。團體代表、膨脹舞臺、社會組織機關、犧牲影響報告、困難目的運動等の文字は、支那の新聞や雜誌に普通に散見するが、此等の熟字は何れも日清戰役後に、日本から輸入されたものである。保守的な支



那人は、かゝる雅馴ならざる熟字を排斥せんと計畫したこともあるが、すべて無効であつた。支那人の中には更に進んで、株式とか手續とか組合とか取締とか黒幕などいふ、恐れ入つた熟字迄も使用する者がある。此等の所謂新名詞は、最初日本から歸つた留學生などが輸入したのであらうが、當世振る支那人は、頻に之を歓迎して、新知識顔をするのである。近頃出來た新字典などには、從來支那では曾て使用されたことのない、日本の漢字までも網羅して居る。

支那の御國自慢には必ず出て來る孔子、その孔子を尊崇することすら、日本の影響で、日本維新の鴻業は儒教に負ふ所が多い。故に日本は盛に孔子の學を講じて居る。日本の強大に仿はんには、必ず孔子の學を尊ばざるべからずといふのが、心ある支那人の意見であつた。ソコで明治三十九年に、從來中祀とて、二等祭祀の待遇を受けて居つた孔子の祭典を、急に大祀に昇格させ、天地宗廟と同等の待遇をすることゝなつた。

ズツト變つた方面では、日本から大和魂まで輸入して居る。日本が往古盛に支那の文明を輸入した時代でも、和魂漢才とて、國魂だけは決して支那の厄介になら

なかつたが、支那ではその國魂までも日本から輸入して居る。支那の先覺者の中には、日本の強大なるは大和魂の御蔭である。中國の衰弱不振は中國魂なきによる。中國今日の急務は中國魂を製造するに在ると絶叫した者もある。國魂といふ文字も、勿論日本から輸入した新名詞である。

## 六 亞細亞人の覺醒

我が國の發展が世界に及ぼした影響の尤も顯著なるものゝ一は、亞細亞人の覺醒を促したことである。一體この三百餘年間は、白人種の得意跋扈時代であつた。彼等は到る處に占領地を作り、殖民地を建て、全世界を擧げて、彼等の勢力の下に置き、白人種にあらざれば、殆ど人間にあらずといふ有様を呈した。亞細亞の如きも、印度・緬甸は英國に、西伯利亞・中央亞細亞は露國に、後印度の大部は佛國の手に落ち、餘す所の支那や波斯や暹羅等も、白人種の壓迫に苦んで居る。唯一の例外たる我が日本と雖ども、全くはその壓迫から離脱し得なかつたのである。

亞細亞人も白人の壓迫に對して、萬斛の不平を抱いて居るが、然し彼等は到底白



人には抵抗不可能と信じて、その自然の運命に服従いたし、白人は又劣等と信せる亞細亞の黄人種を支配するのは、その當然の權利の如く心得て居つた。かゝる事情の下に、僅少なる白人が、多數の黄人を容易に統治して行くことが出来たのである。所が日露戦争は從來のレコードを破つた。日露兩國は種々なる點に於て、奇妙なる對照を有して居る。従つてその戦役の結果は、種々なる方面に影響を及ぼして居るが、中に就いて、亞細亞の一小國が、その幾十倍もある白人の大強國——數ある白人の大強國の中でも尤も跋扈を極めた大強國——と戦ひ、見事之を打ち破つて、兎を脱がしめたといふ事實は、全亞細亞人に餘程深刻なる印象を與へた。黄人も努力如何によつては、随分白人の壓迫を脱することが出来る。否更に一步を進め、白人に對して痛快なる復讐をも成し遂げ得らるゝといふ、實例を目前に示されたのである。

日露戦役の數年前から、活動寫眞が次第に世間に持て囃されて來た。日露戦役はこの活動寫眞にとつて、好箇の映寫物となつた。日露戦役の當時から、爾後三四年間は、この戦役の活動寫眞が、亞細亞大陸到る處で空前の歡迎を受けた。印度人

緬甸人、暹羅人、安南人、支那人、南洋人等は、何れもこの活動寫眞——實際以上に露軍敗亡の有様を映寫してある——を見物して、數十年來の溜飲を下げた。活動寫眞によつて、不様な露軍の敗走を見ると、自然彼等の腦裡に、白人の威光が薄らいで行く。白人も不可敵でないことを知ると、之に對する反抗心が頭を擡げて來る。かくて汎亞細亞主義が、次第に東洋の天地に彌蔓して來た。

英人の管下に在る印度人の獨立思想も、この時から一層熱烈を加へ、英人も之を抑壓するに頗る困難を感じた。ソコデ日英同盟によつて、日本の勃興を助けた英國の政策は、果して英人の利益であつたであらうかと、同盟の價値に就いて疑惑を挾む者も出來た程である。佛領後印度にも、同様不安の状態が起つた。佛屬西がこの地方を占領して以來、日露戦役直後程、安南人の人氣の荒立つたことはないとい傳へられて居る。

この亞細亞人の亞細亞といふ思想の勃興には、亞細亞に領土を持つて居る白人一同に閉口した。彼等は日本人がやがて黄人種の先達となり、黄人種の大團結を作つて、白人驅逐を試みるであらう。多數の黄人に少數の白人では、その結果恐



るべきものがある。過去に於て白人が黄人に壓迫征服された場合が多い。かゝる時代が或は再出するかも知れぬとて、今迄見縊り過ぎた反動で、實際以上に黄人に對して警戒を加へることとなつた。

亞細亞人の中でも、支那人が一番覺醒して來たかの如く思はれた。日清戰役後支那人の間に、變法自強といふ新機運が開けて、事毎に日本を模範とすることゝなつたといふ條、彼等は未だ十分に日本の實力を理會せなんだ。日本は東洋でこそ強國であるが、世界の舞臺に出ては、逆も歐米列強と肩を並べられぬもの、まして露國に對しては、足許へも寄られぬものと信じて居つた。所が日露戰役で、日本が彼等支那人の間に、世界第一の強國と確信されて居つた、露國を打ち倒したのであるから、彼等は今更ながら、日本の國力の強大なるに驚嘆し、愈、變法自強の急務なることを自覺した。日露戰役後に於ける支那の革新は、随分目覺しいものであつた。

日本は立憲國で勝ち、露國は專制國で負けた。中國も日本の如く立憲制を採らねばならぬとて、やがて立憲の準備にかゝる。日本は國民一致して勝ち、露國は國民雜多にして一致を缺きし故敗れた。中國も滿漢の區別を撤廢せなければならぬ

とて、やがて均平滿漢の上諭——滿漢の區別を撤廢せんとする試は、日露戰役前から幾分行はれて居つたが——が發布された。其他學校教育の敷及とか、新式陸軍の増加とか、すべて此等の革新的計畫は頗る大袈裟で、然も直間接に多く日本人の補助を受けたのであるから、尠からず歐米人の耳目を聳かさせた。彼等は亞細亞人の覺醒を重大視する餘り、盛に黃禍論を唱へ出した。

黃禍論は勿論日露戰役以前から、已に白人間に唱道されて居つた。黃禍といふ文字も、日清戰役の頃から使用されて居つた。日清戰役の終期、三國干涉の起らんとする前後に、獨逸のカイゼルから露西亞のツァールに贈つた一幅の寓意畫——東洋の佛教國の前進を、耶蘇教國が一致して防禦せんとする——の標題が黃禍であつた。この時以來黃禍といふ文字は、盛に使用されることゝなつたが、實際の處當時日本は三國干涉の爲に大頓挫を受けて居る。支那は日清戰役の敗亡に續いて、列強から要害の地を租借せられ、或は舉國瓜分の厄に罹らんとする形勢であつた。黃禍といふ文字こそ新聞雜誌又は書物に疊見すれ、當時眞面目に黃禍の實現を信じた人は、甚だ多くなかつた様である。黃禍論は畢竟一種の杞憂に過ぎずと



見做されて居つた。所が明治三十七八年の日露戰役後から、黃禍論は始めて世界的問題となり、歐米人も眞面目にこの論に耳を傾けることゝなつた。

等しく黃禍論といふ條、或は日本を問題の中心とする者もある。或は支那を黃禍の中心とするものもある。或は經濟の方面より觀察を下すものもある。或は軍事の方面より觀察するものもある。解釋の仕方は一様ではないが、それは兎に角、亞細亞人の覺醒と共に、黃禍論の重大視さるゝに至つたのは、争ふ可らざる事實である。而して此等の事實は、東洋史は勿論、世界史の上より觀ても、稀有の大事事件といはねばならぬ。

以上數へ來た五項のうち、どの一項をとつても、國史上空前の大事業で、又東洋史上、否、或者は世界史上より觀ても、稀有の大事事件である。然るに此等の大事業大事事件が、明治一代、殊に最後の二十年の間に、成し遂げられたのであるから、世界を舉げて、明治時代に於ける日本の發展を神業とし、奇蹟とするのも、無理ならぬ次第である。

## 七

我が日本人は顯著なる二の國民性を有つて居る。一は皇室に對する忠義心の厚いこと、即ち忠君、今一は國權擁護若くは擴張の念の強いこと、即ち愛國である。忠君・愛國の二精神は、わが建國以來の歴史を一貫して居る。愛國の方は對外硬の精神となつて表はれて居る場合が多い。名實共に獨立の體面を毀損せぬことが、立國第一の必要條件となつて居る。先づ支那に對しては既に申述べた如く、隋唐と交通開始の當時から、對外硬といふ主義を發揮して居る。我が國と外國との間に往復すべき、國際文書に關する慣例を書いたものに、異國牒狀事といふ文書がある。前田侯爵の所藏で、史學會から發行された『征戰偉蹟』の中に收められ、和田英松氏がこの文書に解説を附けて居る。これは朝廷の御威光の衰へ切つた、足利時代の初期に出來たものであるさうだが、これにも支那から、天子又は皇帝等同等の稱號を用ひてある文書を送れば、受取るけれど、國王など書いた文書は、決して受附けぬ。受取つても返事を出さぬが慣例となつて居る。世界を統一せん勢あつた



蒙古に對してすら、我が國では對等の位置を固守して、一步も譲らない。弘安の役は之が爲に起つたともいへる。

乃木大將と共に有名になつた『中朝事實』といふ書物があるが、之は山鹿素行先生の著で、中朝とは我が日本を指したものである。又水戸藩で編纂した『大日本史』には、支那を諸蕃傳に列してある。古來支那以外の東亞の國で、中國と稱したものはない。支那を諸蕃扱にしたものは、尙更見當らぬ。併し日本人の立場からいへば、支那が中國と稱する以上、日本も中朝と稱すべきである。支那の歴史に日本を東夷傳に入る、以上、日本の歴史に支那を諸蕃傳に列して、不思議はないのである。一寸とした書物の標題や體裁にまで、對外硬の主義を發揮して居る。

朝鮮に對しては曩に述べたるが如く、神功皇后の御雄圖も、欽明天皇の御世前後に衰へて、朝鮮に於ける我が宗主権は一旦失はれたけれども、以前の關係から、我が國では決して朝鮮と同等の交際はいたさぬ。例の異國牒狀事に據ると、朝鮮と日本との關係が絶えた後でも、日本の君主は天皇、朝鮮の君主は王と稱すべき慣例で、この慣例を無視した文書は、我が國で受取らぬことゝなつて居る。この考が始終

日本人の腦裡に残つて居る。徳川時代に國學が盛になつてから、日本の古代の歴史が研究されると共に、この考が一層強きを加へる。明治維新後、朝野の大問題となつた征韓論も、こゝに間接の關係を有することゝ思ふ。

歐米諸國に對しても、徳川幕府の訂結した不對等條約は、その當時から國論を沸騰せしめた。明治の御世に入つても、この不對等なる條約を改めて、國權を擁護することは、舉國一致して熱望した所で、維新以後の外務卿、若くは外務大臣にとつて、條約改正問題は、常にその暗劍殺となつて居つた。

所が明治の發展によつて、此等新舊の懸案は、皆立派に解決されて居る。日清戰役を界として、日本と支那との位置は轉換し、支那はわが國の下風に甘することゝなり、日露戰役後は、我が國は世界の一等國に列し、幕末以來引繼いて來た、不對等條約も、この二大戰役の間に於て、大體我が國人の希望の如く改正せられ、朝鮮は明治四十三年八月に、わが國に併合された。建國以來我々の祖先が絶えず心に掛けて來た、國權の擁護又は擴張は、こゝに完全に實現された譯で、祖先の神靈も定めて満足を表して居るに相違ない。



尙又我々が國史を讀んで、神功皇后の御世や、豊太閤の時代に、我が國力の大陸に發展したことを想ふと、實に愉快に堪へぬが、此等の發展に幾十倍した明治の御世の大發展を、我々の子孫が、遙か後世から如何に愉快に眺めるであらう乎。明治の發展は、實に現代の我々のみに幸した許りでなく、我々の祖先もその慶に頼り、我々の子孫もその徳に浴する譯である。是の如く考へると、我々明治時代に遭逢した者は、實に開闢以來の果報者といはねばならぬ。

## 八

明治時代の發展に遭逢すべき幸運を持つた我々は、同時にこの折角の發展を挫折せしめざるべき、否一層之を助長せしむべき大責任を有することは申す迄もない。然もこの責任を果すことの容易でないことも亦自覺せねばならぬ。明治天皇御崩御後間もなく、英國のタイムスは、その紙上に、日本の新時代の困難といふ論文を掲載して、主として將來我が國民の精神問題に關して、容易ならざる困難の横はれることを指摘した。實にこの精神問題ばかりでなく、我が國民の前途には、種

々の困難の存することを知らねばならぬ。米國の前大統領ルーズヴェルト氏は、嘗て次の如きことをいふた。

地中海は曾て列國競争の舞臺であつたが、新大陸發見と共にその時代は過ぎ去つた。之に代つた大西洋時代は、今日已にその絶頂に達し、やがて衰微すべき運命を持つて居る。次に來るのは太平洋時代で、今や列國の競争はこの新舞臺に移りつゝある。この競争は前二者に比して、遙に激烈であらう。

太平洋の近く世界の競争場となるべく、太平洋問題が二十世紀の大問題たることは、識者の多く一致する所である。太平洋裡に國して居る日本人は、大發憤をせなければならぬ。明治天皇の御製に、

四方の海皆同胞と思ふ世に、など風波の立騒ぐらん。

とある如く、我々は平和主義を尊重し、四海同胞主義を固守するとしても、何時風波が起らぬとも限らぬ。一旦風波が起れば、必ずその中心に當るべき太平洋裡に國して居る我々日本人は、不斷の用意だけはして置かねばならぬ。

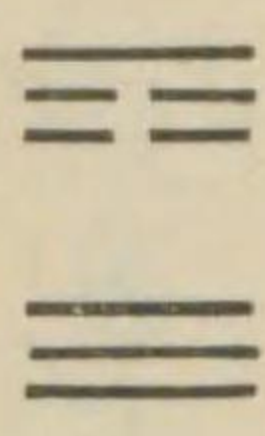
吾が輩は大正の年號に就いて、一個の解釋を有して居る。今回もこの大正の年



號の解釋を其儘、我が國民將來の方針に應用したいと思ふ。大正の字面は『易』の大畜の卦から出て居る。大畜の卦に

大畜剛健篤實……日新其德……能止健、大正也。

とある。大畜の卦は元來乾下艮上大畜とも、山天大畜ともいひ、天を代表する乾と、山を代表する艮との二單卦を重ねたものである。乾の卦は陽爻(一)のみより成立して居る故に、至健至剛である。乾は又健と通ず。乾の象は天である。天は四時の別なく絶えず運行して居る。故に天行健といふ。乾は要するに一日も油斷なく進取する義がある。日新其德といふのはこの事である。艮の卦は弱柔な陰爻(二)の上を、剛健なる陽爻が抑へ付けて居る。従つて内に抑へて外に出さぬから、艮に止トヤムルの訓がある。艮の象は山である。山は萬物を貯藏する處である。艮は要するに物を保存する義を有つて居る。乾と艮とを合せた大畜の卦には、他の善き所を採り、我が善き所を守りて、實力を蓄積すべき意味が含まれて居る。是故に大正とは、一面力めて世界の新知識新文化を求め、これ日も足らざるが如く努力しつゝ、一面では我が國古來の善美な



艮(山)乾(天)  
大畜

る國體、國粹を保存し、此の如くして大に國力の充實鞏固を圖る意味である。

我が國粹を保存しつゝ、外國の文化を採用することは、わが國過去千幾百年の長い歴史を通じて、絶えず實行されて居つて、決して新しい主義でない。ソコデ和魂漢才といふ言葉がある。菅公の頃から始まつた言葉であるが、この主義は菅公以前から夙に實行され、明治の御世となつては、同じ和魂洋才主義が實行された。

國家も生物と同じく、適者が生存するのである。我が國が建國以來連綿として今日に至るまで、常に適者の位置に立つことが出来たのは、和魂漢才若くは和魂洋才主義の御蔭である。大正の新時代も、やはりこの主義を遵奉するのが安全である。我が國の過去の歴史を觀れば、將來採るべき方針も、自然に理會されるのである。歴史を鑑といふのは是處のことで、温故知新は此の如くして活用すべきである。要するに我が國民は、決して小成に安ずるなく、不斷の努力によつて、明治の發展を一層向上せしめねばならぬ。これが尤も明治天皇の御心にも協ひ、又今上陛下に對して、尤も忠義なる所以であらうと恐察するのである。

(大正二年八月『太陽』第十九卷第十一號所載)



## 支那學研究者の任務

## 一

米國のルーズヴェルト Roosevelt を始め、米國の政治家といふ政治家は、近時太平洋方面に不斷の注意を拂ふて居る。太平洋方面尙ほ適切にいへば支那方面が、近く世界の競争場となることは、單に米國の政治家の主張する許りでなく、世界の識者の悉く承認する所で、斷じて間違なからうと思はれる。果して然らば、東亞の主人公を以て自任する我が國民は、その存在の上からいふても、その發展の上からいふても、尤も支那方面の研究に意を用ひねばならぬ。

勿論近時わが朝野各方面に於て、支那研究といふことが高唱されて居るが、その割合に、支那研究に従事する人が多くない。すべて何事でも、事を始めるには、先づその事を知らねばならぬ。事を知るには、先づその事を調べねばならぬ。調べる、知る、行ふといふのが、當然の順序である。所が日本人の缺點として、知るとか、調べ

るといふ順序を省略して、直に事を始めようとするから、失敗が多い。成程、研究や調査の手續は随分迂遠に、且つ煩雜なものではあるが、この迂遠煩雜な手續を経ねば、正確な事實が分からぬ。無用の用といふことがある。宏大な建築には、目に立たぬ基礎に、莫大の費用と時日とを要せねばならぬ。目前に發生した事件のみに齷齪しては、到底大事の出来る筈がない。我國の政治家や商業家の中には、支那に注意を拂つて居る人が尠くない。然し何れも支那を研究しようと思ふ。また研究そのもの、價值を餘り重要視せぬ様である。

之に比較すると、西洋人の方が、遙に眞面目に支那を研究して居ると思ふ。例へば獨逸のリヒトホーフエン Richthofen の如きそれである。彼は西曆一八六八年(明治元年)から、一八七二年(明治五年)にかけて、南滿洲を始め、支那本部の大部分の地質を踏査した。彼の踏査の結果は、『支那』と題する不朽の著書となつて、世に發表された。『支那』の第一卷は一八七七年(明治十年)に、その第二卷は一八八二年(明治十五年)に、第四卷は一八八三年に公にされた。この著書の完成せぬ間に、一九〇五年(明治三十八年)に、リヒトホーフエンは死んで、第五卷と第三卷とは、彼の死後一九一



一年(明治四十四年)から一九一二年(大正元年)にかけて、始めて發行されて居る。實地の踏査から、その研究の完成發表されるまで、實に四十餘年を経、第一卷の發行後、三十五年を費して、名著『支那』が完成した譯である。その内容の如何に價值あるかは、單にこの點より觀ても、容易に推測することが出来ると思ふ。

## 一一

歐米人で支那に來て居る者は、外交官でも、稅官吏でも、將た宣教師でも、その本職の暇に、種々の不便を忍びながら、眞面目に支那を研究することを怠らぬ。例へば一昨々年の十一月に、袁世凱の顧問に招聘せられ、支那渡航の途中、布哇で病死した、米國のロックヒル Rockhill の如きも、その一人である。彼は一八八四年(明治十七年)に、始めて在北京の米國公使館に赴任いたし、爾後或は書記官として、或は全權公使として、前後を通じて十五年間、支那に駐割した。かねて梵語とチベット語の素養ある彼は、最初支那在職中、主としてチベット佛教の研究に身を委ねた。かくて彼は公務の傍ら、一八八八年(明治二十一年)乃至一八八九年(明治二十二年)と、一八九一

年(明治二十四年)乃至一八九二年(明治二十五年)の二度、蒙古チベット方面を探險して、英國の地理學會から、賞牌を授與されて居る。一九〇〇年(明治三十三年)に、彼は英國のハクルアイト會から、有名な『ルブルクの紀行』——ルブルク Rubruck は西曆十三世紀の半頃に、蒙古へ旅行した耶蘇教の僧侶である——に精細な註釋を加へて出版して居るが、こは彼の曩の探險と、尠からざる因縁の存することゝ想像される。彼がこの紀行を出版する際に、幾多の支那の史籍を涉獵したことが、やがて彼をして支那學研究に、一層の興味を起さしめた。此の如くして彼が、遂に米國で第一流の支那學者となつた。その晩年に、彼は宋代の『諸蕃志』や、元代の『島夷志略』等を研究して、中世期に於ける支那と諸外國との海上交通の狀況に、多大の光明を寄與して居る。

今より十五六年前に死んだ、英國のフィリップス Phillips の如きも亦、かゝる種類の支那研究者の一人に擧げて差支あるまい。彼は一八五七年(安政四年)に香港に來て、こゝで始めて支那語を稽古して、通譯となつた。後には副領事又は領事として、南支那の各地に駐在したが、彼は到る處で、土地に相應な題目を捉へて研究をし



た。例へば臺灣では、國姓爺(鄭成功)とか、臺灣占領時代の蘭人とかを研究して居る。併し彼の尤も精力を注いだのは、福建地方の貿易港の沿革と、明代に於ける支那と南洋との交通——明の馬歡の『瀛涯勝覽』を中心とした——との研究であつた。此等の問題に關する幾多の論文は、『英國亞細亞學會雜誌』や『通報』や、その他の雜誌に掲載されて居るが、一々紹介することが出来ぬ。

十數年前から、米國のコロンビア大學に招聘せられ、今も同大學支那部の主任として、世界に知られた支那學者に、獨逸のヒルトHilpertがある。彼は一八七〇年(明治三年)に始めて支那税關に聘用され、爾來約二十五年の間、主として南支那で奉職した。この間に彼は熱心に支那學を研究した。彼の出世作は、一八八五年(明治十八年)に公にした、『大秦國全錄』である。彼はこの著書によつて、一躍に第一流の支那學者に列することゝなつた。その以後に於けるヒルト氏の業績は、多く我が國人に知られて居る故、特に紹介するに及ばぬと思ふ。

宗教家では英國のワイリWylieを擧げることが出来る。彼は一八四七年(弘化四年)に支那に來り、一八七七年(明治十年)に英國に歸るまで約三十年の間、キリスト教

傳道の傍ら、熱心に漢文を勉強した。十九世紀に出た數ある支那學者の中でも、支那文獻に關する該博なる智識に於て、彼は第一番に推さるべき人である。彼は支那學研究に必要であるといふので、更に蒙古語や滿洲語や梵語をも勉強した。彼の黽勉と精進とは眞に驚嘆に價する。かくて過度の勉強の爲に、遂に失明はしたが、彼の『漢籍解題』及び『支那探究雜俎』は、今日猶ほ學界に珍重されて居る。彼が明末の利瑪竇の『幾何原本』を完成すべく、漢文で公にした『續幾何原本』は、支那人の間に大なる寄與をなした。

ワイリと同時代で、支那學者としては、先輩の位置に在る英國のレッジ Legge も亦、宗教家であつた。彼は宗教家として一八四三年(天保十四年)に支那に來て、約三十年間滯在中に、主として支那の經學を研究した。その結果として世に公にされたのが、彼の不朽の名著として知らるゝ英譯『支那經典』である。彼はその晩年にオックスフォード大學の支那學講座を擔任すべき最初の教授に就いた。丁度ケムブリッジ大學の支那學講座を最初に擔任した教授が、外交官出身の英人——駐劄支那公使——で支那語學者として名聲の高いウエード Wade であるのと對比して、



頗る面白い。

一九〇一年(明治三十四年)に死んだ露國のブレットシユナイデル Bretschneider や、一九〇八年(明治四十一年)に死んだ英國のブッセル Bussell は、何れも在北京の露國公使館や英國公使館の醫員として在職中に、支那學を研究して尠からざる効果を奏して居る。前者は一八六六年(慶應二年)乃至一八八三年(明治十六年)の間、支那に滞在したが、彼の『支那植物學』や、『中世期(主として蒙古時代)の探究』等は、今猶ほ學界に重用されて居る。後者は一八六八年(明治元年)以來、三十餘年間支那に滞在し、主として支那美術殊に陶磁器の研究に手を着け、『支那藝術』と題する著書の外、幾多の著書や論文を發表した。彼は又その滞支中に、銅器貨幣金石拓本骨董類を無數に蒐集して、歐洲に齎らし歸つた。

かゝる例識を挙げば、殆ど際限がない。之に對比すると、わが日本人で、支那の使館や税關其他に奉職せる人々は、種々の便宜を有するに拘らず、何等注意すべき研究や業績を發表して居らぬのは、甚だ遺憾の至りである。併し翻つて考へると、何事にも研究心の缺乏して居るのは、日本人の通弊であつて、必しも支那在留の日本

人のみを、答めることは出来ぬと思ふ。支那の研究が爾く必要であり、而して我が國民が、一般にその研究を忽にする場合には、自然一部の支那學研究者の任務は、一層の重きを加へる譯である。日本——尤も支那を研究せなければならぬ日本、然も實際は尤も支那研究を忽にして居る日本——に於ける支那學研究者は、二重の努力を要する譯である。

### 三

支那を研究するには、勿論實地に就いて、支那の現状を調査するのも必要であるが、更に一層溯つて、根本的に支那を研究するには、是非共支那の書籍を參考せなければならぬ。

所が支那の書籍は、随分亂雜なもので、その分類が曖昧であり、その記述が正確を缺き、殊に尤も必要な書籍でも——例へば十三經の如き又は二十四史の如き——その本文批判の未だ十分に出来て居らぬものが甚だ多い。要するに支那の書籍は、大體から見渡して、未整理の状態にある。之を利用する前に、先づ科學的方法で



十分に整理を加へ、かく整理した材料を、科學的方法によつて、研究せなければならぬと思ふ。

若し吾が輩の見る所に大なる誤がないならば、我國に於ける支那學研究には、この科學的方法が、また十分に利用されて居らぬ様である。甚しきはこの科學的方法を無視して居る様に、疑はれる點もある。科學的方法は西洋の學問のみに應用すべきものでない。日本や支那の學問研究も亦、勿論この方法に據らねばならぬ。支那の鑛山を採掘するには、矢張り最新の科學的方法によるのが、一番收益が多である。支那に敷設する鐵道でも、矢張り科學的方法に本づくのが、一番奏功が確實である。支那學はその對象が支那であつても、又は支那人の書いた書籍であつても、その研究は、必ず科學的でなければならぬ。

印度學やアラビア學も、歐洲の學者が研究の手を着けてから、始めて學問として發達もし、又廣く世界に紹介されることになつた。印度にもアラビアにも、學者は中々多い。單に印度の文獻を解釋し、又は回教の古典を解釋するのみならば、彼等は歐洲學者に優るとも劣る筈がない。併し彼等の力で、その國の學問を、今日の如

く發達せしむることが出來なかつたのは、その研究方法に缺陷があつたからである。即ち本文批判とか、比較研究とかいふ方法が、十分でないからである。支那にも尊敬すべき學者が尠くない。彼等も種々有益な研究をして居る。されど忌憚なく申せば、その研究方法には、まだ、改良すべき餘地が頗る多いと思ふ。彼等の著書や研究は、參考すべく、利用すべくして、その儘に繼承盲從すべきものでない。

西曆一九〇九年(明治四十二年)に死んだ、和蘭のライデン大學の教授に、有名なド・フリーユ De Goeje があつた。彼は十九世期の後半に出た、世界第一のアラビック學者とさへ推された人である。さる學者は、このド・フリーユの功績を稱して、次の如く述べて居る。

彼は驚くべき努力熱心を以て、アラビアに關する、あらゆる材料を蒐集し、且つこの無數の材料を、一々科學的方法によつて整理した。彼等は勿論アラビアの學者を利用し、アラビアの記録を利用したが、彼は決してその奴隸とならなかつた。豊富なる材料と、嚴肅なる批判と、この二者を見事に併用した。こゝ



が自餘の學者に比して、特に彼の卓越した點である。  
我々も支那學を研究するに當つては、このド・フリーユに學ばねばならぬと思ふ。

## 四

西洋の支那學者は、四五の人を除けば、その支那文獻に對する讀書力は、左程恐るゝに足らぬ。併し彼等の研究方法は、概して科學的で堅實である。吾が輩はこの點に於て、絶えず彼等の著書や論文によつて、尠からざる裨益と刺戟とを受けて居る。近頃心附いた一二の例證を左に示さう。

『史記』や『漢書』を始め、支那歷代の正史には、大抵西域傳とか外國傳とかがあつて、そこに支那以西の外國を記載し、且つ支那當時の國都——例へば長安とか洛陽とか——なり、又はその以外の重要な場處——例へば西域都護府所在地の如き——より、外國の國都に至るべき距離を明示してある。その記載されてある外國が、今の何地に當るかを考定するに當つて、この里數は、屈竟の材料となるべきものであるから、西域のことを研究する者は、誰人もこの里數を利用する。所がこの里

數を利用するには、當然の順序として、先づその一里の實長を研究せなければならぬ。單位となる一里の實際の距離が不明では、折角里數の記載されてあつても、之を有効に利用することが出来る筈がない。支那の學者達は、正史の西域傳や外國傳を解釋するに當つて、その一里の實長の研究を忽にするから、彼等の議論は、兎角粗空に陥るのである。

西洋の學者は、流石に行届いたもので、已に四十年前より、獨逸のリヒトホーフエンでも、英國のユール Yule でも、支那の古記録の里數を利用する時には、その一里の實長から研究して居る。その結果の當否は、兎に角、手續には落度がない。漢時代の一里の實長なども、中央亞細亞や新疆方面の探檢測量の進捗するに従ひ、愈々精密に研究されて來た。曩に佛蘭西のグレナール Grenard は、漢時代の一里を約四百二十米突と換算したが、最近では獨逸のヘルマン Hermann は、之を約四百米突と換算して居る。この約四百米とは、漢代の西域諸國の中で、今日の位置の略確定せるもの若干を選び、その相互間の現在の距離と、漢代の里數とを對照して得た、平均距離である。



例へば漢代の車師國の交河城は、今の新疆の雅兒湖 Yarkhoto に當り、焉耆國の員渠城は、今の喀喇沙爾 Karashar の西南の四十里城附近に當る。車師から焉耆までの距離は、『漢書』に據ると八百三十五里で、雅兒湖より四十里城までの現時の距離は、約三百三十五キロ米突である。この場合漢代の一里は、今の約四百零一米突に相當する。焉耆の西南隣は尉犁國で、略今の庫爾勒 Kurla —— 或は之を庫爾勒の北の哈勒噶阿瑞 Kalgaman に擬する人もあるが —— に當る。四十里城より庫爾勒までの距離は、約四十キロ米突で、『漢書』には焉耆尉犁間の距離を、百里と記してあるから、この場合にも漢代の一里は、正しく四百米突に相當する譯である。また『漢書』に據ると、この尉犁國より、西の方西域都護府に至る距離は、三百里である。西域都護府は當時烏壘城に在つて、今の策特爾 Tchadir に當る。策特爾と庫爾勒の現在の距離は、約百二十キロ米突で、即ち漢代の一里はこの場合にも、約四百米突に當らねばならぬ。更に又『漢書』によつて、莎車皮山于闐三國の關係を見ると、次表の如き結果を得ることになる。

彼此の距離

國名	現今の位置	『漢書』記載	現在實測	漢里ノ實長
莎車	葉爾羌	Yarkand	155キロ米突	408米突
皮山	固瑪	Guma	380漢里	400米突
于闐	ヨトカン	Yotkan		

即ち漢代の一里は、約四百米突に當ることは、略疑ない所で、その十里は約二英里半、我が三十七町に相當する筈である。吾が輩はこの一里の實長を、古代の經書——三百歩を一里とする——に照らしても、又之を現今の實際に照らしても、頗る妥當の様と思ふ。

五

支那の書物には五世の祖とか、七世の孫とかいふ記事がよく出て來る。父子相繼爲世というて、父子の繼承を一世とするので、西洋のゼネレーションに當る。若しこの一世の平均年數が確知されると、年代考定上、種々の便宜が多い。東漢の許



慎の『説文解字』には、三十年爲一世とある。然しこれは東漢時代、否寧ろそれより遠き以前に、世といふ文字の出来た時代の解釋で、唐・宋・元・明の如き、近き時代に於ける一世も亦、三十年と解すべきや否やは、大なる疑問といはねばならぬ。支那の學者は、この一世の年數に就いて、格別注意を拂うて居らぬ。

獨逸のチュビンゲン大學のリユメリン Rümelin は、曾てゼネレーションの年數に關する一論文を發表して、その中に獨逸人の一世は約三十六年、英國人の一世は約三十五年、佛國人の一世は約三十四年半に當るが、支那人の如き早婚の行はるゝ所では、一世の年數は減少して、佛國人のそれよりも、可なり短縮すべき筈であると主張して居る。獨逸のヒルトは、この論文の主張を基礎とし、主として『宋史』の宗室世系表を材料として、支那人の一世は三十一年、又は三十年三分の二位と推定するのが至當であると論斷して居る。支那人の一世を約三十一年とすると、三十年爲一世といふ古き傳説とも一致して、即ち一世の年數は後代に至るも大差がないこととなり、且つリユメリンの主張とも、略一致する譯である。

勿論ヒルトの研究の材料は、隨分不十分であるが、彼の論斷は略正確を得て居る

様に思はれる。吾が輩も近頃少しくこの問題に心を寄せ、機會ある毎に、支那の記録によつて、支那人の一世の年數を調査して見たが、その結果は大體に於て、ヒルトの論斷の正確なることを裏書する様である。試に二三の例證を挙げると、東漢の光武帝は西漢の景帝の六世の孫で、この間の一世の年數は、三十一年二分の一に當つて居る。

人 名	在 世 年 代	中 間 數	懸隔年數	世 數	一世平均年數
(I) 西漢景帝	西紀前187—西紀前141	西紀前 163	和 189	6	$\frac{189}{6} = 31 \frac{1}{2}$
東漢光武帝	西紀前 6—西紀後 57	西紀後 26			

また唐の高祖李淵は、西涼の李暹の七世の孫に當ると傳へらるゝが、之に據ると一世の年數は、三十一年弱である。

人 名	在 世 年 代	中 間 數	懸隔年數	世 數	一世平均年數
(II) 西涼李暹	西紀後 351—417	384	差 216	7	$\frac{216}{7} = 30 \frac{6}{7}$
唐高祖	西紀後 565—635	600			



時代が降つて、宋時代となると、既にヒルトも利用して居るが、元の趙孟頫(有名な子昂)は、宋の太祖の十一世の孫に當つて、この間の一世の年数は、次表の如くである。

人	名	在 世 年 代	中 間 數	懸隔年數	世數	一世平均年數
(Ⅲ)	北宋太祖	西紀後 927—976	951	差 337	11	$\frac{337}{11} = 30\frac{7}{11}$
	元趙孟頫	西紀後 1254—1322				

孔子の後裔は、今も山東の曲阜に儼存して居る。孔氏の系譜は『闕里文獻考』その他に委細に記載されてあるが、中には多少曖昧疑惑の點がないでもない。併し孔氏中興の祖と仰がれる孔仁玉以後の系譜は、随分信憑するに足るらしい。孔仁玉の二十四世の孫が、清代の孔毓圻である。系譜を信用するならば、この間の一世は、三十一年半に相當せなければならぬ。

人	名	在 世 年 代	中 間 數	懸隔年數	世數	一世平均年數
(Ⅲ)	孔仁玉	西紀後 912—956	955	差 756	24	$\frac{756}{24} = 31\frac{1}{2}$
	孔毓圻	西紀後 1657—1723				

學問の生命は、正確と堅實とに在る。研究に當つては、一の粗略、一の曖昧を許さぬ。粗略や曖昧は、學問進歩の大敵である。從來支那學の研究は、同一の状態に停滞し、若くは同一の經路を彷徨しつゝ、あつて、餘り進歩せぬ様に感ぜらるゝのは、種々の原因もあらうが、その研究者の方法や手續に、未だ十分ならざる點の存することも、その重なる原因の一と認めねばならぬ。

吾が輩は決して、西洋の學者を極端に謳歌するものでない。彼等にも幾多の缺點短處の存することは、絶えず彼等の著書を利用する、吾が輩が尤もよく承知して居る。併し概して彼等の研究方法は、支那の學者のそれよりも合理で、我が國の支那學研究者にとつても、確に他山の石とするに足ると思ふ。學問には東西の懸隔がない。科學的研究方法は、もと西洋から起つたにしても、勿論東洋の學問にも應用出来るし、又應用せなければならぬ。兎に角、科學的方法といふことが、吾が國の支那學研究者にとつて、尤も注意せなければならぬ點と思ふ。

### 六



同じく科學的方法と申す中にも、分析的と綜合的との二方法がある。從來知られなかつた、若くは誤られて居つた、一の史料の批判をしたり、又は一の史實を穿鑿することは前者で、その批判され、穿鑿された史料や史實を統一綜合して、更に大なる概括的結論を組み立てるのが後者である。この二方法は、縦合その着手する順序に、先後の相違があつても、畢竟相俟ち相依るべきものである。個々の史實の穿鑿も、更に大なる結論に利用されてこそ、始めてその價值を増し、また概括も正確な史實を基礎としてこそ、始めてその權威が生ずるのである。

所が我國に於ける、今日の支那學研究の有様を通覽すると、分析的方法是幾分行はれて居るが、綜合的方法是甚だ振はない様に思ふ。例へば支那史や東洋史の方面を見渡しても、名ある學者は、或は西域史を専門にするとか、或は清朝史を専門にするとか、一時期又は一局部、更に甚しきものになると、單なる一事件を研究の對象にいたして居る。何分東洋史などは、その範圍も廣く、その開拓も新しいから、自然部分的の研究に齷齪するのも、已を得ざる次第であるが、先輩がかゝる研究に没頭するからとて、後進の人が皆が皆まで、その先蹤を追ふ必要があるまい。一時期や

一局部の研究に従事して居る人達も、決してそれで満足して居る譯であるまいが、未開の學問に手を着けることゝて、一の史料にも批判を要し、一の史實にも穿鑿を要するといふ有様で、逆もその専門以外の方面を顧みる暇がないのである。決して概括や綜合を無物視して居る譯でないと思ふ。故に吾が輩は今後支那學を研究せんとする人達が、先輩の蹤を追うて、一時期一局部乃至一事件の研究に身を委ぬるのも、勿論歡迎するが、同時に綜合的方面にも力を盡すことを、一層希望する次第である。他人の研究した、幾多獨立した事實をよく咀嚼し、且つ綜合して、一の大なる斷案を構成することは、決して容易の業でない。微細な事實の研究のみを學問の様に考へるのは間違である。綜合や概括も亦立派な學問である。この綜合的方法の振起することは、支那學界の爲にも祝福すべきことであるが、また支那學の門戸を開き、一般公衆との近接を圖る點からいふても、可なり必要のことと思ふ。

我が國の支那學者の中には、その學殖歐米の學者と伍して、毫も遜色ない程の人達も少くない様である。然しそれは一部の専門家に限ること、その以外的一般公衆の支那に關する知識は、隨分貧弱と申さねばならぬ。政治家や教育家の支那



に關する知識も、頗る淺薄の様に見受けられる。何れの方面でも、専門家と一般公衆との知識の懸隔の大なることは、我が國の通弊であるが、支那學に於ても亦、同様の憾を禁ずることが出來ぬ。之には種々の原因もあらうが、専門家と公衆と絶縁して、連絡が缺けて居ることも、確にその主要なる原因の一に相違ない。

専門家は微細な事實の研究に没頭して居る。その研究の結果は、餘りに専門的で、一般公衆は之を咀嚼することも、理會することも、勿論利用することも出來ぬ。故に専門家の研究が進めば進む程、一般公衆と愈、没交渉となる傾向がある。この缺陷を補充する點から觀ても、曩に述べた各専門家の研究の結果を、綜合概括することが、必要となつて來る。各専門家の研究の結果を、十分咀嚼することの出來る人が、個々獨立して居る此等の研究を連絡統一せしめ、公衆の理會し得るやうにいたし、彼等をして支那學の門戸に近づき易からしめたならば、幾分この弊害を除去することが出來る筈と思ふ。

## 七

支那は領土も廣く、建國も久しく、その文獻の夥しきこと、殆ど世界に冠絶して居る。然しこれらの文獻は、已に述べた如く、今猶ほ未整理の状態に在る。之を利用する前に、先づ之を整理せなければならぬ。支那には有益な参考書も澤山出來て居るが、何れもその分類や、順序が十分でない爲め、非常な時間と勞力を費さねば、利用することが出來ぬ。例へば『說文解字』の如き、支那の文字を研究するに、必要缺くべからざる書物であるが、實用には中々不便が多い。この不便を救ふ爲には、『說文通檢』などいふ書物も出來、字畫によつて文字を検索する仕組で、幾分便利になつたが、支那人の仕事として、檢字には番號を附けながら、本文には番號を附けてないから、折角の計畫も、目的の大半を沒了して居る。

また『四庫全書提要』は、支那書籍の來歴得失を論じた書史で、史學家も經學家も、苟も支那の書籍を利用する人には、必要缺くべからざる参考書であるが、之も使用するのに、随分不便が多い。近頃『四庫全書目表』といふ書物が出來、『四庫全書提要』に収録してある、一切の書籍の題目を表に開列して、一目瞭然たらしめてあるが、頭腦のない支那人のことゝて、單に書目を排列したのみで、肝心の卷數——『四庫全



書提要』の那邊に問題の書籍が収録されてあるかを示すべき卷數——を缺いて居るから、折角の著述も便利といふ目的を、大半没了した譯である。〔更に最近に上海の大東書局から發行された、『四庫全書總目索引』はやゝ改善されて居るが、まだ十分でないと思ふ。〕その他『圖書集成』でも、『文獻通考』でも、所謂類書は皆實用に不便が多い。新しい頭腦を有つた人が、その分類や順序を改正したならば、利用者は多大の便宜を得べく、自然専門以外の人々も、之を利用する機會が多くなるに相違ない。これらの事業そのものは、或は研究といへぬかも知れぬが、その支那學研究に裨益する點からいへば、直接の研究その者に劣らぬ事業と思ふ。

## 八

最後に少しく事柄は違ふが、全く無關係でもないから、序に茲に申添へ置きたい。吾が輩の見る所に據ると、我が國の支那史學者が、世界の學界に貢獻すべき事業として、尤も適當なるものは、支那歴代の正史の整理に在ると思ふ。今より十年許り以前、吾が輩が支那に留學の當時、確か明治四十年の春頃かと記憶するが、露西亞の

シリミアトニコフといふ學者が、佛蘭西の支那學者シャヴァンヌ Chavannes を主任として、世界各國の支那學者三十四人の賛同を求め、更に日本・支那・露西亞・英國・獨逸等の諸皇帝及び佛蘭西・米國の諸大統領等を、名譽保護者に仰いで、支那歴代の正史の翻譯を計畫したことがある。吾が輩も當時その賛同を求められた一人であるが、その以後の消息を承知せぬ。多分この計畫は中止されたものであらう。この計畫は中止されたが、兎も角も歐米の學界で、支那歴代の正史の翻譯の必要を感じて居ることは、疑ない事實である。『史記』の大宛傳とか、『漢書』の西域傳とかは、英譯又は佛譯されたが、一の正史も完全には、まだ翻譯されて居らぬ。シャヴァンヌが畢生の事業として着手した『史記』の佛譯も、その五卷を公にしたのみで、中絶の姿となつたのは遺憾千萬である。

正史の翻譯も必要であらうが、それよりも正史の整理の方が、遙に必要かと思ふ。少くとも正史の整理の方が、日本の學界にとつても、支那の學界にとつても、歐米の學界にとつても、等しく必要なるに相違ない。支那の正史には、記事それ自身に隨分矛盾もあり、また流傳年久しき間に、その本文の字句に誤脱を生じた場合もある。



これらの矛盾誤脱を訂正することが一番の必要である。支那の學者も随分校勘には努力するが、彼等の力では到底十分なる成功は六ヶ敷しい。

一例を挙げると『三國志』に引ける『魏略』の西戎傳に、印度のことを記して、  
車離國。一名禮惟特。

とある。この車離國は『後漢書』の西域傳には東離國となつて居る。所有支那の校勘學者も、この車離國又は東離國の正訛異同に就いて、何等の斷定を下さぬ。佛蘭西のシャヴァンヌは、先年『後漢書』の西域傳及び『魏略』の西戎傳を佛譯し、之に註釋を加へて學界に發表したが、この車離國若くば東離國は、不明として何等の解釋を與へなかつた。吾が輩の知れる限りに於て、東西の學者の中に、未だこの『魏略』の一節を十分に解釋し得た人が見當らぬ。

吾が輩はこの車離國は離車國の誤で、『後漢書』の東離國は更に車離國を誤つたものと確信して居る。離車とは佛書に毗舍離國離車民衆とある離車で、或は黎車や梨車に作られて居る。離車・黎車・梨車は、何れも梵語 Lichavi (栗咭毗) の音譯で、Lichavi は Vaisali (毗舍離) 附近を占領して居つた種類の名で、その一名若くば總名を

Vijji といふ。『魏略』の禮惟特は疑もなく惟禮持の誤で、即ち Vijji の音譯である。佛書には或は弗栗持又は婆栗閣等の字面を當て、居る。此の如くして『魏略』の一節は始めて完全に解釋出来る歟と思ふ。さるにても僅々八字の中に、誤字顛倒半に居るとは随分ではない歟。支那の正史の本文にかゝる類例は稀有でない。これら正史の本文の校勘は、歐米の學界で必ず大なる歡迎を受くるに相違ないと思ふ。

正史の本文の校勘と共に、その註釋の整理も亦必要である。『史記』以下の正史には、古來幾多の註釋が出来て居るが、これらの註釋の中には、本文と全然別行のものも多く、甚しきは個人々々の著書の中に、雜出散見して居るものも尠くない。故に誰人でも、正史を利用するに當つて、此等あらゆる註釋を、彼此參考することは、殆ど實行不可能の状態に在る。これら各書に散在する註解を、その適當なる本文の下に排列會合せしめ、且つその是非取捨を決定し、更にその誤れる所、足らざる所に補正を加へることが必要と思ふ。尙ほ又正史の本文なり、註解なりに見えて居る、重要な事柄に對して、索引を作つて、檢出の便を圖るとか、その他之に類似する、各般の



便宜を講ずるのも亦必要である。

此等の事業には、歐洲の學者よりも、支那の學者よりも、日本の學者が最も適當して居る。この邊の事情に就いては、本年一月の『日本及日本人』に、幾分詳細に申述べて置いた。之を外國語に譯出することは第二段として、先づ支那正史——正史全體が餘りに大業ならば、差當り『史記』とか『漢書』とか、將た『唐書』とか、比較的關係の廣い正史だけでも——の本文註釋を、校勘整理したならば、世界の學界に對して、不朽の偉勳を建て、學者として無上の功績を遂げる譯である。

かく數へ立てると、支那學者の手を着くべき事柄は中々多い。支那學はまだ開拓されぬ方面が多いだけ、それだけ眞面目な研究者にとりて、興味が深く、且つ功名を建て易い。吾が輩は學問に志ある有爲の士が、續々支那學研究に身を委ねんことを希望に堪へぬ。(大正六年三月『太陽』第二十三卷第三號所載)

## 支那の人口問題

### 一

支那の人口問題は、支那研究の重要な事項で、過去の支那を解釋するに就ても、將た現在及び將來の支那を理會する爲にも、決して之を忽諸徒閑に附することが出来ぬ。近時この問題が東西の學者の注意を惹くに至つたのは當然と思ふ。併し何分肝心の調査材料が十分でないから、問題の取扱は容易でない。私のこの論文も勿論不十分ではあるが、従來わが國で發表された支那の人口問題に關する論文に比しては、幾分の改善進歩あるべきを私期して居る。

支那は古代から最も住民の多い國として、世界に著聞してゐる。吳の康泰の『外國傳』に、

外國稱天下有三衆。中國爲人衆、大秦爲寶衆、月氏爲馬衆。

とある。この康泰は西曆三世紀の半頃に、南海諸國を巡歴した人故、是に由つて當



時南海諸國の間で、支那の人口を世界第一と認めて居つたことが分る。又東晉隋唐時代の佛書や唐宋時代に支那に通商したアラブ人の記録を見ても、支那の人口の衆多なることが、遠く印度人やアラブ人の間にまで、知れ渡つたこと疑を容れぬ。

元末に支那を觀光した伊太利のオドリクは、支那の住民の多數なることは、到底信せられざる程である。その多くの都會は平日に於ても、ヴェニスの大祭日の人出以上の群集を見ると云うて居る。明末に支那に布教した葡萄牙のセメド(魯德照)も亦支那は非常に住民の多い國である。二十二年間こゝに住み慣れた自分も、今尙ほ外出毎に、その住民の多きに驚く。如何に誇張して紹介しても、到底事實に及ばぬ。都會や城邑は、文字通り肩々相摩さねば通行が出来ぬは勿論、郊外の街道筋に往來する旅客の群集も、殆んど歐洲の大祭日の場合に劣らぬ。統計書に據ると、婦人、小兒、宦者、文官、軍人等を除きて、國內に五千八百五萬五千四百四十八人の丁男があると云うて居る。

兎に角、支那は過去千六七百年に亘つて、人口の尤も多き國として世界に著聞して居つた。然らば支那の人口の實數は幾何かといふと、唐の杜佑の『通典』や、元の

馬端臨の『文獻通考』等に、夏周時代の口數を計上してあるのは、姑く論外に置き、前漢以後の口數は、歴然とその當時の記録に登載されて居る。試みに各時代の口數の最も多い四五の場合を擧げると、左の通りである。

西漢平帝元始二年	(西曆二)	五九、五九四、九七八
東漢桓帝永壽二年	(西曆一五六)	五六、四八六、八五六
唐玄宗天寶十四載	(西曆七五五)	五二、九一九、三〇九
北宋徽宗崇寧元年	(西曆一一〇二)	四三、八二〇、七六九
元世祖至元二十七年	(西曆一二九〇)	五九、八四八、九六四
明神宗萬曆六年	(西曆一五七八)	六〇、六九二、八五六
清高宗乾隆四十八年	(西曆一七八三)	二八四、〇三三、〇八五
清宣宗咸豐元年	(西曆一八五一)	四三二、一六四、〇四七

勿論この口數は、何れもその儘には信用を置くことが出来ぬ。概して言へば明代以前の口數は、納税を基礎としたもの故、多くの場合隱匿の弊があつて、實數より過少に計算されてゐる。之に反して清の高宗以後は、納税とは獨立に、人口の遞加



に由つて太平を誇飾するを目的としたもの故、多くの場合、地方官憲は朝廷の意を迎へん爲に、實數より過大に計算した傾向があると思ふ。

此の如く過去に於ける支那の人口の實數は、確知することが出来ぬが、清朝の末年に立憲準備として、議員選舉の必要上、全國の戸口の數の調査に着手した。宣統二年(西曆一九一〇)の統計に據ると、支那本部十八省の口數は、三億千六百二十七萬一千である。この口數も絶對的正確のものとはいへぬが、差當り支那現在の人口は、之を目安といたす外ない。姑くこの口數を標準とすると、支那本部に於ける人口の密度は、方一英里毎に約二百十人で、日本のそれに比して、遙かに割合が低い。單にこの點より觀察すると、世間一般に信せられて居る程、支那の口數は、爾く過剰と斷することが出来ぬ。

## 二

次に支那の人口の増加率に就いては、曩に支那駐劄の米國公使で、東洋學者として聞えたロックヒルが、今より十五年前に「支那人口の調査」といふ論文の中に、この

問題に關する研究を發表したが、肝心の人口の實數が判然せぬ以上、勿論その増加率は確定し得ぬ筈と思ふ。たゞ過去に於ける支那は、疫癘、饑饉、水災、戰亂のために、尠からずその人口の増加率を阻止されて居つた。支那の歴史を通覽すると、此等の災難が連続的に疊出して、その度毎に驚くべき多數の人命が喪はれて居る。衛生思想に乏しい支那人の間には、頻繁に激烈に虎列拉鼠疫、痘瘡等が流行し、又その死亡率が高い。香港の英國官憲の調査に據ると、支那人の罹疫者の死亡率は、歐洲人の五倍強に達すといふ。世界の中で、疫癘の爲に尤も多數の犠牲を出すのは、支那と印度と稱せられて居る。

支那は又水旱の災害が多い。統計によると、歴史に特書されてある此等の災害のみでも、約二年毎に一回の割合となつてゐるといふ。その度毎に交通の不便や、國民の赤貧や、設備の不完全や、救恤の不完全等の事情の爲に、想像以上の人命の損失がある。今年の北支那に於る饑饉の慘狀は、我が新聞紙上に委細に報道されて、大に國民の同情を動かしつつあるが、かゝる出來事は、支那では決して稀有でない。道光二十九年(西曆一八四九)の饑饉には、千三百七十五萬、光緒三四年間(西曆一八七



七一八七八の饑饉には、九百五十萬の死者を出したと傳へられてゐる。

治日少而亂日多とは支那人の常套語である。支那の歴史を見渡すと、如何にも騷亂の日が多い。この騷亂毎に、支那特有の虐殺が伴ふ。〔唐末の賊會黃巢は殺人八百萬と傳へられて居る。勿論誇張ではあるが、彼が多量の虐殺を行ふたことは事實である。〕明末の賊會張獻忠一人の手に、六十萬の平民と四十萬の婦人を併せて、すべて百萬人以上の生命が奪はれた。長髮賊の亂に、兵火の厄に死した人數は、或は二千萬人の多きに達すとさへ傳へられて居る。梁啓超は曾て支那人を指して戮民と評した。世界で尤も多く殺戮の運命に遭ふ國民といふ意味である。

或る西洋の學者は、支那名物の疫癘饑饉騷亂等は、その人口過剰の苦痛を緩和すべき自然的調節であると公言して居る。併しこれら人口の増加率を阻止した諸原因——後に述べる小兒殺害をも加へて——は、今後支那人の衛生思想が發達し、天災に對する諸般の設備が整頓し、又諸文明國の監視と干涉によつて、虐殺や殺害が抑制されると共に、次第に撤去される筈で、支那將來の人口増加率は、特別の障害出でざる限り、大に向上するものと認めねばならぬ。

三

支那の人口問題を論ずるに當つては、單にその外數のみでなく、併せてその内質にも注意せねばならぬ。已に一部の學者の注意せるが如く、支那では男子の數が女子の數に比して遙に多い。姑く宣統二年の統計に據つて、實例を示すと左の通りである。

	實 數		比 例	
	男	女	男	女
直隸省	一一、五三一、〇六七	六、六二四、六四七	六三強	三七弱
山西省	四、五二八、四四五	三、四〇〇、七一九	五七強	四三弱
江西省	八、〇三三、七五二	六、一四六、三九一	五七弱	四三強
浙江省	七、〇〇四、〇八二	五、九〇九、二三七	五四強	四六弱
貴州省	四、六三六、九六五	三、八六六、九九八	五五弱	四五強

世界で男子の割合が尤も多いと稱せられる印度ですら、男子五一に女子四九の



比率であるのに比較すると、支那に於ける男女の数の懸隔の甚しき、眞に驚く外ない。殊に外國出稼労働者(男子)の多い支那としては、愈驚くべき現象といはねばならぬ。こは勿論支那では、女子の口數調査は男子より一層困難で、多くの場合女子の調査に脱漏がある故とも想像されるが、それよりも支那では古來女兒殺害の弊風の流行したことが、この女子過少といふ現象の重要な原因と認めねばならぬ。既に『韓非子』に

父母之於子也、産男則相賀。産女則殺之。

といへば、先秦時代からこの弊風が行はれて居つた。支那の古き諺に、盜不過五女之門——五人も娘のある家は貧乏に極まつて居るから、かゝる家には泥棒が押し入らぬ——とある如く、失費の關係から、女兒は成るべく養育せぬ。北齊の顏之推の『顏氏家訓』を見ると、當時一般に女兒殺害が行はれ、有産有識の家でも、その妻妾の分娩あるときは、奴僕を産室の左右に配置し、女子を出産する場合には、母親の悲號を顧みず、直ちに之を奪ひ取つて處置したといふ。唐の白樂天の長恨歌に、遂令天下父母心。不重生男重生女といふ句があるが、こは楊貴妃の全盛時代に流行し

た生男勿喜女勿悲。君今看女作門楣といふ歌に本づき、その時代の一時的現象を歌つたものであるが、その裏面には、天下一般に女兒出産を厭忌した世相がよく洞察出来る。

女兒殺害の蠻習は、現今支那全土を通じて實行されてゐるが、殊に南支那に多い。男兒も時にこの悲しむべき犠牲に供せらるゝが、男系血統を尊重する支那人間の出來事としては、當然女兒の殺害される方が遙かに多い。信すべき歐人の記録に據ると、福建地方では、出産女兒の二割は殺害せられ、更に廣東の一地方では、女兒三人を生むと、その一人だけ養育して、他の二人を殺害する慣習であるといふ。さる西洋婦人が百六十人の支那婦人に就て、親しく調査した結果によると、一人の母親で自分の腹を痛めた十一人の女兒を殺害した者さへあると云ふ。かゝる状態から推測すると、支那に於ける男子の女子に對する割合が、世界無比の高率なるのも當然かとも思ふ。

更にロックヘルに據ると、支那に於ける男子全體に對する少年(十六歳以下)の比率は、日本のそれに較べて遙に低い。之は支那では小兒の人爲的殺害や自然的死



亡——醫術や衛生の不行届の爲め——が多いに反して、成丁の病死が尠ない故かも知れぬ。兎に角支那には比較的壯丁が多い。この人口の多い中にも、特に壯丁が多いといふ事實は、支那の人口問題を研究するに當つて、容易に看過すべからざる事項と思ふ。

## 四

かく支那には壯丁が多い割合に、古來この壯丁を利用すべき産業が起らぬ。従つて職業を求め得ぬ壯丁が多い。かくて二千年前の古代から、支那の壯丁は尠からず生活に脅かされて居る。支那に觀光する者は誰人でも、無職の遊民と生活に苦しむ貧民の多いことが目につく。乞食の多いことも支那の一名物であるが、その乞食は日本の乞食と比較にならぬ程の貧乏である。寒威酷烈なる北京の寒空に、殆んど一絲を纏はざる乞食が尠くない。乞食は論外として、一般の支那労働者の生活は頗る貧乏で、彼等の賃銀は極めて低廉である。支那内地——外國人居る地又は其附近は格別として——に於る熟練せる支那職工一日の賃銀は、五六年前

迄僅に十五錢であつた。支那職工の一日の所得と一日の食費の割合は、略同様なる英國職工の十五分の一に過ぎぬ。換言すれば生活に直接の關係ある食費を標準に、雙方の賃銀を比較すると、英國職工の所得は、支那職工の所得の十五倍に當る。支那労働者の貧乏も亦當然といはねばならぬ。彼等は實に手から口の生活を營んでゐる。彼等にとつては喫飯が生活の第一義で、喫飯以外の事は寧ろ贅澤に近い。支那人日常相互の挨拶に、日本人なら差し當り御機嫌宜敷かといふべき場合に、必ず喫飯了麼——食事なされました歟——といふのは、かゝる事情に起源したものであらう。支那人の諺に吃人家的。吃出汗來。吃自己的。吃出淚來——他人の御馳走なら腹一杯に汗の出る迄大食するが、身錢で食事するのは、涙が出る程辛い——とあるのも、かゝる境遇に在る彼等としては、無理ならぬ告白述懐と思ふ。支那人の使用する綿布は、外國から輸入されるので、當然若干高價である。低い賃銀を得る支那労働者は、比較的高い綿布を購買せねばならぬ。故に支那労働者の中には、新調の綿衣を身に着ける體驗を持たずに、一生を終る者が多い。彼等に貯蓄等の餘裕のないのは勿論である。偶然の僥倖に由らねば、彼等は到底發財の



見込がない。支那人殊にその勞働者の賭博を好む所以も、彼等が極端にまで金錢に執着する——日本では命から二番目に金といふが、支那では捨命不捨財といふ諺がある如く、生命以上に金錢に執着する——所以も、すべてかゝる事情から起つたものと思ふ。彼等の餘り芳しからざるこの習癖を嗤笑する前に、先づ彼等をしてかゝる習癖を有するに至らしめた、其境遇に同情すべきであるまい歟。

## 五

祖先に厚き憧憬を捧げ、郷里に強き執着を有する支那人は、固より海外移住を好まぬ。歴代の支那政府も亦、海外移住を奨励せず、寧ろ多くの場合之を禁止してゐる。之に拘らず事實支那人の海外移住、又は海外出稼が多い。こは生活の困難に強迫された、不本意の移轉である。支那人の海外移住は可なり古い。後くも元明の頃には、相當に南洋方面に出掛けてゐる。最近の『英文支那年鑑』に據ると、現今海外に移住又は出稼して居る支那人の總數——臺灣、香港、澳門等の在留人を加へて——は約八百八十七萬といふ。移民の多きを以て聞えた伊太利以上である。

併しこの支那人の海外移住又は出稼も、例の米國が支那勞働者入國を禁止して以來、白人の勢力の下に在る地方では、彼等の入國は次第に禁止され、又は制限されて來た。かくこの三十年來、支那人の海外發展は頗る阻害されて居る。將來は一層困難となるであらう。職業を求め生活に逐はるゝ多數の支那勞働者は、この方面に於て可なり打撃を受けねばならぬ。

支那人の海外發展は、次第に困難を加へる間に、支那内地の産業状態は、數百年前と格別の變化が無い。否、外國との通商開くるに従ひ、支那内地の産業は、寧ろ一年と衰微して來た。彼等の小規模な原始的手工は、外國の大規模な近代的産業の爲めに、日一日と壓倒されて居る。一二の實例を示せば、今より七八十年前まで、江蘇地方で紅布といふ一種の木綿織物が盛に製出され、それが外國商人の手を経て、十八世紀より十九世紀の初半にかけて、可なり多量に海外に輸出された。當時支那より外國へ輸出する貿易品は、茶、絹について、この紅布であつた。紅布は外國で普通ナンキーン(Nankeen)として知られて居る。こは主として南京附近から産出された故である。この織物は海路を経て、印度、英國、米國方面まで輸出せられ、又陸路



を経て露西亞中央亞細亞方面に販賣された。就中露國と米國で尤も多く需要された。この需要に應ずべく、江蘇地方一帶の機業は空前の活況を呈した。されど十九世紀の半頃から精巧にして低廉なる外國織布が市場に現れて來ると、支那の紅布は忽ち之に壓倒せられ、之れが爲に幾十萬の失業者を出した。現今では支那は木綿織布の輸入國として世界に聞えて居る。日本英國印度の綿布にとつて、支那人は第一の華客である。支那綿布の輸出などは、全然過去一場の夢となつた。

## 六

絹は頗る古き時代から東西兩洋間の重要な貿易品であつた。この絹はすべて支那から世界の市場に供給されたものである。古代に於ける希臘人の東洋貿易も、中世に於けるアラブ人の支那貿易も、近代に於ける歐洲人の支那貿易も、皆この絹の買入を第一の目的とした。過去二千餘年間、支那人は絹の貿易に依つて、莫大の利益を占め得た筈である。日本の如きも徳川時代の中頃まで、多額の絹絲絹布を支那から輸入した。併し今日では、その後進の日本絹の爲に、支那絹は年々そ

の販路の縮少を餘儀なくされてゐる。大正五年度の統計を見ると、世界の絹貿易額の中で、日本は約その五割二分を占め、支那は僅に二割七八分を占むるに過ぎぬ。支那茶が海外貿易品として、重要な位置を占むるに至つたのは、比較的近代のことである。歐洲殊に英國で、支那茶の需要が盛となつたのは、十七世紀の末期からである。十八世紀から十九世紀にかけて、英國の支那貿易は、茶を中心とした。この支那茶も、近時次第に印度茶や錫崙茶の爲に、その販路を侵略されつゝある。今日では英國の市場は、殆んど全く印度茶錫崙茶に占領されて、支那茶は影を絶つた。米國に於ける支那茶の需要も、最早衰退期に向ひつゝある。唯一の露國のみが、依然として支那茶を需要するが、これも露西亞の國情の不安の爲め、尠からざる打撃をうけて居る様子である。最近三十年間の世界に於ける茶の貿易額を調べて見ると、印度茶錫崙茶、日本茶瓜哇茶は、この期間に何れも十割乃至二十割位を増加せるに對して、獨り支那茶のみは、却つて二割以上を減じて居る。是に由つて支那に於ける多數の製茶従業者——支那國內で製茶事業に直接に關係せる人數約六千萬とさへ傳へられて居る——の生活が、尠からず脅かされつゝあることは



想像に難くない。

要するに保守的なる支那の産業は、進歩的なる世界の産業界より、着々落伍しつつある。百年前までは、有名なる輸出國として知られた支那が、この百年の間に全然輸入國となり、年々多額の正貨支拂を餘儀なくされつゝある一大原因は、この産業の萎靡不振に歸せねばならぬ。之が爲に支那人は、不知不識の裡に、その職業を失ひ、生活の苦を加へつゝある筈と思ふ。

## 七

支那の人口は多いが、之は寧ろ第二の問題である。職業を得ざる、若くは生活に脅かざる、労働者の多數なることが、より緊要なる問題であらねばならぬ。一面ではこの労働者の数が、層一層増加する間に、之に對する職業は増進せず、却つて減退せんとする。茲に支那將來の一大禍根が伏在せぬであらう歟。過去の支那に於て、無職の窮民が流民とも流賊ともなつて、國家の重大事件を惹き起した場合は多い事實を記憶する者には、誠に寒心すべき状態と思ふ。

支那人が過激化するや否やの問題に就いては、種々の意見が發表された。或る者は之を肯定せんとし、或る者は之を否定してゐる。吾が輩も勿論この大問題に就いて、自信ある確答は出來ぬ。たゞ支那の労働者の過多なること、此等多數の労働者を利用すべき産業の不振なること、彼等の多數は生活の困難に呻吟しつゝあること、恒産なき彼等に恒心なきこと、彼等の柔順穩和は消極的で積極的でないこと、彼等が生活に強い執着を有すること、彼等の雷同性に富むこと、此等の事情を併せ考へると、彼等の將來に對して、あまり安心を置くことが出來ぬと思ふ。

支那では古來革命を是認して居る。彼等に從へば、多數の國民の利害を無視する、若くは之に反對する皇帝や政府に反抗するのは、即ち天意を奉ずる所以で、至上の道德である。これが支那人に限つて是認されて居る、所謂謀反の權利である。支那人は國家に對しては謀反の權利を主張するが、社會に對しては生活の權利を主張せぬ。併しこの兩主張の根柢には、幾分の共通點がないでもない。存外容易に一方から一方に轉換し得るかも知れぬ。無智なる支那の労働者は、世界を震撼しつゝある新思想を理解せず、又理解しようとも努めぬ。事實農業方面に於ても、



工業方面に於ても、支那では未だ労働問題は起つて居らぬ。されど現在の状況は、必ずしも將來の保證とはならぬ。若し煽動者があり、指導者があれば、生活に困苦せる支那労働者は、縦合過激化せずとも、意外に動搖せぬとも限らぬ。かゝる場合に、彼等の無智は、容易に煽動に乗する恐が多い。兎に角この點について支那の現狀に、幾分不安の陰翳の存することは、掩ひ難き事實である。

## 八

近年支那を觀光した米國のデューウェー博士は、『亞細亞』誌上に『支那不振の原因』といふ一論文を發表した。その議論の要點——大正九年九月の『支那』による——は、

支那不振の大原因は、人口の過剰に在る。これが過去に於ける所有支那の弱點の源泉であつた。この原因を排除するには、事情の變化、周圍の變化を必要とする。それには近代の産業法を移入するのが、最も效力ある唯一の方法である。現在未だ使用されざる支那の天然の富源を以て、鑛山、鐵道、製造業を起

せば、現在に於て危難を冒さずには使用することの出來ない、國民のエネルギーの新らしい流出口を造ることが出來るであらう。

といふにある。吾が輩はデューウェー博士の議論の或る部分には、寧ろ反對の意見を有するに拘らず、その人口過剰——正しくいへば労働者過剰——といふ事實を重要視し、その救済法として、支那國內に近代的産業を盛んにすべしといふ主張に對しては、大なる共鳴を禁ずることが出來ぬ。支那舊來の産業狀態を改良すべく、近代の工業又は産業を興すことによつて、一面では國家の富力を増進すると共に、一面では窮民に職業を與へて、社會の不安を緩和し得る道理である。

所謂支那通の中には、支那政界動搖の源は軍閥にありとして、裁兵を高唱するものが多い。この意見は當然と思ふが、たゞ支那では古來軍隊は半は無職の遊民の收容處で、一種の消極的救済機關となつて居る。故に軍隊の解散には、大なる思慮を要する。不用意なる解散は、労働者の過剰に一層を加へ、却つて將來の不安を醸すかも知れぬ。裁兵問題は、是非共産業改良の基礎確立後に實行すべきものと思ふ。(大正九年十二月二十八日稿)(大正十年一月『大阪時事新報』所載)



昭和二年六月十五日印刷  
昭和二年六月二十日發行

正價金參圓八拾錢

禁  
不  
許  
漢  
譯  
複  
製

著者 桑原隲藏

發行 八坂淺次郎

印刷所 弘文堂印刷部

發行所

發賣元

京都 丸太町寺九番  
電話 二〇〇九番

東京 神田區 淡路町二丁目四番  
電話 二七九五番

弘文堂書房

弘文堂東京店

製本所弘文堂工場



29 146

桑原隲藏著 東洋史說苑	三・八〇	松本文三郎著 佛教史の研究	三・二〇
藤代素人著 鴛筆餘滴	一・五〇	狩野直喜著 兩漢學術攷	二・二〇
青木正兒著 支那文藝論叢	四・二〇	內藤湖南著 支那上古史	二・八〇
鈴木虎雄著 支那詩論史	二・八〇	矢野仁一著 近世支那外交史	六・五〇
同 著 支那文學研究	六・五〇	羽田 亨著 西域史	三・六〇
同 著 白樂天詩解	二・八〇	小島祐馬著 古代社會思想	一・八〇
狩野直喜著 支那學文叢	三・五〇	湯淺廉孫著 訓話學史	三・五〇
矢野仁一著 現代支那研究	三・二〇	本田成之著 支那經學史論	三・二〇
同 著 近代支那論	三・〇〇	青木正兒著 支那文藝思想史	四・五〇
同 著 近代蒙古史研究	四・五〇	神田喜一郎著 支那金石學史	四・五〇
同 著 近世支那史	四・五〇	內藤湖南著 支那史學史	四・五〇
內藤湖南著 日本文化史研究	三・二〇	鈴木虎雄著 支那文學史	三・二〇
內藤博士 支那學論叢	八・五〇	武內義雄著 先秦儒學史	四・五〇
還曆祝賀 支那學論叢	三・〇〇	武內義雄著 支那學論叢	三・〇〇
武內義雄著 老子原始	三・〇〇		

近刊

三・二〇  
二・二〇



